
FateでIS

武器屋の店員 A

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e で I S

【Nコード】

N 5 0 7 4 Z

【作者名】

武器屋の店員 A

【あらすじ】

主人公が、死ぬ↓能力ゲット↓転生という流れで、F a t e に登場する能力をぶら下げてI S インフィニット・ストラトスの世界へ行く話。

主人公は人としてズレています。そして転生した主人公がただひたすらに無双するお話ではありません。さらにT S 要素もあります。

0 (前書き)

描写？へったくそですけど？

文章力？10年前に捨てましたけど？

0

side:???

すぐ近くから悲鳴が聞こえる。

誰の？

分らない。

ぼんやりと空を見上げる。

見上げる？

いや、俺は前を向いているはず。

ああ、仰向けになっているのか。

軽く息を吸う。

肺の中をガスの臭いが満たした。

近くに車でもあるのか？

視線を横にずらす。

眼に入るのは、鮮烈な赤。

なんだこれ。

ああ、俺の血か。

きつたねえなあ……。

side out

side：神

さーて、困った。

目の前で煌々と燃え上がり、もはやダークマターと化した書類を見て、何度目か分からない溜め息をつく。

「ハア……どーしよっかなー……」

……ん？ あ、どーもみなさんこんにちは。 え？ ボクですか？

ボクは神です。 っていうか上に書いてあるじゃないですか。 神ってそれくらい知っておいてくださいよ。

…… え？ 知ってる？ あっそ。

っていうかちよつと聞いてくださいよ。 実はボク、今ひじょーに困ってるんです。

ついさつき書類が燃えたんですけどね、その書類っていうのが『1人の人間の人生』が記された書類なんですよ。 それが燃えるってい

う事は、即ち『死』を意味するんですけど、まあつまるところ、とある人間がさつき死んだんですよ。……え？　その何が問題なのかって？

いや、ただ死んだだけならいいんですよ。問題なのは、その人間の寿命が70年近く残ってることなんですよねー。

「ほんと、なんで死んだんだよ……」

この時、ボクは目の前の処理に気を取られたせいで、あることに気が付かなかった。

実は書類は2枚重なっている状態で、燃えたのも当然2枚だったということに。

……うるさいな！ 神様だって全能じゃないんだよ！

side
out

0 (後書き)

黒髪っていいよね。

1（前書き）

ただ助けを待っただけなのか？ただ流されるだけなのか？

じゃあお前は一体何のために生まれてきたんだ？何をして生きた証を刻むんだ？

何かを為す自信が無いのか？何もしないまま終わるのか？分からないまま、答えられないまま終わるのか？

ただ待つてるだけじゃ始まらない。ただヒーローを待っただけじゃ何も変わらない。今を変える方法は1つ。

他の誰でも無い、お前がヒーローになるんだ。

——アンパンマン

何も無い、ただ限りなく白が広がる空間。

そこに立つ1人の少年と1人の子供。

少年の方は学生服に身を包み、その眼はどこか虚ろで、見ていると吸い込まれそうになる。きっと変わらない吸引力を誇るに違いない。対して子どもの方は、『NIKE』と書かれたジャージを着ている。無論、上下セットだ。ちなみにオレンジ色である。

以下、子どもをNIKE、少年をダイソンとする。

NIKEがダイソンを上から下までじつくりと眺め、口を開いた。

「えーっと、ヤマダ コウスケ山田幸助くんだよね？」

山田幸助と呼ばれた学生服の少年——ダイソンは、NIKEの問いに対し、まったくの無表情で返す。

「はい」

……二人の間に生温い沈黙が流れる。

先にギブアップしたのはNIKEだった。

「あ、あのさ、やけに反応薄いね」

「ええ、まあ」

……再び沈黙が支配する。

「えーっと、TPPって何の略か知ってるかな？」

「ちん。っぱ」

……。

「あー、そのー、とりあえず現状を伝えるけどね？　ボクは神様で、キミはもう死んじゃったんだよ」

「そうですか」

自身の正体と、相手の状態を明かしたにもかかわらず、それでも一向に表情を崩さず、平淡な声色で返し続けるダイソンに、NIKEはどこか恐怖にも似たものを感じていた。

（なにこの人間。正直気持ち悪いんだけど。っていうかここまで会話のキャッチボールが成り立たないなんて……）

しかし、このままというわけにもいかない。

NIKEは気を取り直し、再び言葉を投げかける。

「た、確かにキミは死んだんだけどね？　人間には押し並べて『天寿』っていうものがあるんだ。でもキミの場合、その天寿を全うする前に死んじゃったんだよね」

しかし、

「へえー」

ダイソンはNIKEからのボールを全力で地面に叩き付ける。フォークなどというレベルではない。キャッチボール？ 何それ？ 的な状態どころではない。

引きつった表情を浮かべながらも、NIKEは必死に食い下がる。

「キミが死んだ年齢は16歳。でもキミの本来の寿命は88歳。つまり、キミには最低でもあと72年は生きてもらわないといけないんだ」

「……なんですか？」

！！

ここにきてようやくダイソンが反応を示した。思わず感嘆符を使うくらいびっくりである。

NIKEは密かに達成感に浸りながら、ダイソンの放った問いにたいして返答する。

「いや、なんでって言われても……。ルールだからとしか言いようがないなあ」

「誰がどのような理由の下で定めたのかも分からないようなルールに従えと言っのか？」

突如として早口で饒舌にまくしたてるダイソン。一体どうしたというのだ。

「えっ、いや、だか」「ふん、馬鹿馬鹿しい。結局神といえど、他人が勝手に作ったわけのわからないルール1つままならんとはな。そうやって自分が何のために何をしているのかも分からないまま朽ちていくがいいさ」

さらに口を高速で回転させるダイソン。傍から見れば、高校生が小学生をいじめているようにしか見えない。

「大体、俺は死んだのならそれはそれで構わん。さっさと地獄なり地獄なり、どこへでも連れて行け」

なぜ行き先が地獄一択なのだろうか。というか登場から1話も経っていないにもかかわらず、早速キャラ崩壊を起こしている。

NIKEはダイソンの剣幕に、若干涙目になりながらも声を張り上げる。

「だから！　そういうわけにはいかないんだよ！　キミは最低72年は生きなくちゃいけないの！　その後は好きにしていいいからさあ！」

「黙れ。面倒だ」

「生きるのがめんどろってどういうこと！？　っていうかキミの死因からして意味不明だよ！　なんなんだよ！　」気が付いたら車道にいて、気が付いたら車にはねられる』って！　そんな投げやりな死因初めて聞いたよ！」

「そうか。奇遇だな。俺もだ」

「うがあああつ！ なにコイツ本当にめんどくさい！ ねえもう頼むから早く転生してよ！ 転生後の世界もステータスも決めさせてあげるからさあ！」

「おーこーとわーりしますー。おーこーとわーりします断固」

「そんな微妙にマニアックな曲よく知ってるね！ 正直『だが断る！』って来ると思ってたよ！ っていうか断らないですよ！」

「おーこーとわーりーしーまーすー。ご遠慮しますー」

その後もひと悶着あり、なんとかダイソンの説得に成功するNIKE E。

ちなみにこの間、ずっとダイソンは無表情を崩すことは無かった。

さて、気を取り直して

「……………それで？ キミはどんな能力が欲しいの？」

N I K Eは顔面の筋肉全てで疲労を表現しながら訊ねる。

対するダイソンは相も変わらず無表情だ。

「あ？ ああ、別になくてもいいかなー」

「いや、キミは何の能力も無い状態で行ったら『つまらん。飽きた。死のう』とか言っつて自殺しそうじゃん。一応ボクからも妨害はするけどさ、それじゃあ意味が無いんだよね」

なんと鋭い洞察力であろうか。さすがは神。

N I K Eの言葉に、ダイソンは何やら思案するように顎に手を当て、

「……そうだなー……じゃあさ、F a t eのバーサーカーとアーチャーのスペックが欲しい」

「スペック？ まあ良く分からないけど分かったよ」

「あ、ちなみに4次と5次両方で頼む。一回やってみたかったんだよねー。ゲートオブバビロン、みたいな………ってちよっと待った」

ダイソンはN I K Eにそう言うと、1人思考に陥った。

（4次と5次って言ったけど本当に両方いるのか？ 剣製が出来ればバビロンいらなくね？ 役割かぶってね？ いやでも待てよそもそもバビロンは発動者の保有する財によって威力は変わるわけだから俺が使っても意味が無いのかいやそうとは限らないスペックの中に財が入っていれば十分運用可能だむしろ剣製の方が心配だな剣製はアー

チャーの知識と記憶があればこそ可能なのであつて俺なんかが技術だけ持つても仕方が無いしつまりギル様の財があれば万事解決か？……うん）

わずか1秒程で思考を切り上げ、NIKEに向き直るダイソン。なるほど、確かに気持ち悪い。

「とりあえず、さっき言ったスペックの中にエミヤの持つ知識とギルガメッシュの財、この両方を含めてくれ」

「??? あー、うん。了解」

NIKEは頷きつつも、実際にはよく理解していなかった。子どもには早かったようだ。

「えっと、それじゃあ転生する世界は、そのF a t e ? の世界でいいの？」

しかし、そこで肯かないのがダイソンである。

「いや、アニメとか漫画の世界に行けるっていうなら、ISの世界に行きたい」

「……アイエス？」

「インフィニット・ストラトスだよバカ」

1 (後書き)

筋肉筋肉
}

2（前書き）

私は知っている。世の儚さを。
私は知っている。限りなき苦しみを。
私は知っている。"力"の行く末を。
私は知っている。私の人気を。

——モッピー

「おい！ パスしろよ！」

ボールが規則的に跳ねる音と、室内シューズと床の摩擦音が耳に鬱陶しくまとわりつく。

「おい、デュエルしろよ！」

「うつせー蟹！」

ああ、本当に五月蠅い。

”私”は伏せていた顔を徐ろに上げた。

眼前に広がるのは、運動部が調子に乗る暑苦しい光景。

今は体育の時間。種目はバスケット。場所は某中学校の体育館。本来なら別々の場所でスポーツに興じるはずのこの時間。しかし今日は珍しい事に、男女の場所が偶然重なったのだ。

ちなみに私は隅っこで体育座りをしている。

何故か。答えは簡単。仮病を使って見学にしたのだ。

具体的には、

「安西先生、バスケットかだるいです」

「じゃあ八神さんは見学だね」

といったやりとりが先程なされた。

と言っても、別に本当にバスケットがダルかったわけでは……うん。やっぱりダルかったわ。

ってそうじゃなくて、体育を見学しているのにはそれなりの理由がある。

その理由とは、即ち私のチート能力である。

私が参加すると、それは最早スポーツではなく、一方的な蹂躪となるのだ。

故に、私は見学に徹している。

ピッ！

甲高い笛が鳴り、コートに入っていたクラスメイト達と、脇に待機していたクラスメイト達が入れ替わる。

私はそれをぼんやりと眺めながら、特に何も考えていなかった。

すると不意に、私の前に人の気配が現れた。

「ユウはまた見学？」

そう言つて私に声をかけてきたのは、クラスメートA。

名前は……なんだっけ？

「うーん、参加したいんだけど……。ほら、私が参加したらさ……」

「まあ確かに、ユウが入ったチームは絶対に負けなくなるもんね」

私の身体能力についてはクラスの誰もが知ることである。なので、今となつては体育不参加の私を咎める者は一部の例外を除いて殆どいない。

そう。一部を除いては。

「ちょっとユウ！ サボつてないで入りなさい！」

再び私を呼ぶ声がある。地平線の彼方から、ビックバンの彼方から、私を呼んでる声がある。

あー、めんどくさい。

「いや、でm」でもモテクラシーも無い！ いいからそっちのチームに入って！」

私が断ろうと声を上げるも、それを遮る甲高い声が体育館に木霊する。

その声の主とは……

「^{ファン}凰さんも懲りないねえ」

誰かが呟いたがその通り。一部の例外にして声の主とは^{ファン}凰鈴音その人である。

こげ茶髪、ツインテール、黄色いリボン、低身長、ちっぱい。

このくらい特徴を挙げれば十分だろう。

彼女には何故か毎度の如く目の敵にされている。

いや、目の敵というより、ことあるごとに突っかかってくるのだ。

私が何をした。

「……はあ。仕方が無い」

私は嘆息し、犬歯をむき出して威嚇しているお姫様のもとへとくだらと歩を進み「なにしてるのよ！早く来なさい！」駆け足で向かった。

さて、遅くなったが、物語の開始を告げよう。

この物語は、かつては山田幸助（♂）、今は八神 優（♀）である私が、主人公、織斑一夏を殴ったKILLER物語である。

2 (後書き)

あー、ホント分かりにくいなー。

主人公の紹介　ゝ本当はこんな章、作りたくなかったよゝ（前書き）

主人公の紹介です。かなりのクズなので、読者に嫌われること間違いないし。

主人公の紹介　ゝ本当はこんな章、作りたくなかったよゝ

名前：八神優ヤガミ ユウ

性別：女

年齢：現時点で13才（リン、一夏と同じ学校）

容姿：

腰まで伸びた黒髪に、同色の虹彩。
身長は一夏よりも若干低い程度。

スタイルはそれなりに良く、何がとは言わないが、大きめである。
神から押し切られる形で貰った能力を使用すると、虹彩が赤色に染まる。

最初は「厨二っぽい！　かけー！」と、テンションが立ち上がり
「ヨだったが、2回目に気付いた時はすでに冷めていたのか、特に
何のリアクションも示さなかった。

性格：

天の邪鬼。それでいて面倒くさがり。

綺麗な言い方をするならば、『あまり出しゃばらず、どちらかと言うと控えめ。能力の関係上、自分が何かをすると既に結果が決まってしまう（例えば体育では無双してしまう）ので、極力何もしないようにしている。しかしそんな中にもしっかりと芯を持っており、他人や周囲に流されるのを嫌う』といったところ。

一応外面はいいようで、キャラもがつつり作りこんでいる。

本人は愛想笑いとポーカークフェイスに絶対の自信を持っており、曰く、それが対人関係において最大の潤滑剤であるとのこと。

好き：音楽鑑賞（V系と電波ソング）

嫌い：虫、他人、自分、鈍感主人公、努力、人の多い場所、流行

能力：

エミヤ、我様、巨人、甲冑の能力を持つ。

具体的には

- ・ 投影魔術
 - ・ 無限の剣製
 - ・ 王の財宝
 - ・ 武芸百般をこなすセンスと身体能力
 - ・ アーサー王をも凌ぐ剣術
 - ・ 拾った武器でも宝具クラスで扱える能力
- e t c . . .

しかし、渡すべき能力の取捨選択が出来なかった神のせいで、本来はあまり必要の無い余計なものまで付いてきている。

- ・ 赤い弓兵の家事、主人公スキル（朴念仁的なアレも含む）
 - ・ 黒いデカブツの履かないスキル（基本的には家では履いてない）
 - ・ 金ぴかAUOの慢心スキル（慢心せずして何が王か！）
 - ・ 基本的に自分を責め、他人に許されると不安になる（何故罰さなのですか！）
 - ・ 単独行動⇨協調性の無さ（何者にも縛られない俺、マジカッコイイ）
- e t c . . .

その他：

自殺が出来ない。事故死もしない。最低72年間生きることが既に決まっている。

こんなもんかな？ あとから追加するかもしれないです。

主人公の紹介　　～本当はこんな章、作りたくなかったよ～（後書き）

I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .

私は剣の骨です。

3（前書き）

何と言われたって、それがどうしたと。

誇れるものがあるなら、どんなもんだと。

前を向いて、僕は僕なんだと、胸を張り続けるんだ。

そうしていれば、君は1人だって大丈夫。

僕が居なくても、君は未来へ歩いて行ける。

——ドラえもん（旧）

時は遡り、入学式

まだ少し肌寒いこの季節。風に舞う桜の花びらを視線で追いながら、新たな学び舎となる場所へと足を踏み入れる。

俺が私となつて、12年が過ぎた。

最初こそあの糞餓鬼（自称神）を再起不能に追い込んでやろうと思つていたが、今となつては八神優である事にすっかり慣れていた。

と言っても、自分が女であることや、八神優という者の存在を肯定するつもりは毛頭ない。

『慣れた』というのは、『八神優というキャラクターを演じる事に慣れた』という話だ。

がらんどうな俺を覆うハリボテ、それが私。そう割り切ることで、私はまだ俺でいられる。

「あつ、ユウ！ おはよう！」

校門を過ぎた所で、誰かが手を振りながらこちらに近づいてくる。誰だあいつ。確か小学校の頃にも見たことがあるような気がしなくもない。相手の態度から察するに、自分と彼女は知り合いなのだろう。

「うん。おはよう」

顔の筋肉を動かし、柔らかい微笑みを形作る。ラグもムラも作るな。無理にでも自然な笑みを作れ。

今の私は八神優だ。

「もうクラス表って見たの？」

彼女……仮にAとする。Aは私の顔を覗き込むようにして訊ねてくる。ちょ、顔近い。邪魔。

「ううん、まだ見てないよ。そういえばクラス表ってどこにあるの？」

完璧な切り返しだ。さすが私。

そしてこの後の流れも容易に想像できる。というかそういう展開に持っていくための私のセリフなのだから。

ずばりその展開とは、これから一緒に見に行く。或いは張り出されている場所まで案内してもらえるに違いな「それがアタシも分からないんだよね」

なんだと？

「ユウなら知ってると思ったんだけど……うーん、どうしよう？」

Aはへらへらと軽く笑いながら頭を掻く。……ふう、少し落ちつけ。私は今、八神優だ。ならば完璧であれ。

内心でAに役立たずの烙印を全力で叩きつけ、先程と変わらぬ完璧な笑みを浮かべる。

そして私はこの状況を打開すべく、ある提案を掲げた。その打開策とは……

「じゃあさ、あそこにいる人に聞いてみようよ」

そう。他力本願である。何か文句でもあるか？

余談だが、他力本願とは本来、仏教用語で『阿弥陀如来の本願力による浄土往生』を指す。平たく言えば、『自力で極楽に行けるなど思い上がりも甚だしいわ！』ということである。つまり、他人に頼りきり、主体性が欠如している状態を指すのは厳密には誤りである。

さらに余談だが、この『余談だが——』という解説文は遼ちゃんがよく使うものである。遼ちゃんが誰か分からない人は、歴史好きな

お祖母ちゃんにでも聞いてみよう。

閑話休題

私が指をさした先——そこには1人の男子生徒の背中がある。

その男子生徒は、どうやら入学案内のプリントを読んでいるようだ。きっとそこに校舎の見取り図的なものがあるに違いない。いや、あったらいいね。

分かりきっていることだが、私達2人はそのプリントを持ってきていない。私に関して言えば紙飛行機にして窓から飛ばした。ホントに何をしているんだ私は。AUOの慢心スキルでもうつったか？……いや、関係無いか。

私はAを連れ、その男子生徒の元へと歩み寄った。

「あの、すいません。ちょっといいですか？」

少しどころか案内までさせるつもりだけだな。

私はそんな内心は一切外には出さず、男子生徒の返事を待った。

この時、私は何故この男子生徒に声を掛けてしまったのだろうか。

元男であることが原因で、無意識のうちに男の方が話しかけやすいと思ってしまったのかもしれない。もしくは、それこそ慢心していたのかもしれない。慢心と言うより、油断、平和ボケと言った方が

適切か。或いは忘却か。

私はこの時まですっかり、この世界が何なのかということを失念していたのだ。

いずれにせよ、私はこの選択を……ひいては、この先起こるであろう未来、そしてそれに自分が関わってしまうという事を激しく後悔するはめになる。

私の声に気付いたその男子生徒が、ゆっくりと振り返る。

「ん？ どうしたんだ？」

そう言つてニコリと厭味の無い笑顔を魅せる男子生徒。対照的に、私の笑顔は凍りつく。

忘れてた

やっちゃまった

Oh . . .

様々な言葉が脳内を飛び交う。だが待て八神優。フリーズしている場合じゃない。私は八神優なのだから、この程度で動じるわけにはいかない。

「実はクラス表がどこに貼り出されているのか分からなくて……」

脳から指示を出し、口を動かし、言葉を紡ぐ。それだけの動作がひどく困難に感じる。

「だったら一緒に行こうぜ？ 俺もちょうど行くところだからさ」

「ホント！？ ありがとうー！」

隣にいるAが、やたらと高いテンションで了承する。そりゃあ、運よくイケメンが引っ掛かったんだから、テンションも上がるか。

私は2人と共に、校舎の中へ入っていく。

これが私と、この世界の主人公——織斑一夏とのファーストコンタクトである。

3 (後書き)

あつたまてつかてーか
さえーてぴつかぴーか
そーれがどうした
ぼくドラえもん

4（前書き）

てめえはずっと待ってたんだろ！？ 不幸でみじめな道化で終わらないで済む、ジャイ子を嫁に取らなくて済む……そんな誰もが笑って、誰もがホンワカパツパするハッピーエンドってやつを。

お前だってしずかの方がいいだろ！？ ジャイ子なんかで満足してんじゃねえ、命を懸けてしずかの風呂を見てえんじやないのかよ！？ だったら、それは全然終わってねえ、始まってすらいねえ

ポケットを漁れば叶うんだ！ いい加減に始めようぜ、のび太！！

——ドラえもん（新）

「あつ、そういえばまだ名乗ってなかったな。俺は織斑……織斑一夏っていうんだ。お前は？」

隣を歩く黒髪の少年の問いに、今までどおりの笑顔を浮かべて応答する。

「八神優です。これからよろしくね？ 織斑くん」

少年——織斑一夏も同様に笑みを浮かべる。それも、私の様な紛い物ではなく、本物の綺麗な笑顔だ。

「ああ、こちらこそよろしく」

彼の笑顔に中てられたのか、視界の脇で頬を赤らめる女子生徒がちらほらと見える。驚くべきことに、その中には男子生徒も交じっていた。アッー！

さーて、どうしてこうなった。

今私はこの男と2人で廊下を歩いている。というのも、先程クラスを確認したところ、Aだけが別のクラスで、私とコイツが同じクラスだったのだ。この時Aが何やら文句を垂れていたが、なんだかんだと言いつつもAは先に自分の教室に入り、こうして私と、隣の鈍感野郎が取り残されるという展開になったわけだが……

正直、この状況は私にとって好ましくない。

何故か。別に難しい話ではない。

1つ目に、私が本筋に関わると面倒そうだという事。イベントの内容が変わることで、予期しない死人が出て不思議ではない。

それから、これがかなり重要なのだが、私は『主人公』という生物が嫌いだ。ヤツらを見ていると非常に腹が立つ。

強引なフラグ建築、謎のイケメン力発動、それに簡単に靡くヒロイン達、非常に腹が立つ。というか理解不能だ。自分が正常だなどと言うつもりはないが、ヤツらも相当に変(態)だと思う。だから、極力この男とは関わりたくなかったのだ。

『ISをチート能力使って生身の状態でフルボッコにしてやんよwwww』

などと考えていた転生直前の自分をフルボッコにしてやりたい。何でこんな世界に転生したんだコンチクショウ。どうせならTo Heart2とかマジ恋とか俺ツレとか朝色とか恋チョコの世界にすれば良かった。

「おつ、あそこじゃないか？」

そうこうしているうちに、目的の教室へと辿り着く。

私は先程クラス表を確認した時に目にした名前を思い出し、密かに溜め息をついた。

どうせ教室に入るとすぐそこにいるんだろうなあ……。

そんな事など知った事ではないとでも言うように、隣にいるイケメソが何の躊躇いも無く扉を横に滑らさ「遅い！ 何してたのよ！」
ああ、やっぱりね。

目の前で黄色いリボンで結われたツインテールが、その名の通り尻尾のように揺れている。意志の強そうな双眸は、ただ1人の少年へと向けられている。そう、隣にいる織斑一夏に吠えているこの女子生徒こそ、私が作中であまり好きになれないキャラクター——凰鈴音だ。

「わりいわりい、実は時計の時間が少しズレててさ……」

そう言いながら手を合わせ、頭を下げる一夏。すると、鈴の後ろからひよっこりと別の男子生徒が顔を出した。

「まあ、一夏もこう言ってるし、許してやれよ」

長めの赤毛に、黒いヘアバンド。確か名前は……あーだめだ。ド忘れした。

名前が分からないので仮に赤毛君としよう。赤毛君は、そういえば……と呟き、こちらに視線を向けた。

「そっちの女子は？ 一夏の知り合いか？ ハッ！ もしやまた……」

「またって何だよ。ただ案内しただけだって。っと、そうだ八神、紹介するよ」

そう言っただけは一夏までもがこちらを向いた。というか先程から

ツインテチャイニーズがこちらを睨んでいるのですが。正直恐いのですが。

「こっちの赤毛が五反田弾、で、ツインテールの方が凰鈴音。2人とも小学校の頃から一緒なんだ」

紹介を受け、ゴタンダダンと呼ばれた男子生徒が「よろしく」と軽い調子で告げる。

対して鈴の方は、まったく笑顔になっていない笑顔を張り付けている。目が笑ってないというか、口の端が不自然に釣り上がっているだけだ。引きつった歪な笑顔のまま、私に向けて口を開いた。

「よろしく。それで一夏？ この子とはどういう関係？」

「だからここまで一緒に来ただけだって！」

一夏の言葉に、鈴はそれでも尚カンストする程の猜疑心を孕んだ視線を寄こしてくる。赤毛も鈴程ではないが、私に何かを期待するような目を向けてくる。どうやら私も自己紹介をしなければならぬ流れの様だ。

というか視線が痛い。痛すぎる。っていうか胸に物凄く突き刺さってます。どこ見てるんですか鈴さん。

「えっと、さつきも織斑くんから名前が出たけど、一応自己紹介するね。私は――」

私は再び笑顔を作り、無難な挨拶の口上を垂れる。

とりあえず私に今学期の目標が出来た。

何とかして鈴の誤解を解く事だ。具体的には、織斑一夏に恋愛感情

を抱いていないことを告げる必要がある。

でも突然そんな事を言ったら逆に怪しくないか？　というか鈴の気持ちはどうして知ってるんだってという話になるし、これはかなり言うタイミングが難しいな。

はあ、めんどくさい……。

4（後書き）

この小説モドキに対して下手に期待を持つことはあまりお勧めしません。

何故なら、この小説モドキの作者は読者の期待を悪い意味で裏切るからです。

5 (前書き)

A「(うわ…なにコイツ恐い) あ、ああ!？ なんだテメエ!」

B「(ゲツ、見るからにヤンキーだ…) つや、やんのか? あ?」

A「(なにコイツめっちゃやる気なんですけど。マジ怖いんですけど) テメエ俺はアレだしおめえ。俺がアレだって知ってて言ってるのかテメエ」

B「(え? 何? もしかして不良界では変な異名で呼ばれてるクチですか? ヤベえ俺オワタ) あ、ああアレね。知ってるし。知ってて言ってるし。ていうか俺こそアレだし。えっ、何? お前俺のこと知らねえの? それちよつとヤバいし」

A「(うわああ! 有名人だったああ!) は、は? 知ってるし、ちよー知ってるし。も、もう怒ったし。テメエ逃げるなら今のうちだぞ? マジで俺キレたらヤバいから。病院送り確定だから(俺がな)」

B「(なんか怒ってるうう! いやああ!) は? 俺の方がキレたらヤベえし。俺実は裏では漆黒の騎士って呼ばれてるし(厨二時代のコテハンだけだな)」

A「(何それこええええ! ってか超強そうじゃん! マジで帰りたいんですけどおお!) あ、ああソレね。聞いたことあるけど大したことねえし。俺も似たようなの持ってるし。むしろ俺の方がすげーし。俺はフォカヌポウ本田って呼ばれてるし。と、とにかくもう謝ってもおせえから。マジぶつ殺すから。(もうこうなったら勢いに任せるしかない…) うっほああい!」 バツ!

B「(何か構えたああ! いや死ぬ! 俺死ぬ!) そ、その構えなら知ってるし。あ、アレだろ? ナント力真拳的なアレだろ? ってかアレだし。俺の兄貴の方が上手いし。俺の兄貴その全国大会で優勝してるし(俺は何を言っているんだ…)」

A「(全国大会あんの!? てかこれって公式!?) は? 俺だっ

てしてるし。っていうか実はお前の兄貴の師匠俺だし。マジお前終
わったよ（俺も終わる）」

唐突に飽きた。

「くじ引きの結果、クラス委員は織斑君と八神さんに決まりました」

「……え？」

黒板を背に、担任の女教師が高らかに宣言する。直後、教室内の空気が弛緩していくのを感じた。

しかし対照的に、内心でダラダラと冷や汗をナイアガラもびつくりの勢いで流す生徒が1人。

無論、私である。

時は流れ、今はホームルームの時間だ。ちなみに入学式は電光石火の早さで終わった。というのも、用意された椅子に座り、校長先生とやらの演説が始まった途端、気付いたら終わっていたのだ。何を言っているのか分からないと思うが、恐らく誰かがキングダムゾンを発動したのだろう。式典中にスタンド発動とは不敬極まりない。決して私が寝たわけではない。

まあそれはさて置き、私は目の前で告げられた核爆弾級の現実に、密かに教師に向けて中指を立てた。ふあつく。

今朝、入学式が始まる前に一夏を始めとした3人との邂逅は果たした。その際に五反田弾や凰鈴音とも挨拶を交わしたのだが、どうもチャイナ娘の方は、私がおりむーさんに好意を抱いていると誤解しているらしい。誠に遺憾である。

そこにきて私と織斑一夏がクラス委員に選出されたこの状況。これでは不本意な誤解が音速を超えて深まっていくだけである。というか先程から物凄く熱烈な視線を感じる。主に凰さんの方から。もはや罰ゲーム以外の何物でもない。
まったく、私は神に嫌われるような事をしたのだろうか。……あつ、してたわ。

——だがまあ、気にしたところで仕方が無い。

「何かと縁があるみたいだな。八神、改めてよろしく」

隣に座る男子生徒——織斑一夏が、見る者を魅了するイケメンスマイルを私に向ける。

「うん、よろしく。織斑くん」

私も幾度となく張り付けてきた笑顔で対応する。ちなみにこの時、クラスの女子の頬が朱に染まったのは言うまでもないことだが、廊下の時と同様、なんと男子生徒にも同様の症状が見られた。
ISの主人公が男をも虜にするとは知らなかったな。

私は彼と笑みを交わしながら、脳内で思考を切り替えていた。
突き付けられた避けようの無い未来を受け入れることにし、後悔するのではなく、これからいかにして原作の流れからこの身を遠ざければ良いのかということを考えてといった風に。

しかし、私の目論見がいかに甘かったのかを、私はこれからの生活で知ることになる。

それから数日が過ぎた。

クラス委員という関係上、どうしても一夏と関わる時間が大きくなっていく。

そうになると、他の2人——五反田弾と凰鈴音の両名とも共に過ごす時間が増えるのは自明だった。

原作の流れにあまり介入したくないという私の思惑とは、全力で正反対の方向へと事態は進展していく。

しかし同時に、この状況はチャンスでもあった。そう、鈴が私に抱いている誤解をそげぶするチャンスだ。

「あの、凰さん？ ちょっと話が……」

「なに？」

「……な、なんでもないです」

まあ、そう簡単にいくわけがないですよーははは……はあ。

しかし事態の悪化は止まらない。

ある日、本当に何の因果か、私は偶々鈴と放課後の教室で出くわした。しかも2人きりだ。

今度こそ誤解を解くチャンス！ そう意気込み、私は口火を切った。さあ、貴様のその誤解を完膚なきまでに粉碎してくれよう。

「ねえ、凰さん」

空は昼の顔を潜め、赤く染まっている。

「……………なに？」

遙かな境界線に沈みかけ、黄昏へと迫る太陽に、凰鈴音はその不機嫌さの塊の様な顔を照らされながらこちらを向く。

私はいつも通りの笑顔を作り上げ、今日までずっと胸に秘めていた言葉を吐き出した。

「凰さんって織斑くんの事が好きなんですよ？」

「なっ……………！！！！！！！！」

安っぽい爆発音の様な音と共に、彼女の整った貌は夕陽よりもなお赤く染め上げられる。……………はて、言葉を選び間違えたか？ まあどうでもいいか、結果さえ出せば。

私が二の句を告げようとするよりも早く、彼女はやや顔を俯かせ、何やらぶつぶつと呟き始めた。

「わざわざ確認を取ってきたってことは……………やっぱりコイツも一夏の事を……………」

……………あ、あれ？ 鈴音さん？

数秒の後、ツインテールに纏めた髪を揺らし、勢いよく顔を上げる。

「分かった。アンタがこれほど大胆不敵なヤツだとは意外だったけど、相手にとって不足は無いわ」

ん？ ん？

んん？

何をどう曲解したのか。恐らく目の前の少女はかなり混乱しているのだろう。そうでなければ、今の言動に説明がつかない。そしてパニックを起こしているのは私も例外ではなかった。脳内で、どうしてこうなった のA Aがいくつも表示されている。

状況の進展に着いて行けず、目を白黒させる私に向かって、小柄な少女はスツと手を差し出した。

「あたしはアンタを対等なライバルとして認めるわ。というわけでよろしく。あたしの事は鈴^{リン}って呼んで。あたしもアンタの事はユウって呼ぶから」

「え？ あつ、はい。よろしく？」

思わず手を取る私…………… って違う！

「それじゃ、アイツ相手じゃいろいろと苦労すると思うけど、お互いに正々堂々と頑張りましょ！」

「いや、あの」

「じゃあね〜」

彼女に向かって伸ばした手は何も掴み取る事は無く、ただ静寂のみ

がそこにあつた。

ああ、ホント最悪。

そして今日結ばれた不可思議な同盟のせいで、私は翌日から彼女に名前で呼ばれるようになる。

彼女にそう呼ばれると言う事は、必然的に一夏氏の前でもそう呼ばれると言う事であり、気が付くと彼からも同じように呼ばれるようになっていた。（その呼び名は後にさらに広まり、最終的にクラスのヤツら全員からそう呼ばれることになる）

結局、離れていくつもりが、寧ろ距離が縮まり、誤解を解くつもりが、さらにその誤解を強固な物としてしまったのだ。やることなす事が力いっぱい裏目に出たのであつた。

本当に、どうしてこうなつた。

5（後書き）

展開が我ながら強引過ぎる。というか文字数の感覚を早く掴みたい。

6（前書き）

確かに世界を救った事はある。それも1度や2度じゃない。

英雄なんて言えば聞こえは良いかもしれないが、毎回誰かに助けられて、自分だけでは何も出来なくて、いつも己の無力感にぶつかっていた。

出来たことと言えば、ただ信じることだけだった。

自分はすごい、天才だ、人気者だ。ただひたすらに我武者羅に、そう信じてここまで来た。

——野原しんのすけ

その少年は何もしなくても何でも出来た。

勉強なんてしなくてもテストでは常に満点を叩きだし、練習なんてしなくてもスポーツでは同世代の子供のレベルを遥かに超えていた。少年の導きだす答えは常に正しかった。彼の両親も少年を褒め称えた。

お前は天才だ、と。

そんな少年が、周りから何も思われていない筈が無い。

そしてその少年が中学に上がる頃、事件は起きる。

事件と言っても大したものではない。ちょっとした子ども同士の喧嘩だ。

体育の時間、野球部のエースを確約されていたとある男子生徒が、件の少年に三振で打ち取られたと言っただけの話。

男子生徒は何の努力も無い、ルールすら口々に知らないような素人に敗北したという事実を認める事が出来ず、癇癢を起し、少年に暴力を振るった。

たったそれだけの事だった。

少なくともこの時、何でも出来た少年の眼にはその程度の事としか映っていなかった。

今にして思えば、その時から既に、少年の中で何かがズレていたのかもしれない。

その後、その男子生徒は野球から逃げるように退部した。暴力を振

るってしまった事に対するケジメでもあったが、何よりも、単純に自信を喪失したのだ。

野球の才能を認められていた彼は、その才と期待に恥じぬよう、誰よりも早く、誰よりも多く、誰よりも強固に、努力と研鑽という煉瓦を堆く積み重ねていた。

その塔はどこまでも高く、彼もまた、己の築き上げた物が他の者に負ける筈は無いと自負していた。

しかしその自信という名の煉瓦の塔は、突如として現れた1人の天才によって木端微塵に碎かれる。それもその天才は、経験だけならド素人に等しいのだから、精神的衝撃は殊更である。

これで自信を失うなと言う方が無理であろう。

野球を奪われた彼には何も残らなかった。

何をやっても身が入らない。何をしてもあの少年の影がまとわりつく。

あの少年なら自分よりも上手く出来るのだろう、と。

それは野球にしても同じだった。

退部しても、彼は野球が好きだった。いや、彼には野球しかなかったのだ。しかし彼が野球をしようとする度、試合を観戦する度、あの少年に負けた時の記憶がフラッシュバックする。彼は野球そのものに恐怖を覚えていた。

自分にはもとより野球しかないのだ。にもかかわらず、素人にすら敗北した自分には何がある？　こんな自分がここにいていい理由があるのか？　存在している意義とは何だ？

思考と疑問が己の中で徐々に膨らんでいく。それらはただ蓄積され、

あつという間に器を満たした。器が満ちれば待っている未来はただ一つ。

彼は自らの命を絶った。

スポーツに全力を注いできた者が、何かしらの要因でスポーツが出来なくなり、それを苦にして自殺を図る。

どこぞの物語にでもありそうな筋書きだ。しかし、今回はそれとは違う。

そこには明確な”悪”があつたのだ。

当然、彼の仲間はその天才を責め立てた。それに便乗し、普段からその天才に不満を抱いている者たちも非難の声を投げつけた。

その責められた少年自身は、胸に感じる確かな痛みに首を傾げつつも、何故自分が非難を浴びせられているのか分からなかった。

その少年にとって、勝利とは当たり前の事であり、自分に必然的に与えられるべきものだと思じて疑わなかったからだ。

やがてそれは教師の目にとまり、保護者を交えての懇談会へと発展する。

少年は担任教師と両親、そして例の男子生徒の両親、野球部の顧問を前にして、自身の正当性を主張した。

ただ自分はいつものようにやっただけだ、と。

天才と呼ばれた少年は自分に罪は無いと確信していた。しかし、直後に首を垂れたのは彼の両親だった。

少年はその姿に衝撃を受ける。少年の絶対の自信が崩れかけた瞬間だった。

教師からも、両親に同意するような旨の注意が投げつけられる。そ

れがさらに少年の心を削った。

なぜ？ どうして？

何かに罅が入るような音を感じながら、少年は脳内を疑問符で埋め尽くす。

そして両親からの言葉が、やけにゆっくりと、少年の耳に届いた。

お前が悪い。

この時、少年の心は完全に壊れた。
それと同時に理解した。

自分が人を殺したという事実を。

信じていた両親から否定された。自分のせいで人を死なせた。

失敗や挫折を知らなかった少年にとって、その事実はあまりにも重く、容易く押しつぶされる。成功だけを歩み続けた少年は、人生で初の、あまりにも大きすぎる挫折に直面した。

それから彼の両親や担任は、彼に努力の大切さを説いていたが、彼は呆然としたまま動かない。既に壊れた心に、外からの言葉など届くはずが無かったのだ。

散らばった破片を1つ1つ拾いながら、少年は全く機能しない頭で考える。

自分が悪いのか。

自分が今まで得てきた勝利は悪いものだったのか。
では自分は何をするべきなのか。

……いや、何もするべきではないのか。

組み直された破片は、元よりもさらに歪に仕上がった。中身の無い、空虚なガラス細工。

それ以来、”何でも出来た少年”は、その少年によって殺され、彼の中から完全に消え去った。

残ったのは”何も出来ない少年”……否、”何もしない少年”だった。

他人の勝利を奪わないように、もう誰も傷つけないように、もう自分が傷つかないように、

少年は自己の意志を殺し、常に手を抜き、自分の外との関わりを避けた。何かをするのが怖くなったからだ。

また自分に目を向けることもしなくなった。何かをするだけで、そこにいるだけで他人を傷つける害悪。そんな自分がひどく汚らわしく思えたからだ。

少年はいつしか、何も見なくなった。その双眸は淀み、どこまでも黒く沈んだ。

次第に少年は枯れていく。何もしなくなった生物が死へ向かうのは自然の摂理。ただ動くだけの肉塊。それは生きているとは言い難い。この頃には既に、自分の内と外の両面への認識がかなり希薄になっていた。

朝のニュース番組も、学校での授業も、出会った人間の顔や名前も、その全てが少年の空っぽな心を通り過ぎていく。

他人と触れ合う時は、別の人間を幻想し、己を覆い隠した。

今話しているのは自分ではない。別の誰かだ。自分が関われば傷つけてしまう。だからその人間になりきれ。自分はすでに死んだのだ

から。

他人に関わることに臆病になった彼は、そうすることでしか他人との関わりを保てなかった。それが、自分と外、そして内。この3つの乖離を加速させていたのだが、彼は気付かない。

しかしそんな少年の心にも、辛うじて引つかかるものがあつた。それはゲームやアニメといったものだ。内側にも外側にも向けられることの無かつた少年の視線はそれらに注がれた。

アニメやゲームなら、傷つけることも傷つけられることも無い。何かを奪う事も無い。

少年はそれらに触れる時間だけが至福だった。他人もいない、自分もない、己に仇なす物は何一つとして無かつたその世界は、少年にはひどく眩しく、それでいて暖かく映った。

しかし、かつて死んだ”何でも出来た少年”は、そんな少年が嫌いだった。

§

「Chuっ！Chuっ！ キスしてあげる 愛してあg」

けたたましく鳴り響くケータイのアラームを止める。そのまま半身を起し、ベッドから足を下ろす。立ち上がり、部屋の外へ出た。

廊下を歩き、階段を下りる。

「あら、もう起きたの？ おはよう、優」

「おはよう」

挨拶をされた。応答した。この人は……そう、八神優の母親だ。

自分は誰だ？

俺は山田幸助だ。

自分をこの世界に確立させるためのハリボテ。自分は俺の意志でこの世界に転生した。

では俺は誰だ？

私は八神優だ。

借り物のこの姿に与えられた役割はこの人の娘、そして俺の入れ物。俺が今演じるべきキャラクター。

今日はクラス委員の仕事があるからいつもより早く起きている。

「朝ごはん、もう少しで出来るからちょっと待っててね？」

私の母——ヤガミ カエデ八神楓が、包丁片手に笑みを浮かべる……って、この表現だけだとかなり恐いな。

「うん。あつ、私お父さん起こしてくるね」

そう言って、私はいつもと同じ手順でいつもと同じ笑顔を作る。

よし、今日も大丈夫だ。

人気の少ない廊下。

隣を歩く男子生徒が、私の腕に支えられているプリントの束に目を向ける。

「なあユウ、やっぱそっちも俺が持つよ」

そう言う彼の腕にも既にプリントの束が抱えられている。

「うっん大丈夫。ありがとね、織斑くん」

やんわりと断る私。このやり取りはこれで4度目である。いい加減ウザいぞ織斑一夏。

今は朝。それも、他の生徒がまだ登校して来ていないような時間帯だ。

普段の喧騒に溢れたものとはまた違った姿の校舎に、まるで世界に2人しかいないような錯覚を覚える。

ちなみに今何をしているのかというと、今日のSHR時に配布するプリントを教室まで運んでいる。ただ、そのプリントの量がはつきり言って異常だった。

2人で分割してもまだ両手で抱えなければならないのだ。これを異常と呼ばず何と呼ぶ。

「あつ、そうだ」

突如、一夏は何かを思い出したように呟いた。そしてすぐに、やや俯きがちに逡巡するような素振りを見せる。

「どうかしたの？」

訊ねながら、私は下から見上げるように彼の顔を覗き込む。

私の顔が突然近くに現れたからか、一夏は「うおわっ！」などと奇声を上げながら仰け反った。心なしか顔が若干赤くなっていた気がしたが、今はそんな事を気にしている場合ではない。何故なら、

バサアッ！

「あっ……」

「うわ……」

先程の衝撃で、一夏の手にあつた紙束が広範囲に渡って床を白く塗りつぶしたのだから。

さらに偶然、2人の生徒が通りかかった。彼らは話に夢中で床の惨状に気付いていない。

「でさー、昨日もレイカちゃんからメールが来てさー」

「だからそれサクラだって」

2人は会話しながら紙の上を通り……

クシャ、ズルッ

ごんっ！

「いやちgモルスアッ!？」

「いや絶対さkおぱんっ!？」

鈍い音と共に白き大地と邂逅を果たし、奇声を上げてその慶びを表現する2人の男子生徒。
要するに紙を踏んで滑って転んだのだ。

「……………」

私達はどちらも言葉を発さずに、目の前の現実から逃れる術を模索していた。

「…………拾うの手伝っよ」

「…………すまん、ユウ」

結局コイツがあの際に何を言おうとしていたのか聞くことが出来な
いまま、この静かで短かった時間は過ぎて行った。

6（後書き）

まだ原作本編には追いつきません。
そして伏線の設置も終わりません。
そもそも大した伏線がありません。
種明かしなんてまだまだ先です。

そんなことよりサッカーしようぜ！

7 (前書き)

お前も早く得物を出しな。

どちらが捕食者なのか、その身に直接教えてやろう。

さあ、やらないか

——阿部高和

「朝から立て続けで悪いんだけど、放課後に資料の整理を手伝ってくれる？」

「はい。分かりました」

その日の放課後

カビと埃の臭いが鼻をつく。

陽光は遮られ、薄暗さが輪郭を曖昧にし、より一層不気味さを増している。

「あつ、この資料はそこにしまってくれ」

「うん。分かった」

手渡された資料を指定された場所へ持っていく。

というわけで、今私達がいるのは資料室。私達というのは、私と一夏という意味だ。

朝から続き、またもや雑用という名の……うん。雑用は雑用か。とにかく雑用を押し付けられているのだ。クラス委員というのも大変である。特に彼に関してはバイトを休んでまで手伝ってくれている。優しすぎるといいうのも難点だという事を改めて知った。

私は作業を続けながら考える。
暇だ。退屈だ。暇すぎて死ぬ。……あ、そうだ。

たまには女子らしく恋愛話をするのもいいかもしれない。

「ねえ織斑くん」

「なんだ？」

互いに作業の手を休めることなく会話を続ける。

「織斑くんってさ、好きな人とかいないの？」

「うーん、よく聞かれるけどいないな」

静かな部屋に、2人分の声と、プラスチックのファイルとプリント用紙が擦れる音だけが響く。

「ホントに？ 織斑くんって結構モテるでしょ？」

「いやいや、そうでもないぜ？ 俺なんて全然だよ」

ついでだ。お前のその鈍さも多少は矯正してやろう。そうすれば鈴も少しはやり易くなるだろう。

ちなみに鈴は未だに私の事をライバル認定している。しかし彼女と

接するうちに、私の中での彼女の高感度は急上昇していた。
ええ子やで、あの子は。

「いやいや、そう思ってるのは織斑くんだけだよ」

「ん？　どういう事だ？」

「ほら、織斑くんってカッコイイし優しいし、気も利くし家事も出来るし、それでモテないっていう方がおかしいよ。気が付いてないだけで、織斑くんの事が好きな人は案外身近にいるんじゃない？」

「えっ……？」

ふと見てみると、彼は作業の手を止め、こちらを凝視していた。

暗がりで見分かりづらいが、顔も赤くなっている……ような気がする。

そういえば一夏がここまでストレートに褒められた事って無いんじゃないかね？

あらあら、すっかりすっかり。うふふ。

その後、物凄く気まづくなったのは言うまでも無い。

「織斑くん、これは上の方じゃない？」

資料は基本的にファイリングされており、そのファイルの背表紙には番号と簡易的な名前が書いてある。

棚を見ていると、1つだけ前後の数字と合わないものがあつたのだ。

私はそのファイルを手に取り、一夏に手渡した。自分でやるのが面倒だったからだ。何か文句でも？

「ホントだな。ちょっと待っててくれ」

受け取った彼は肯き、奥の方へと移動する。ややあつて戻つて来た彼が持っていたのは、少し大きめの脚立だった。

彼は私の目の前でその脚立を使い、棚の上部へ資料を戻す為に腕を高く伸ばし、踵を軽く浮かせた。

さて、ここできくつか確認しておこう。

まず1つ目に、

「下の方を支えてくれるか？」

「オウヨ！」

というお決まりの流れがスルーされたこと。

次に、彼は今腕を高く伸ばしており、その手には分厚いファイルを持っている。しかもつま先立ち。何が言いたいのかというと、かなり不安定な体勢であること。

さらに、今は部屋が暗いので周囲の確認が困難であること。

最後に、私の目の前でそれらが展開されているということ。

「痛っ！」

上方から金属と人体がぶつかる鈍い音と、朝から何度も聞いている
声が耳を貫く。

直後、脚立とその上の人間の身体が左右に揺れる。

重みの無い金属音、次いで紙がめくれる音。同時に迫り来るクラス
メイトと数冊の分厚いファイル。

うわ、マジk

side:一夏

「いつてえ」……」

頭上に陣取るファイルをどかし、立ち上がろうと床に手を着いた…
…はずなのだが、

(何だこの床……柔らかい……)

そう、柔らかいのだ。しかも弾力がある。そしてちょうどいい感じ
の大きさ。軽くひと揉みしてみる。……うむ。柔らかい。

マシユマロ？ 綿？ もち？ いや、どれも違う。

一体何なのかと、暗い手元をよく見てみると、それは制服の胸部だ
った。

ははは。なんだ胸かー。そうか胸かー。はははは。

「…ッ!？」

突如として突きつけられた目の前の現実には、声にならない声を上げる。

それは歓喜の声か、はたまたマンガなどでありがちなパターンを預期しての悲鳴か。どちらかは定かではない。

ゆつくりと視線をスライドさせる。するとそこには……

「えーっと、そろそろ聞いてもらってもいいかな？」

我がクラスメイトにして同じクラス委員のユウ様が非常にお困りになっ
ていらつしゃったのだ。

「うわぁっ！ すすすすまん！ って違うんだユウ！ これはその何というかな……」

勢いよく立ちあがり、しどろもどろになりながら弁解にならない弁解を繰り返す俺に、「あはは……。大丈夫、気にしてないから」と、余裕の笑顔で応対するユウ。

気にしないって……。それはそれでどうなんだ。いや、暴れられるよりはマシだけど。っていうか鈴なら絶対に暴れてるだろうなあ。

俺は脳裏に浮かんだ、幼馴染が酢豚片手に暴れまわるという奇特すぎる光景を掻き消し、改めて謝罪の言葉を告げた。

「その……悪かった」

「だから別にいいって」

ユウはそう言うが、なかなかその顔を直視出来ない。

正直かなり気まずい。いや、俺が一方的にそう思ってるだけなんだけどな。

俺のそんな雰囲気を感じたのか、ユウも何と言葉を掛けるべきか考えあぐねているようだ。

数秒後、この空気の中、口火を切ったのはユウだった。

「そつえば織斑くん、今朝何か言いかけてたよね？ あの時なんて言おうとしてたの？」

……よりによって今それをチョイスしますかユウさんよ。

恐らく彼女が言っているのは、俺が紙を床にばら撒く直前の事だと思う。

俺としては今ここで言うのはかなり憚られたが、それよりもこの空気を何とかしたいという欲求が勝ってしまったのだらう。

気が付くと、自然と言葉が零れ落ちていた。

「いや、大したことじゃないんだけどさ、ユウって俺のこと避けてないか？」

「……えっ？」

声のした方を見ている。そこには、ぽかんという擬音が出そうな程ぽかんとしたユウがいた。

「ごめん、避けてるって言うって語弊があるな。なんていうかこう、他人行儀っていうか、一線を引いてるって言うか、とにかくそんな

感じがするんだよな」

すぐ近くにいた彼女は黙ったまま俺の言葉に耳を傾けていた。

校門を抜けた先、校舎のすぐ前、彼女と初めて会った時から感じていた違和感。

彼女の言葉や態度は、それまで接してきたどの人間とも違っていった。警戒とも呼べるかもしれない。距離を縮めれば縮める程、彼女は遠ざかるうと抵抗している。しかし同時に、そこに留まるうとしているようにも感じた。チグハグというか何というか。俺にはそれが不思議でなくて、気が付くと目で追っていた。

見れば見る程、知れば知る程、近づけば近づく程、彼女の立つ場所は、どの他人よりも遠かった。

その警戒とそれに対する抵抗のせめぎ合いが、俺に対しては一層顕著だったように思える。まあ所詮は思えるってレベルだけだな。

それに、と俺は続け、先程口にした推測に至った最大の理由を放った。

「ユウってさ、鈴の事は下の名前で呼ぶくせに、俺や弾の事は苗字で読んでるだろ？」

「……は？」

ユウは再びぼかんとしていた。心なしか、驚きよりも呆れの方が大きいように感じた。

ややあって、今度は吹き出し、クスクスと笑い始めた。呆れたり笑ったり、忙しいヤツだな。

「なんで笑うんだよ」

「いや、なんて言うか、やっぱり織斑くんは織斑くんだなあって」

「ほらそれだそれ！　なんか他人臭くてしっくりこないんだよなあ」

すると彼女はまたしてもあの顔を見せた。離ようとしながら留まろうとする。見せたといっても本当に一瞬だ。それも気のせいと言われれば納得してしまう程に些細な変化。

気が付くと、ユウはいつものユウだった。柔らかに微笑み、その桜色の唇を踊らせる。

「じゃあこれでどう？　一夏くん？」

この時、何故か俺の目は彼女に奪われ、その場から動くことが出来なかった。恐らくユウから見た俺の姿は、さぞだらしなかっただろう。

いつの間にか気まずかった雰囲気はどこかへと消え去り、その後滞り無く作業は終了した。

ちなみに今日家に帰ると偶然千冬姉が帰ってきていたので、今日あった事をそれとなく話すと（当然脚立から倒れた件は伏せた）、

「私の弟がこんなに鋭いわけがない。お前は誰だ？」

などと言って本気で戦々恐々していたのでむしろこっちがビビった。

さらに翌日、ユウが弾を下の名前で呼び、その事情を俺に訊ねた弾が千冬姉と同じような事を言っていた。

「俺の一夏がそんなに鋭いわけがない！ 誰だお前！」

「俺はお前のじゃない」

s i d e o u t

一夏が基本的に人の心の機微には鋭いという設定を失念していたことにより、私が軽い失態を晒した揚句に名前で呼び合うような関係になってしまった事件から月日は流れ、今の季節は冬。

この頃には何とか鈴の誤解を解くことが出来た。ここまで至るのに、

「ごめん。実はあたし、小学校の時に既にプロポーズしてるのフェアじゃないわよね」

「大丈夫、私は別に一夏くんのこととは何とも思っていないから」

といった経緯があつたのだが、まあここで語ってしまったし十分だろう。

と、そんな事よりも今はもっと重要なことがある。というか目の前に転がっている。

それは――

「……チケット？」

「うん、そう」

父が見れば発狂しそうな程きれいな笑顔で肯定する我が母。

「あいやあぁっ！ まぶすいいいいっ！ 母さんの笑顔が眩しすぎるううう！ 可愛いよ母さあぁん！ 目があぁっ目がアアアアアッ！」

陸に打ち上げられた魚の如くのたうちまわり、既に発狂している父。

「モンド・グロツソって知ってるわよね？」

母に訊ねられ、記憶を探る。……はて、何だったか。

普段からもっとテレビを見ておけばよかった。後で調べておくか。

「実はそのチケットが手に入ったから、みんなで見に行こうと思っ
つて」

「ふうん、それっていつなの？」

「来年に入ってからだったかしら」

結局この後、第二回モンド・グロツソの事をすっかり忘れたまま、その日はベッドにもぐりこんだ。

「悔しい！ でも感じちゃう！ ビクンビクン！」

お父さん……ビクンビクンって口で言わなくても……。

7（後書き）

突っ込まれるだろうなあ……と思っていたら以外にも指摘されなかった点。

・弾と一夏が会うのは中学に入ってからでは？（wiki参照）

・数馬きゅんはどうした（。d（ゴルア！！

・”ヤ”ガミ（♀）と”オ”リムラ（♂）の座席が……隣？

ちなみに用意していた返答←

・一夏及び主人公との関係の形成が面倒という理由だけで一夏と出会うタイミングを中学入学以前にしまった五反田弾氏には非常に申し訳ない事をしたと思うっており、ここに深く謝罪申し上げます。

・御手洗数馬氏については出さない予定です。だってどんな人物か分かんないんだもの。

カズマ繋がりで星空へ架かる橋の一馬で良ければ出しますけど。

・入学してすぐの座席は自由という設定です。ちなみに座席の位置関係はこんな感じ←

窓 優 夏

窓

窓 弾 鈴

鈴が一番に座り、その前方に一夏が陣取り、弾が何となしに鈴の隣

に腰をおろし、「今この流れで最も自然に座ることのできる席がどうのここの」と、モタモタしていた我らが主人公である優さんが最後に残っていたその位置になったのです。

……多少無理があるのは承知の上です。

8（前書き）

とりあえず前話で言いたかったのは、一夏は優のことをよく見てますよという事です。

そんなことより皆聞いてくれ！ 実は面白い……いや、やっぱり面白くないけどとにかく思った事があるんだ！

・一夏が鈍感なのってモツプさんのせいじゃね？

幼少期からの付き合いで、その頃から箒に好意を向けられていた。しかし昔から素直になれなかった箒ちゃんも気持ちは逆に一夏にキツく当たってしまう。そんな態度は明らかに好意から来るものではないと判断した一夏。しかも一夏は人の心の機微には鋭いという設定がある。つまり、箒が何かしらの感情を抱いているのは察することが出来たと。しかし行動から読み取れるそれは明らかに自分に対して良い物ではない。

つまり、そのせいで好意＝恋愛感情と言う風に繋がらなくなってもおかしくない。だから好意を向けられる程度では、相手が自分に対して恋愛感情を抱いているとは直結しない。

・実は鈍感なのは一夏じゃなくてヒロインなんじゃね？

常識的に考えて、付き合う＝買物になどと直結するはずが無いし、プロポーズ紛いの事をされて単純に奢ってもらえると解釈するはずが無い。拳句の果てにキスまでされて、これで好意に気が付かないはずがない。

つまり一夏はヒロイン達の好意に気付いている。ではあのスルースキルは何なのか。

簡単だ。無言の拒絶である。彼は優しいから、直接拒絶すればみんなが傷ついてしまうのではないかと思い、告白そのものを無かった事になっているのだ。

ヒロイン達は、自分がとつくに振られている事に気付かず、一夏への思いを抱き続けている。

一夏はお姉ちゃん一筋なんだよ。

っていうかモンド・グロツソってどの季節に何処で行われたんだし
ようかね。

イタリア語だし、イタリアですかね。

いやでもドイツ軍が独自の情報網を敷けるような場所ですから、ドイツ
かも知れませんね。

「ヤガミユウ？　それがお前の探してたってヤツか？」

淡い橙色を基調とした、温かみのある色合いの部屋。どこかのホテルの一室のような場所で、ソファ―に腰を下ろしている美女が粗野な口調で訊ねた。

訊ねられたのは、中学生程度と思わしき白髪少年。彼はどこか煩わしそうにしながらも、視線を美女の方へと向けた。

「ああ、そうだ」

少年はそれだけ答えると、壁に寄りかかり、手に持っていた文庫本のページを開いた。頭を傾けると、さらさらと白い髪が垂れる。少年は気にも留めずに、視線をページの上で走らせる。
女性は再び彼に訊ねた。

「でも会った事も無いんだろ？」

「会った事は無くても分かるんだよ。見てくれが変わろうとも、この世界にいる限りはな。まあ、向こうは俺の存在を認めようとはしないと思うけど」

女性は溜め息をつき、少年に見せ付けるかのようにげんなりした。

「なんだそりゃ。そんなヤツにわざわざお前が直々にモンド・グロツソの招待券を手配したのか？　……まさかソイツもお前みたいにして”ISをコアから作れる”ってわけじゃないよな？」

女性はソファから身を乗り出し、少年に険しい顔を向ける。しかし少年はあっさりと首を横に振る。その表情には僅かな苛立ちが浮かんでいた。あまり、その人物の話をするのが好きではないらしい。

「いや、アイツは俺とは違う。違うって言うか、同じだけど違うって言うか、とにかくアイツはISの製作に携わっていない。それどころか専用機すら無い。少なくとも現段階ではな」

ただ、と少年は再び少し苛立ち気味に続ける。

「製作に関してcanかcantで言えば前者だな。俺に出来てアイツに出来ない道理はない。それに、生身での単純な戦闘ステータスなら俺とほぼ同等の筈だ。生まれ育った環境と、男と女という身体的な差があるから辛うじて俺に軍配が上がるってレベル。だから少なくともお前なんか敵う相手じゃない。肝に銘じておけよ、オータム」

少年が女性に向けた眼は猛禽類を思わせる程に、強く鋭かった。

「アイツは俺が、真正面からぶつかって完膚なきまでに叩きつぶす」

§

二年生に進級したある日

朝、食卓をいつものように囲んでいると、母が唐突に切り出した。

「そついえば来週じゃなかった？」

来週？ 何のことだ？

記憶を探るが、一向に答えが出る気配は無い。まあ、人間の脳はどうでもいい記憶を排除するように出来ているのだから、恐らくどうでもいいことなのだろう。

「ああ、そついえば来週だな」

父も箸を進めながら肯く。え？ 何？ 知らないの私だけ？

「やっぱり今回のモンド・グロッソもブリュンヒルデは織斑千冬さんかしら」

母の言葉に、父は肯定の意を示す。

「前はすごかったからなあ。彼女なら二連覇も夢じゃないだろう」

（ふーん。そんなにすごい人がいるのか）

連覇というくらいだから、恐らく大会か何かの話だろう。

（まあ、来週になれば分かるさ）

私はそう結論付け、みそ汁の入ったお椀を口元へ運び、盛大に嘔き出した。

鼻と口から薄茶色の液体を垂れ流し、涙目で咳をする私。そしてさり気無くテーブルの上の料理を避難させている両親。

お前ら、10代の娘が晒した惨状に対するフォローと気遣いは無いのか。そんなだからウザイとかって言われるんだ。私は言わないけど。

「もう、ユウったら慌て過ぎよ」

「そうだぞ。母さんの作った料理が天上天下並ぶ物が無い程の至高の品であることは認めるが、食事は良く噛んでゆっくり食べないと」
うぜえ。ちげえよクソが。

「けほつ、けほつ、え、えつと、モンド・グロツソってもしかして、ISの世界大会？」

父と母はきょとした顔になったかと思うと、すぐにその表情を怪訝なものへと変化させる。

「ユウ、あなた大丈夫なの？」

「逆に聞くけど、それ以外に何があるんだ？」

大。伸一だろ。

「えっ？ ユウも観戦に行くのか？」

隣に座る黒髪の少年——織斑一夏が、次の授業で使う教科書を鞆から引つ張り出しながら驚いたような声を上げる。

「も」ってことは、もしかして一夏くんも行くの？」

私は返答の内容は分かっていたが、とりあえず聞き返した。

ブリュンヒルデの名は公式で発表されているので、別に知っているという体で返しても良かったが、『あいえず？　なにそれ？　興味ない』的なスタンスで居た方が、今後自然な流れで本編から離れていけるとふんだのだ。当然そのスタンスのままIS学園を受験せず、普通の高校に通いながら裏でISをボッコボコにしていることになるだろう。

「ああ、千冬姉が出るんだよ」

「千冬さんが！？　そうなの！？」

さも、今初めて知りましたと言っても言うかのように少しオーバーにリアクションする。

「そうなの、って……ユウ、アンタ本っ当に流行とか世間の流れに疎いわね」

呆れながら斜め後ろから口を挟んできたのは、最近私の中での高感度が上昇している茶髪ツインテールチャイニーズ、凰鈴音だ。

「千冬さんといえば第一回モンド・グロッソでの総合優勝者じゃない」

「へえ、千冬さんってすごいんだね」

ちなみに私は千冬とは一度だけ面識がある。面識と言っても、弾、鈴の2人と共に一夏の家に行った時に、ちょうど家を出ようとしていた千冬と偶然出会っただけという話だ。

「そうだ！ 良かったら当日は一緒に行かないか？」

一夏からの提案に一瞬思考を巡らせるが、別に構わないと判断し、承諾した。

「なあ、次って移動教室だろ？ 早く行こうぜ」

赤毛の男子生徒——五反田弾に促され、席を立つ。

私はこの時失念していた。先程の様な軽い判断は、得てして後悔の種になるのだという事を。

というわけで、時は流れ一週間後

次の章に行く前に言っておくッ！ 私は今、やつのスタンドをほんのちよっぴりだが体験した。

い…いや…体験したというよりは、まったく理解を超えていたのだ

が……

あ……ありのまま、今起こった事を話すぜ！

「私は一夏と共に会場へ移動していたと思ったら、突如として一夏が攫われた」

な……何を言っているのかわからねーと思うが、私も何をされたのか、わからなかった……

頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ

もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

8（後書き）

早く主人公にチート能力使わせたい。

9（前書き）

愚鈍な大衆は変化を嫌うのね

——はなこちゃん

その光景はまさしく”異様”と形容するに相応しかった。

地面に横たわる、夜空と比して尚黒い髪を持つ少女の胸に、穢れを知らぬ雪の如く白い髪を持つ少年の腕が突き刺さっている。これを異様と呼ばずして何と呼ぼうか。

少女は自身の胸から生える白い腕を、虚ろな瞳で他人事のように眺めていた。

肉が擦れる音と共に、真紅に染まった腕が引き抜かれる。赤く滴るソレを気にも留めずに、少年は横たわる少女に背を向けて歩き出した。

「オータム、そろそろ織斑千冬のお出ました。ずらかるぞ」

ふわりとした髪の女性——オータムは、少年に対し露骨に不機嫌さを撒き散らす。

「チツ、仕方ねえ。だがエイト、撤退するのはいいが、お前に1つ聞きたい事がある」

エイトと呼ばれた白髪の少年もまた、煩わしさを露骨に浮かべる。

「何だ？」

「なんでソイツにISを与えたんだ？」

対する少年は、ふん、と鼻を鳴らし、胸の傷が塞がり始めている少

女に視線を向ける。

「別に。ただソイツが予想外に脆かったからな。そのスツカス力な入れ物を少しでも他の物で埋め合わせてやろうと思ったんだよ」

それに、と少年は続ける。

「ソイツには俺と同じステージに立って貰う。立てないなら無理やり引きずり上げる。そうじゃないと意味が無い。言っただろ？俺の目的は『そこにいる女を真正面から叩き潰す事』だって」

オータムは理解できないとでも言いたげに、黙ったままISを展開する。

彼女の専用機——第二世代型のIS、アラクネだ。

「ちょっと待て」

ここで彼女に制止を掛ける者が居た。
件の白髪の少年である。

「なんだよ、エイト」

「俺も運んでくれ。ほら、俺がさっきまで使ってたのはアイツにあげちゃったし」

「知るか。って止める！ 汚え手で触んじゃねえ！」

「知らないのかオータム。最近は手を赤く染めるのがトレンドなんだぞ？」

「そんな血生臭い流行なんざ知りたくねえよ！」

§

「……………え？」

私は呆然と呟く。否、あまりの早業に、そうすることしか出来なかったのだ。

つい数分前、もうすぐ千冬の試合が始まるのだということを一夏が嬉しそうに語り、私もとりあえず、楽しみにしている的な感じを醸し出していた。

この時、両親は一足先に会場へと向かい、私は一夏と2人で歩いていた。

だが、それは突然現れた。

すぐ近くに黒塗りの車が止まったかと思うと、運転手ともう1人を車に残し、黒服の男女が数名現れ、隣にいた一夏をひよいと左右から持ち上げ、車へ放りこみ、エンジン音と共に車は去っていった。

この間僅か10秒程。神速と表現しても遜色ない彼らの仕事ぶりに、思わず放心する私。

そして先程の呟きに至る。

さて、これからどうするべきか。

私は今後の展開を思い出そうと、頼りない記憶を探る。

……確か、今回の誘拐事件は最終的に千冬姉に助けられるんじゃないかったか？

それが原因で千冬はドイツに行き、ラウラが千冬に惚れて、一夏の夫になる、と。

うん。大体こんな感じだったはず。

ならば私が八神優として取るべき行動は決まっている。

私は携帯電話を取り出した。友人が攫われた場合の行動としては至極自然なものだろう

「……あつ、もしもし！？ 実は今誘拐事件が――」

決して助けに行くなどという愚行は犯さない。だって行ったら千冬さんにいろいろとバレるじゃん？

そもそも私が行かずとも一夏は助かる運命にある。故に、私が行く必要はどこにもない。

それどころか、私が関わるのが原因で一夏に死なれては困る。逆に私が関わっていないところで死ぬのなら大いに結構だけだな。

ただ、私は内心で一夏を軽く見捨てながら、胸中に言いよりの無い何かを感じていた。いや、何かはハッキリしている。どす黒い、嫌悪の感情だ。

その感情は、先程一夏が攫われた時に最後まで車にいた白髪の少年。彼を見てからずっと胸に居座っていた。

見た瞬間に分かった。コイツとは相容れないのだと。

視界に入るだけで、ただそこにいると分かるだけで吐き気がする。

それだけではない。何故か、その少年に引つ張られているような気がするのだ。いや、どちらかと言うと”惹き合う”といった方が適切かもしれない。

そしてその少年に対する嫌悪感が、少年を消せと、己を後押しする。だが同時に、近づきたくない、触れたくない、視たくないとも思う。要はその存在を認めたくないのだろう。

さらに、この感情は八神優のものではないという事が、余計に私…いや、俺の関心を惹いていた。

八神優のものではない物など、この身には殆ど存在しない。あるとすれば、転生直前に作ったキャラクター（俺）が抱いた軽すぎる目的と、人の身には余る能力だけだ。

ならば一体この感情はどこから来ているのか。

信じ難いが、可能性として最も高いのは、本来の自分が抱いたものではないかということ。

”本来の自分”などと、まるで他人事のように分析しているが、俺

にはこの表現が最もしつくりくるのだから仕方が無い。

気が付くと、足が動いていた。無論、私の意志ではないし、俺の意思でもない。いや、そもそもそこに意志などという物があるのかも怪しい。

ただ見えない何かに惹かれ、導かれるままに進み続けた。

辿り着いたのは廃工場だった。

特に人影は見当たらないが、ここに先程の白い糞野郎が居る。何故かそう確信していた。

工場に向かって一歩踏み出した、その時

「待ちやがれ、そのガキ」

その声は工場の屋根の上からだった。

視線を上へと向けると、そこにいたのは、背部にある8つの脚が蜘蛛を彷彿とさせる見知らぬIS。

近くでISの世界大会を開催しているというのに、こんなところでIS操縦者が何をしているのか。

そのこの廃工場に近づいただけで呼びとめられた所を見ると、どうやらこの先に近付けたくない何かがあるらしい。

タイミングや状況から考えて、恐らく先程の一夏誘拐事件と関係しているのだろう。だとするとここに一夏が居るのだろうか？ 今思えば、一夏が監禁されていた場所も廃工場だった気がする。

と、ここまで考えて、次に今見上げているISについて考察する。

あんなISあつたっけ？

9（後書き）

「私の彼女いない歴は53万です」

「みんなー！ コイツに出会いを分けてくれえー！」

10（前書き）

ご都合主義って知ってるか？

——黒髪ツンツンの彼

風が吹き抜ける。役目を終えた工場は、今ここに新たな役割を与えられようとしていた。

その役割の名は戦場。

屋根の上からあからさまな敵意を私に向ける1人の女性。その女性
が纏うのは、背部にある8本の脚が特徴的なIS。その脚は爪の様
に鋭利で、黄と黒というミツバチのような配色をしている。ぶーん
ぶんしゃかぶん

私の信頼度0の記憶が正しければ、あの様なISはアニメには登場していなかった筈。もしやアレこそが、私が介入したことによって変動した展開、イレギュラーなのだろうか。

もしそうならば、今回の一夏の誘拐は私のせいということになる。なんてこったい。

「てめえ、こんな所に1人で何の用だ？」

静寂に包まれたこの場所では、余計に耳に響く彼女の声。その声色には隠しきれない殺意が滲んでいる。

うーん、何の用って言われても『気付いたらここにいましたてへべる』なんて言ったら殺されそうだな。しかしそれが最も適切なのも事実だ。

でもまあ、きつとあの白髪野郎に惹き付けられて来たんだろうから、一応人探しってことになるのか？

「人探し……ですか？」

「私が知るか！ 要はあのガキを助けに来たんだろ？」

いや違う。

「だったら始末する。もし違っても変わらねえけどなあ！」

ISを纏うふわりとした髪の女性は、その手にマシンガンを構築。間を置かずに引き金を引く。

火薬が弾ける様な音。それと共に吐き出される鉛の塊。大気を唸らせながら迫るソレが、私の身体を――

「ッ！」

――貫こうとした所で、手元から甲高い金属音が響く。見ると私の両手には白と黒の双剣が握られており、右腕を斜めに振り抜く形で制止していた。

それは殆ど反射だった。

本来ならば、私の身体は弾丸に打ち抜かれ、地に伏していたに違いない。

今こうして立っていられるのは、偏に私……ではなく、彼の英傑達が培ってきた勘と技術のおかげだろう。

「てめえ、それは……！」

驚愕と共に、あの女性の視線はたった今投影した双剣——干将莫邪に注がれている。

遅れて、自身の両目に違和感を覚える。恐らく能力の使用によって変色しているのだろう。何故虹彩の色が変わるのかは私にも分からない。拒絶反応か何かか？

そんな私の疑問などどうでもいいと言っても言うように、女性は何やら文句の様な独り言をシャウトする。

「エイトの野郎と同じ………そうか、てめえがヤガミ……。チツ、敵わないってのはそういうことかよ！ ふざけやがって！」

うるせえ近所迷惑だろうが。……あつ、他に人はいないのか。

「私がてめえに勝てねえだと！？ そんなの認められるか！」

女性は跳躍し、空中で腰部装甲から2本のカッターを抜く。そして背部の8本の脚。その先端が割れるように開き、内部から現れた全銃口がこちらへと向く。

私はそれを見つめながら考える。

アレが私のせいでここにいるのであれば、早々に退場していただく。そして私の知る流れに戻る。

ついでだ。あのISには”俺”のターゲット第1号になってもらおう。記念すべき事だぞ、誇れ。それにどうせアニメには居なかったイレギュラーだし、ここで消えても何ら問題は無いはずだ。むしろ

消すことが俺の使命だろう。きっとそうだとくに違いない。

side:オータム

アラクネの背部――8つの銃口から、ヤツの命を刈り取る鉛が打ち出される。

だがこれで仕留められるとは思わない。私は両手に握るカターの感触を確かめるように握りしめた。

直後、鋼と鉛が激突する。アラクネから放たれた銃弾を、瞬時に展開した剣群が防いだのだ。

「クソッ！ やっぱりか！」

やはり、アレは私が見知った男と同じ能力だった。

私はその事に対する疑問と、黙っていたあの男に対する怒りを押し殺し、落下を利用してカタールを振り下ろす。

しかしその先にヤツは居なかった。カタールはコンクリートを砕き、その空振りは私に僅かな隙を作る。

視界の端でヤツの口角が釣り上がるのが見えた。

しまっ——！

「ゲート・オブ・バビロン
王の財宝」

ヤツの背後の空間が揺らぎ、そこから数多もの武具が放たれる。

煌びやかな物から無骨な物まで、宝物から名剣まで、ありとあらゆる物が射出される。かつて一度目にした、王の宝物庫。

一瞬目を奪われるが、背部の脚全てを活用して武具の嵐をかいぐり、その際に3本程の脚を犠牲にしながらもなんとか射程圏外まで移動する。

が、それも束の間。直後には既に、黒く浸食された石斧を片手に持つヤツの姿が眼前に迫っていた。

「クソッ！」

悪態を吐きながら咄嗟に手元のカタールで応戦する。

いや、しようとした。

大気を切り裂く轟音と共に振られたソレは、私のカタールを軽く吹き飛ばした。それだけに留まらず、その振るった衝撃だけで私の両手は折れ、ISの装甲には亀裂が入る。

「ああっ、ぐあっ！」

腕に走る激痛に呻く間も無く、腹部にヤツの蹴りが炸裂する。

ボールの様に軽く飛ばされ、工場の壁に大きな亀裂を入れてようや

く停止した私に、またもや追い打ちをかけんとヤツが迫る。

「くられ！ なんちゃって九頭竜閃… もとい、ナインライ——」

ヤツの必殺の技が届く直前、

「そこまでだ。 八神優」

私の目に映ったのは、どこかより飛来した剣群。

それらは粉塵と破壊音を撒き散らしながら、私とヤツを隔てるように突き刺さった。

s i d e o u t

10（後書き）

ああ。整合性をとるのはいいが――

別に、ご都合主義展開にしまっても構わんのだろう？

――白髪ツンツンの彼

11（前書き）

「吾輩の辞書に不可能と言う文字は無い」

「誤植か？ 不良品なら返品しろよ」

「吾輩は辞書を持たない。故に不可能と言う文字は無い」

「じゃあ可能も無いわけだ」

「可哀想になあ」

「誰だ？」

「そう睨むなよ。オレはまあ、いわゆる神ってやつだ」

「神？」

「そうそう。つつても、オレはどっちかっていうと邪神の類だけだな」

「その邪神サマが何の用だ」

「だから睨むなつて。別に大した用じゃねえよ。非して同一なる道を歩みながら、片や神の恩恵に与り、片や気付かれずに輪廻の輪に組み込まれることも無く、永劫に彷徨い続けることになる。そんな後者であるお前さんを救ってやろうと思つてな」

「救う……だと？ 俺を？ 邪神であるお前が？」

「邪神だつて同情くらいするさ。それで、何を望む？ お前さんはあと最低でも72年間は生きて貰う。具体的には、記憶と意識を持ったまま転生してもらうんだが、その上で特典を付けてやろうつてわけよ」

「特典？ 記憶の引き継ぎだけでも十分じゃないのか？」

「いや、それがな、どうもお前さんの片割れがその特典とやらを押し付けられたらしい。だからお前さんにもやらないとフェアじゃないだろ？」

「そうか、アイツも……………分かった。じゃあアイツが望んだものを教えてくれ」

「確か、”ふえいと”とかいうのに出てくる力。それから、転生先は”あいえす”とかっていう世界らしい」

「ではソイツと同じものを頼む」

「まるつきり同じでいいのか？ 今ちよつと調べただけだよ、その世界のモビ。スーツ的なものって女にしか使えねえんだろ？ しかも能力の方はもっとヤバいだろ。転生してもお前さんは人間だ。その人間が英雄の力を使えばタダじゃあ済まねえぞ？」

「それでも構わん」

「…………ふーん、そうか。まあ、お前さんがそう言うなら仕方が無い。その辺に関してはオレが勝手に調整しておいてやる」

「おい、余計な事をするな」

「人…………じゃなかった。神の厚意は素直に受け取つとけ。誰かに気に入られるつても1つの才能さ。だったら、それはお前さん自身の力に他ならない。オレはお前が気に入った。その迷いの無い意思の是非は知らんが、その先を見てみたくなっただんだよ」

「…………ふん」

「さあ、行つて来い。山田幸助」

「どうでもいいが、なぜPUMAのジャージをきて」

§

俺は目の前に突き刺さる大量の剣を放った人物に視線を投げかける。まず視界に入ったのは、雪のように白い髪。次いで、空とも海ともにつかない深い青の眼。

俺は自分と離れた位置に立つこの男に対し、出所不明の嫌悪感と同時に、大きな疑問と驚愕の念を抱いていた。

1つ目に、アイツは八神優という名を知っていた。

俺は転生後、特に何事も無く平穩に過ごしていたはずだ。こんな強敵オーラをビンビン放つような男に知られるようなことはしていない。

ストーカーか何か？ 気持ち悪い。

2つ目に、先程飛来した剣群。これらには法外な量の魔力が込められていた。

いや、量など問題ではない。この世界に存在しない筈の魔力。それ

をヤツは扱う事が出来るのだ。

しかも、先程の剣は、どれ1つとして本物ではなかった。全ては贋作、すなわち投影魔術。

何故魔術が使えるのかは分からない。しかし、ヤツもまた俺によって引き起こされたイレギュラーなのだろうということは想像に難くない。

「エイト！ てめえどうして黙ってやがったんだ！」

ISを装備した女性が叫ぶ。なるほど、あの糞野郎はエイトというのか。

エイトと呼ばれた少年は、先程自身が投影した刀剣達を消し、女性に向き直った。

「八神優の能力の話か？ そもそも俺の言いつけを破って手を出したのはお前だ、オータム。俺に当たるのはおかしいんじゃないか？

ISを展開していなければ、お前は間違いなく死んでいただろう。そんな大きな実力差すら測れないお前が悪い。まあ、強いて質問に答えるとすれば、言ったところでお前は自分の目で見えるまで信じなかっただろうからな」

言いきるや否や、オータムと呼ばれた女性から視線を外し、今度はこちらにその青い眼を向ける。

よし、コイツのあだ名はブルーアイズ。ワイトドラゴンにしよう。むしろ社長の嫁か？ いやむしろ社長でいいか。

「それにしても、俺がちよっとドイツ軍とお喋りをしている間に随分と暴れたみたいだな。悪いが組織としては、お前を見過ごすわけにはいかない。と言っても、オータムは既に戦闘不能だ。ISを壊

されても困るしな。よって、ここからは俺が相手になろう」

言い訳がましく、次々と建前を並べ立てる社長。しかしそう言う社長の表情には、全く別の思惑が如実に表れていた。

俺の観察眼が正しければ、恐らくヤツは組織などではなく、単純に己のために俺と闘いたがっている。

理由は定かではないが、俺が社長に感じている嫌悪感や惹き合う感覚とも関係があるのだろうか。

——まあ、そんな事は今は置いておこう。

重要なのは、ヤツは俺のせいで発生したイレギュラーであり、今後ストーリーに影響を及ぼしかねないということ。さらに言えば、下手をすればこの男に他のキャラまで殺されかねない。何せ魔術なんが物を使う得体の知れない男だからな。もしそうなれば、そいつらが死んだのは俺のせいという事になる。それだけは避けなければならぬ。

昔とは違うのだから。かつての山田幸助は死んだのだから。決して同じ結果を出してはならない。

とまあ結局のところ、俺……いや、本来の山田幸助は、どうやらあの男の存在を容認できないらしい。

ならば、もはや闘わない理由は無い。

「奇遇だな。こちらとしても、お前の様な異端を放置するわけにはいかない。聞きたいことはいくつかあるが、消えて貰おう」

言い終えるや否や、俺は弾丸の如く飛び出し、先程オータムに向ける筈だった石斧を振るう。ちなみにこの石斧は、ヘラクレスが使っ

た物をランスロットの能力で宝具化している。

敵は魔術を使うのだ。ならば、詠唱の間も無い程に攻め尽くす！

大気を押しつけ、横に一閃。その一閃は当たれば砕き、躲せば切り裂く二重の一太刀。

しかしエイトは、俺の手の中の物と全く同じ物をその手に出現さる。

直後、無骨な岩同士が激突する。その剣戟は雷鳴や地響きにも似た轟音を撒き散らし、相殺しきれず、行き場を無くしたエネルギーが暴風となる。

俺はその腕に確かな反動を感じながら、ひどく釈然としない思いを抱く。

俺には見えていたのだ。いや、分かっていた。

ヤツが俺の一振りを受け止めようと動く前に、既に俺はこの攻撃が止められることが分かっていた。

俺は思考を切り替え、次いで上段から振り下ろす。ヤツの存在を否定すべく、迅く、強く振り下ろす。しかしこれもまた止められる。また止められると分かっていた。

おかしい、何かがおかしい。

俺は一度体勢を立て直すべく、後方へ跳躍する。しかしこれを機に思ったのか、あの男はここぞとばかりに距離を詰めてきた。

ヤツは反撃に転じようと、高速で石斧を振るった。

先程の俺と同じ横薙ぎ。ヤツの剣筋は手に取るように分かった。俺

は石斧を使っていなし、ヤツに直接拳を叩きこもうとすると、今度はこちらの拳の軌道が分かっているかのようにあっさり避けられる。

……一体何が起きている？

互いに互いの手の内が分かるという奇妙な状況に、俺は底しれぬ不安感を抱いていた。

このまま実力が拮抗したままだと、長期戦になった時、先に戦闘を始めていた俺が不利だ。

それに、実力が拮抗していること自体がおかしい。

こちらが振るうのは英雄の力。神話の再現。並の人間が太刀打ちできるはずが無いのだ。

にもかかわらず、俺と同じ物を投影し、あまつさえ互角に打ち合ってみせるという芸当をやったのけたこの男は一体……。

そうは思いながらも、攻撃の手は休めない。敵が振るえばこちらが受け、こちらが振るえば相手が受ける。しかし互いに決定打は与えられない。

相手も同じ状況の筈なのに、目の前の男は特に動揺した素振りはなかった。まるで初めから分かっていたかのようにだ。

とここで、彼は落胆した調子で告げた。

「ふう、どうやら買い被り過ぎていたようだ」

その直後、突如としてヤツのスピードが上昇した。

「はっ、くっ……！」

思わず声が漏れる。先程とは打って変わり、今は明らかにヤツの優

勢。俺は剣戟のすさまじさに押され、防戦を強いられる。

このままでは……負ける……っ！

俺は一か八か賭けに出た。この展開が読まれていれば失敗。読まれていなければ勝てる。

ヤツの連撃を防御しつつ、背後に王の財宝を展開する。選り好みなどしている暇は無い。俺は蔵の中の宝物を片っ端から射出した。

エイトはやや目を見開いたが、すぐに冷静に対処する。しかし、そこに一瞬の隙が出来る。

今度こそ——決める！

「射殺す百頭！」
ナインライフズ

ギリシヤの大英雄ヘラクレスが完成させた流派『射殺す百頭』のうちの一つ。対人用ハイスピード9連撃。

しかし俺がこの時抱いたのは勝利の確信ではなく、不安が首を擡げる感触。

それを証明するかのように、俺が目にしたのは、アイアスを展開しながら俺と同じ構えを取るヤツの姿だった。

そして激突。

一際強い衝撃が腕に伝わる。だがどうせ傷付くのは八神優の身体だ。ならば関係無い。動け。振るえ。ただヤツを消す為に。

しかし、どうやら武器の方はそうはいかなかったようだ。中央に大

きな罅が入り、幻想の維持が不可能になる。

「くそッ！」

俺はすぐに新たな武器を手に取り出そうとするが、対する目の前の男は、攻撃の手を止めていた。まるでこれ以上は不要だとも言っように。

そして、ヤツは投影した石斧を消し、淡々と言葉を紡いだ。

「軽い、軽すぎる。お前自身はあまりにも空虚だ。借り物の身体に、借り物の思考に、借り物の技能。お前はどうせ全てそう思っているんだろう。何1つとして自身の物ではないと。だからそんなに弱いんだよ、お前は」

……こいつは何を言っている？

「借り物？ 空虚？ 何の話だ？」

何故こいつは知っている？

「では聞くが、お前はそもそも何故ここにいる？ いや、お前がこの世界にいる意義とは何だ？ 何故この世界にいる？」

理由？ 意義？ それは……

「お前が今語ろうとした事は、本当にお前の物なのか？」

「……ッ！」

俺の物？ いや、違う。俺が今語ろうとした物は”俺”というキャラクターが持った目的。本当の俺の目的など存在しない。

「お前は何故俺と闘った？」

なぜ？

「それは……お前が一夏^{アイツ}や、他の人達に危害を……」

「それも、本当にお前が抱いた理由か？」

どういう事だ？ そもそも、コイツの言う”お前”とは俺の事を言っているのか？ いや、違うだろう。コイツはどういうわけか、”本来の山田幸助”を知っている。

「確かにそういう理由もあったんだろう。だが、本当にそれが一番の理由なのか？ 俺が魔術を使ったから、俺がお前の知らないイレギュラーだから警戒したか？ たったそれだけで、俺があのがきを殺すと結論付けたのか？」

「お前、どこまで……」

「なんでも知っている。何なら教えてやろう。お前は俺に言いようの無い嫌悪感の様なものを持った筈だ」

ああそつだ。俺はお前が許せない。お前の存在が許せない。だが、何故だ？ わからない。知りたくもない。

「でもその感情の出所がわからない。そうだろ？ だがそれこそが、お前が今闘っていた最大の理由だ」

「なぜそう言い切れる」

いや、分かっている。ヤツの言う事は正しい。

「お前も分かっているんだろう？」

ああ、分かっている。

「つまりお前は、お前自身の目的ではなく、他人が作り上げた目的を借り、八神優という入れ物を借り、他人の持つ能力も借りて、この世界で今やっていたことといえば、理由も分からない鬱憤晴らし。そこにお前と言う者はいない、行動に中身が伴わない。これを空虚と呼ばずになんと呼べと？」

ああ、そつだな。

「それから、いい加減にしろよ。俺が今話しかけているのはお前が作ったキャラクターじゃない。お前自身だ。作り物はすっこんでろ」

side: エイト

突如、八神優……いや、山田幸助の雰囲気豹変した。と同時に、虚ろに淀んだ瞳が俺を捉える。

「ふん、やつとお出ましか」

しかしヤツは俺の言葉に応える気配は無い。代わりにあるのは、明確な敵意。

次の瞬間、俺達は双剣を手に、再び切り結んでいた。

だが――

「やはり、軽い。諦めろ、お前では俺に勝つことは出来ない」

ヤツを突き動かしているのは、理由も分からないふわふわした嫌悪感だけだ。

これならば、まだ先程のキャラクターの方がマシだ。

俺はヤツの手に持つ双剣を上空へと蹴りあげ、俺自身は後方へ移動し、距離を取る。

これ以上は本当に無駄だ。あんな中身の無い相手を倒したところで意味など無い。早々に切り上げるか。

「今日の手土産にいいものを見せてやろう」

俺はポケットに入った小さい十字架を握りしめ、呼びかける。そして光と共に展開されるIS。

黒を基調とし、所々に白いラインが細く入っており、手足や胴体部分など、全体的に装甲が細く、どこか冷たい印象を与える。

「完成したばかりで今初めて動かす機体だったが、上手く行ったか」

俺はISがきちんと展開されている事を確認すると、そのまま瞬時加速を行い、ヤツへと肉薄する。

当然向こうは迎撃を行ってくる。ヤツの手には蹴り飛ばした双剣と同じ物が握られている。

俺は剣を振るう腕を強引に掴み、多少ダメージを受けながら地面へ叩きつけた。

コンクリートが砕けるが、それでもなおヤツは反撃を諦めていなかった。その手に持つ双剣を俺の顔めがけて投げつけるが、その程度の悪あがきが俺に当たる筈も無い。

俺は地面に横たわるヤツの胸に、ISの装甲を纏ったまま腕を突き刺した。

当然胸からは紅の血が溢れてくる。だがそんなことはどうでもいい。俺は心臓を探り当て、強く握り、動きを止める。

「さて、お前にプレゼントだ」

俺はそのまま、ISを解除した。

s i d e o u t

11（後書き）

我ながら意味が分からない。深夜テンションって怖いな！。2日ぐらい（あれ？3日？）寝てないな！。ところで腹減ったな！。

D A S O K U 　く読まなくたっていいんだよ??（前書き）

【F a t eでIS】10万PV突破記念ドラマ

「我が生涯は悔いばかり」

ベテラン子役、おいなりかずきが演じる主人公と、多彩なキャラクターが織りなすドタバタギャグコメディ！

くあらすじく

喉を焦がす熱。瞳を焦がす赤。両親だったモノを焦がす焰。朦朧とする意識の中、少年の心は静かに死んでゆく。

とある民家に火が放たれた。放ったのは父親。その家族は一家心中を図ったのだ。

しかし奇跡的に、1人の少年が救助された。少年の名はケンシロウ。ケンシロウは親戚が営む店――食事処『北斗』に引き取られる。

しかしケンシロウは誰にも心を開くことは無かった。

ただ部屋の隅で何もせず1日を過ごす。笑う事も無く、食事もとらない。

本来ならば、この身はもう死んでいる。ここにいる事が間違いなのだ、と。

しかしそんなケンシロウも、見た目は強面だが心も厳しいラオウや、病弱で頭が良いという、話が進むにつれて腹黒キャラが定着しそうなトキなど、『北斗』での様々な出会いを通して、少しずつ心を開

いていく。

これは、全てを奪われ立ち止った少年が、もう一度前へと踏み出す
勇気のドタバタギャグコメディである。

尚、この企画は自動的に消滅する。

そんなことより恋チヨコがアニメ化する件について

DA S O K U ー読まなくたっていいんだよ？ー

キャラ紹介

名前：エイト

性別：男

年齢：一夏、主人公より7、8才程年下（転生したのが主人公の後なので、その分年の差が開いた）
しかし肉体年齢は同程度。

容姿：

肩まであるサラサラな白い髪に、ややつり気味の青い眼。肌は白く、作者の不手際により描写はされていないが、白いコートを季節を問わず着用している。

身長は一夏と同じくらい。身体は鍛えられているのか、無駄な筋肉や脂肪が一切ない。

主人公とは違い、能力使用による身体への影響は無い。

性格：

紛う方なき天才。才能が服を着て歩いているような存在。誰かが出来た事ならば、その結果を凌駕して同じ事をやってのける。

負けず嫌い……というより、他人に負ける可能性を考慮せず、自分の勝利を信じて疑わない。

自分が天才である事を自覚しているため、他人に対してどこか見下した態度になるが、本人に全く自覚は無い。

割と面倒くさがりで、特に頭の悪い（と彼が勝手に思っている）相

手に対して何かを説明するのが嫌い。

主人公の事が嫌いだが、唯一自分と渡り合える（に違いない）と（勝手に）一目置いている。

そんな主人公を倒すのが彼の目的。と言ってもただ倒すのではなく、自分の納得する勝利を求め、真正面から対等な立場での尋常な勝負を以って倒そうとしている。

周囲から見ると、その目的の真意は到底理解できず、天才であるが故にプライドが高く、わがままだからだろうと勝手に思われている。目的がはっきりしている分、主人公よりも主人公らしい。

好き：読書、静かな場所

嫌い：主人公、煩い場所、頭の悪い人間

能力：

主人公と同じ。但し、マイナス要因は省かれている。

慢心スキル、単独行動スキルは常時発動。生来のものであるので取り外しは不可。

その他：

非合法的なIS研究の生き残り。

ISの技術開示後すぐに『男でもISを扱えるようになろうぜイェー！』という思想のもとに始まった研究。IS適合ランクの高い人間の遺伝子をベースに、男として生まれるように受精卵の遺伝子を操作するという頭の悪い研究だったが、幾多の失敗を経て何故か成功してしまう。

というのも、実は実験過程でその胎児は死亡したのだが、そこに宿っていたのがエイトであったため、十二の試練によって蘇り、結果としては成功という形となった。

この胎児が8番目の実験体であったことから、エイトと名付けられる。

生まれてからは長い間カプセルの中で過ごしたり、研究のためだとかで強引に肉体の成長を促進させられたりといういろいろあったが、数年後に研究データを狙った亡国企業に襲撃され、研究所は壊滅。発表前にデータが根こそぎ無くなったので、計画も凍結。そして唯一の成果であるエイトは亡国企業に着いて行ったので、最終的には「研究なんて無かったんや!」という状態に。

この世界の知識や技術を手に入れた彼は、エミヤの魔術を使ってISのコアを解析。そして同じ物を作った。本人いわく「そのシノノノノノノに出来て俺に出来ない道理は無い」とのこと。

しかし他人に製造方法を説明しても理解されなかったため、結局亡国企業の中でコアを作るのはエイトだけであった。

ちなみに主人公との関係は、生前切り捨てられ、乖離した人格。本来、主人公の人格だったもの。要するに元々は同じ人間。言わば後天的な二重人格。

それぞれが独立した精神として存在したために、身体を共有しただけの別の人間として神の書類に登録された。

そして設定を明かしていくたびに作者の頭の悪さが晒け出されると。

番外編、カラオケの話。蛇足。ヤマ無しオチ無し意味無し。
登場する曲がどれだけ分かるかなー、みたいなの。

数日前

「割引券？」

昼休み。私の隣の席に座る黒髪の男子生徒——織斑一夏の視線は、別の男子生徒——五反田弾の手元に注がれている。
彼の手元には、でかでかと「50%オフ!!!」と書かれた紙切れ。
一夏の言葉に、弾は肯定を示しながらドヤつとする。

「そう、何を隠そうカラオケの割引券だ」

言われて、彼の手元を覗き込む。たしかに、そこに記載されていたのは駅前にあるカラオケボックスの店名だった。

「ふーん、なんで割引券なんて持ってたの？」

ツインテールの女子生徒——凰鈴音が、割とどうでも良さに頬杖

を突く。

「ああ、実は前に道を歩いてたら、武器屋の店員を自称する変なやつに会ってな。ソイツに貰ったんだよ」

自称武器屋の店員だと？ 意味が分からん。っていうか知らない人から物を貰っちゃいけないってばっちゃが言ってたぞ。

「というわけで、今週末に4人で行こうぜ」

さあ、やってまいりました。終末です。間違えました。週末です。

ぞろぞろと割り当てられた部屋に入る私達。

壁のスイッチを操作し、エアコンと証明を点ける。

テレビの画面から流れる音楽情報を無視して、各々グラスを手に、ソファーへと向かう。

私がまず座ると、その隣に一夏が座った。……いや、まあいいけど。室内のソファーの配置は、3人掛けが2つ、L字型にらんんでいる。結果、バランス的にもう1つのソファーに鈴と弾がそれぞれ座るところになった。

さすがにこんな些細なことで機嫌を悪くする鈴様ではないだろう。そう信じたい。

私はタッチパネル式のリモコンをテーブルの上に乗せた。

「それで、誰から歌うの？」

私の言葉に反応したのは、以外でも何でも無く弾だった。

「じゃあ俺からいくわ。採点はどうする？ 全員するか？」

せっかくだし、その方がいいだろう。

私達3人は肯き、弾は画面を操作した。

ここから彼らが歌う曲は、作者が好きな曲の中でも比較的古い曲です。アナタは何曲分かりますか？ 念のため、歌詞そのままの引用は控えます。

かくして、弾が入れた曲が流れだした。歌手名は……影山ヒ□ノブか。ちなみにこれは口ではなく四角だ。

「レッツゴー！ レッツゴー！ レッツエンドゴー！

いーまーじょーうねっーがー あーらーしーにーなあってえー こ
おーすーをーはーしーりーはーじーめるー

ちえーつかあーはあー ゆーずーれーなーいー GET THE
WORLD!」

……いや、まあ何というか、20代ホイホイというか、コイツよく
こんな曲知ってるな。中学生だろ？ っていうかGET THE
WORLDの発音がやたらと良いな。

「へえー、結構上手いな、弾」

そのすぐ後、得点が表示された。

『87点』ナカナカナ

うーん、他のも聞いてみないことには何とも言えないな。とりあえ
ずこの機種の採点のハードルを確かめなければ。

「じゃあ、次はあたしね」

お前らのスルースキルが羨ましいよ。っていうかアレか。ツツコン
じゃいけない空気か。

気が付くと、テレビの画面には次の曲が表示されていた。先程の宣
言通り、恐らく鈴が歌うのだろう。

歌手は……奥 雅美？ さっきから何だかアツイチョイスだな。

「かめんーのーしーたーに かーくーした しんじいつ を知るー
ゆーうき」

アクセルウウウ！ アクセルじゃあねえかああ！ だからなぜ知っ

ている中学生！

「なにもーこーわーくーは無ーいーから すべーてーをーあーげよう
いだーきーあーう ときいー」

鈴が歌い終わり、マイクを置く。

「鈴ちゃんも上手だったね、一夏くん」

「ああ、そうだな」

そしてさりげなくフォローを入れる私。感謝してくれてもいいんだ
ぜ？ 鈴さんよお。

見ると、鈴が少し恥ずかしそうに、けれどもまんざらでも無さげに
俯いている。

そして得点が表示される。

『86点』ナカナカダナ

「よっしゃ俺の勝ちい！」

「くっ、ま、まだ始まったばかりよ！」

隣でじゃれる2人を放置し、私は静かに考えていた。

2人ともそれなりに上手だった。しかしこの点数。どうやらこの機
種で90点の壁を越えるのはかなり難しいらしい。

「じゃあ次は俺がいくよ」

そう言つてマイクを取る一夏。

コイツは何を歌うんだ……。

私の不安をよそに、次の曲が表示される。歌手名は……宮崎歩？
デジモソか？

「いーくーつーもおーのゆーめーをー　だあーきいーしめえーたー
いー

とおまあらぬうー　せーかーいをーかけーめぐれえー」

そつちかああ！　これはさすがに中学生は知らねえだろ！　いやでも割とメジャーだからな。もしかしたら知ってるのかも。

「たーどーりーつうーくとおきーへえー　ゆうめをーのーせーてー
きーぼーうのー風をー

今このーてにかあーんじてる　こおーのちかーらをしいーんじる
だけー」

う、上手い……！　何だこいつは、連邦のモビ。スーツじゃないのに化け物か！？

得点が表示される。

『92点』ヤルジャーネーカ

「「「おおー」」」

こいつ、やりやがった！ あの90点の壁を軽々と越えやがった！
そして流れるに次は私の番なわけだ。普通漫画だと、上手い人間の後に主人公の順番が来て、うわーマジかよーみたいな展開になるんだろう。だがしかし、私を甘く見て貰っては困る。

リモコンのタッチ画面を操作し、歌手で検索をかける。

検索する歌手はJ a n n e D a r c。

今までの流れるに、この局面でジャンヌといえば『M y s t e r i o u s』や『メビウス』だろう。

だが、しかし、b u t！ 敢えて流れには乗らないぜ！

スキル、単独行動を発動！ このターン、協調性が5下がる！

私はこの時テンションが上がっていたのだろう。あとから思えば、八神優らしからぬ選択をしていた。完全に流れに合わせるべき…とは思わないが、ここまで外れた選択はさすがにやりすぎたと言えなかった。

そしてイントロが流れ始める。よし、行こうか。

「あなただけだーいまー誓え 罪を感じてーざーんげをーしろ
蹴られてもていーこうーするな 泣いて許しをー請ーえー

そして言い訳をしろー次は いつものようにーあーまえてーみて
それが出来ないのならーここで 今死んでみせーてーくーれー」

しん…と静まりかえる。得点は？

『95点』マジカヨ

よっしやああああ！ 最高得点キタアアア！

満足感に浸りながら、ふと3人の顔を見てみると、なんとというか、引きつっていた。

そんな中、一夏が声を絞り出す。

「ユウって、意外とロックなんだな……」

うん？ 確かにロックバンドは好きだけど？

そしてなんやかんやでもう一巡

「ガガガッ！ ガガガガーオガイガー！ ガガガッ！ ガガガガガ
オガイガー！」↑弾

「夢はいまー とおーいみーさきーにー ずっとーしーずかーにー
たーたーずーんでーいるー」↑鈴

「回れっメッリーゴーラウンド めくるめくフューチャー 負けー
ないくーらーいしーんーじてー」↑1夏

「ドンストップキッスミー 離れられない ドンストップキッスミ
ー でも許せない

A H A H A H A H 中に出して」「ちよつと待てええっ！」

こうして、いつもとは違う休日の幕は下りるのであった。

§

なじられながらこの作品の整理

「ねえ君さ、あの13部、なんなの？」

「何……と申しますと？」

「いや、だからさ、前回のあの話。あれ意味が分かんないんだけど」

「いや、その……はい」

「はいじゃなくてさ、結局なにが言いたかったのか良く分かんないんだよね。ぶっちゃけあの戦闘シーン要らなかったよね？」

「まあ、はい」

「しかもさ、もうここにきて主人公の事が良くわかんなくなっただけだ。つまりどういう事なの？ 山田幸助って何人いるの？」

「えっと、2人です」

「じゃあキャラとかなんとかって？」

「まず身体を持っている山田は2人で、そのうちの1人が作ったキャラクターが1つ。それからそのキャラクターがさらに作り上げたキャラクターが1つです」

「つまり4人いるってこと？」

「いや、そうじゃなくて、基本的にオリキャラは2人だけです。元々は1人だったので、2人に分裂した分、元となった方は一部が欠け落ちるわけです。それが中身の無い山田幸助で、そいつはそれを補うため、そして過去のトラウマから他人と接する時はキャラクターを作ってそれを演じるんです。つまり、山田幸助は2人です」

「結局良く分かんないんだけど。主人公って何なの？」

「空っぽの宝箱があって、それを守るための壁が二重に設置されています。そしてそれぞれの壁の色は全く違います。例えるならこんな感じです」

「余計分かんないわ」

「すみません」

「じゃあ何で主人公ってISの世界に来たの？」

「生身でチートを使ってISを倒せたらすごくね？　という浅はかな考えのもと、この世界を選びました」

「なんでそんなに投げやりな設定なの？　主人公の心理状態はやたらと複雑なのに」

「いや、逆にこの主人公が確固たる目的を持って行動する方が違和感があるって言うか……」

「いやいや、おかしい。それはおかしい。じゃあ何？　他の世界でも良かったってこと？」

「いや、逆にどうしてもISじゃないとヤダなんていう主人公なんているんですか？」

「そういう話じゃないでしょ？」

「はい、すみません」

「あとさ、エイトだっけ？」

「はい」

「ちょっと意味が分かんないんだけど」

「……と申しますと？」

「まずさ、なんでそんなに”対等”に拘るの？」

「えっと、搦め手というか、そういう策を弄したり弱点を突いて、勝つべくして勝つよりも、真正面から対等にぶつかるといって、両者ともに同じ状況で勝った方が、相手にとっても自分にとってもその勝利はより一層映える物だし、それに同じ条件下の方が『どちらか一方が勝っている』っていう証明をより強めますからね」

「ふーん、そう。なんかイマイチ分かんないけど、次にさ、結局エイトは勝ってんじゃないん」

「でも、彼の場合はISを持っている、そのための厳しい訓練を積んでいる、能力にマイナス効果が無い、相手を自分と同一人物だと認めている。などなど、アドバンテージが沢山あるわけで、こんな状況で勝っても意味が無いと。しかも最後のなんか、相手の太刀筋が手に取るように分かるっていうのもココから来ていて、主人公が勝てなかったのは、単純に鍛錬不足と、相手が自分と同一人物だと認めなかったせいで、本来なら読める太刀筋も、100%の推測は無理だったからなのです」

「ふーん、あつそ。ってかソイツさ、なんかもう存在自体が後付けだよな」

「ギクウウウツ！」

「それとも何？ まさか初めからこんなややこしい設定だったわけ？」

「いえ。本来なら主人公は、病的なまでにやる気の無い少年という設定でした。それがどうしてこんな……」

やばい、眠すぎて頭が回らなくなってきた。
何か書いてたら他にもボロボロ出てきそうだ。

DA S O K U 〱読まなくなつていいんだよ？〱（後書き）

（ここは……どこだ？）

男——ストレイト・クーガーが目覚ますと、そこにあつたのは見知らぬ天井、そして見知らぬ顔。

（俺はもう死んだはずじゃないのか……？）

「さあ、キミは今日から私達の息子だ。名前は、そうだな……ストレイト、ストレイト・クーガーなんてどうだろう！」

（まさしく俺の名前だ！）

「まあ、素敵な名前だこと」

微笑んだのは女性だった。見れば、自分はこの女性に抱かれている。

（なるほど、俺は転生したのか。つまりこれは第二の生。くしくも前世と同じ名前ときた）

両親に気付かれないように、こっそり床を分解してみる。

（よし、アルター能力は使えるらしいな）

前世でのクーガーは、能力の強化の代償に、身体がだいぶ劣化していた。しかし今はそれが無い。つまり、万全の状態で、今までよりも速く走れるということ——！

（やってやるっじゃねえか）

今宵、みんなの兄貴ストレイト・クーガーが、誰よりもスピーディーに、スマートに、ストレンジにISの世界を駆け抜ける！

「ISつてのはその程度か？ そんなスピードじゃ俺には勝てないぜ？ イチャヤ！」

「一夏だ！」

かみんぐすーん。きつと上記の様な小説は探せばあると思います。自分は見た事はありませんが。読みたい方は探してみましよう。

それともやっぱり兄貴じゃなくて姉御にして、専用機をラディカル・グッドスピードにするのもいいかもしれない。

いや、むしろ聖杯戦争に最速の兄貴光臨なんてのもありかもしれない。

魔女の騎士でぎにゃあああなセイバー

みんな大好き赤い錬鉄の英雄なアーチャー

元気で努力家でワン子なランサー

みんな大好き最速の兄貴なライダー

友情出演！ 喧嘩大好きでもっと輝けええ！なバーサーカー

ちんちくりんなステッキを操るピンク色の髪のキャスター

背後に立つたら殺される13なアサシン

尚、この企画は自動的に（ry

12（前書き）

「そ、そんな！ 量産型のISがこんな……ッ！」

混乱。驚愕。困惑。いや、まだ足りない。

セシリア・オルコットの心境はいかほどにも形容し難いものだった。

”量産型の試験戦闘を手伝ってほしい”

そう頼まれ、快く引き受けた。

量産型のテストくらい、自分に掛ければ大した手間では無い、そうたかを括って。

しかしセシリアの予想は大きく外れる事となる。

日本の量産機である『打鉄』が相手だと思っていた矢先、現れたのは見たことの無い機体だった。

全体的な色調は淡い青。しかし腕の装甲は肘先までしか無く、まるで腕まくりをしているようにも見える。

そしてつま先は装甲に覆われておらず、さながらサンダルを履いているようだ。

そして眉毛に沿う形で装着された黒いカモメのような物。

それらが織りなす、そこはかとない”おっさん”臭。

全てが未知。本当にISなのかと疑ってしまう。

しかしいざ戦闘が始まると、目の前の機体がいかに規格外かを思い知らされた。

一見荒々しい動きだが、かと思うと柔軟かつきめ細やかな機動を見せ付け、何の変哲も無いただの殴打と思いきや、その身に受けた瞬間、セシリアの身体は大きく弾かれる。

セシリアは内心の動揺を隠しながら訊ねる。

「量産型にしては、いささか性能が高すぎるのではなくて？」

対する操縦者は、してやったり、といった表情を浮かべ、

「だから言ったでしょ？」 両さん型”だつて”

ところで1つ聞きたいのですが、

結局のところ、第四世代の展開装甲って何がどうなって何がどうすごいですか？

とある病院の一室

白を基調とした部屋の中、静かに眠る1人の少女。

その少女の傍らには、さながら武士を思わせる鋭い雰囲気纏う女性と、医者と思われる男が立っている。

「それで、容態は？」

女性は努めて平静を保って訊ねた。それに対し、医者は淡々と事実を述べていく。しかし、ある話題に触れた時、医者の表情に影が差した。医者の告げた内容に、女性は驚愕を以って返す。

「心臓と同化している、だと？」

「はい。信じ難い話ではありますが……。少なくとも我々には、今彼女からISを切り離すことはできません。篠ノ之博士ならば分かりませんが……。まあ、幸い命に別条はないようですので、現状はこのままでも問題は無いかと思われます」

言われて、女性は自身の友人である天才の顔を思い浮かべる。

あの天才は興味があること以外には全く頓着しない。果たしてこの少女に関心を持つのだろうか、と。

「念のため政府には報告しておきました。恐らく彼女の元には、学園への推薦の話が行くことになるでしょう」

医者の言葉に、女性はベッドに横たわる少女へと視線を向ける。

「八神優……たしか一夏のクラスメイトだったな」

§

あの事件のせいで、私は今の入院生活を……強いられているんだ！
（集中線）

というわけで、一夏の誘拐事件は無事に解決し、私はぶっちゃけ無駄に怪我を負っただけだった。

話を聞くと、一夏の居場所をドイツ軍から聞き付けたブラコンお姉ちゃんが、大会を放り出して助けに来たらしい。

当然その時に私の事も見つけたわけだけど、その時の私の状態が半端じゃなくヤバかったらしい。

まず出血量。服が真っ赤になる程の出血量。これだけでもヤバいの

に、出血なんてもんじゃない。傷がひとりでに塞がってく。これはマジでヤバかったらしい。何処のモンスターだよって感じ。病院に付く頃には、血まみれなのに傷一つ付いていない新品同様の状態だったらしい。それについては滅茶苦茶しつこく聞かれた。うん。多分それゴッドハンド。

だが正直な話、事件当時の事はよく覚えていない。口の悪い女に圧勝した辺りまでは覚えてるんだけどな。

なので傷について聞かれても、覚えてないの一点張りだった。嘘は言ってない。

で、さらにヤバい事がもう1つ。

どうやら私の中にISがあるらしい。しかも今のところ摘出は無理らしい。冗談だと信じたい。

だが冗談では無いようで、わざわざ元ブリュンヒルデ直々にご通達くださった。

生身でISに勝とうっていう話だったはずなのに、ISに乗ったら意味無いじゃん。

しかも卒業後はIS学園に通ってもらうとのこと。もう本編から離れられないじゃん。

IS関連の話を除き、両親に詳細は伝えられていない。特に傷が治ったくだりなんかは話したって信じて貰えないだろうし。

それから一週間ほど検査入院とやらが続いた。

その間、ほぼ毎日のようにいつもの3人が見舞いに来てくれたのだが、特に一夏の勢いは半端じゃなかった。

涙ポロボロ流して、なんかもう葬式みたいな雰囲気でも何度も謝ってきた。もう一種のホラーだったね。

で、なんか一夏がキリツとして決め台詞的なのを言って、隣で鈴が真っ赤になってギヤーギヤー言ってる、弾はなんか、へえー一夏も言う時は言うんだ的な事を言って、私は普通に聞き流していたので、ああー、うん。みたいな事を言ったら、鈴がなんか私にもギヤーギヤー言い出して、なんかもう地獄絵図だったね。

しばらくして退院。

この頃には私の一夏に対する評価はある程度向上していた。

なんというか、ヤツは普通にいいヤツなのだ。鈍感という、傍から見ている分にはかなりイライラする欠点はあるものの、その他でのスペックはかなり高い。そして何よりも気がきく。

特に事件後は甲斐甲斐しくなったというか、なんだかいつも一緒に居た気がする。なんでだろうな。キリツとした時に言っていた台詞

をもっとちゃんと聞いておけば、もしかしたら分かったのかもしれない。

ちなみにこの時、鈴から物凄く複雑な視線を感じた気がするが、まあ気のせいだろう。

その後は鈴が中国に帰ったり、まあいろいろあったわけだが、特に何事も無く時は流れ、なんやかんやで三年生に進級。

他の生徒が進路だのなんだのとキャツキャウフフするなか、私はそれとなく一夏に進路について訊ねてみた。

「進路？ ああ、それなら藍越学園を受けようと思っててさ」

なんでも、学費の安さと就職率の高さに釣られたらしい。

あれ？ でも一夏は何だかんだ言いつつも最終的にIS学園に来るんだよね？ どうやって来るんだっけ？

……まあ、気にした所で仕方ないか。それに私が介入したことによって展開に変動が起きたのかもしれない。もしかしたら一夏がそもそも入学しないという展開もあるかもしれない。だとしたら本編にもかなり影響が出そうだな。……………一夏のポジションには誰が入るのだろうか。もしかして私？ いやいやナイナイ。

「そう言うユウはどうなんだ？」

一夏に訊ねられ、思考を巡らす。

ここで敢えて言わずに、IS学園の方に意識が行かなくなった方がいい

いのか？　しかしそれだと本筋から大きく逸れることは免れない。かといって一夏に話して、もしIS学園に来てしまえば、もう本編に関わりたくないなど言っていられない。しかし一夏が学園に来なかった場合、下手をすればそのしわ寄せが私に来るかもしれない。いや、そもそも言おうが言っまいが展開に変わりはないのかもしれない。

「実はIS学園から推薦の話が来てて――」

もう知らん。どうにでもなれ。本筋に巻き込まれるのも仕方が無い。転生者の定めだ。

時は流れ、冬。

私は試験会場へ向かう弾と一夏を見送るべく、アホみたいな寒さの中、こうして駅までやって来ていた。

「それじゃあ頑張ってね、二人とも」

冷え切った顔の筋肉を動かし、私はいつもの笑顔を浮かべる。正確

には、いつもよりきつとふつきれた様な笑顔だっただろう。本編不介入を諦めたからな。

「ああ、行ってくる」

「まあ、今年は倍率も低めだし、落ちないと思うけどな」

そんなことを言いながら、電車へと乗り込む2人。

私はこの時、2人をちゃんと見送った。ちゃんと、”藍越学園の入学試験”に見送った。

そのはずだった。

電車の姿が見えなくなった頃、私の脳内に電撃が走る。そう、思い出したのだ。一夏がいかにしてIS学園に入学することになるのかを。

「……なんで今になって思い出すんだよ！」

もう少し早ければなんとか………なにかあったのだろうか？

12（後書き）

そついや主人公のISどーっすっかなー。

北欧神話をモチーフにしよう。っていう漠然とした方向性しか決ま
ってないし。

なぜ北欧神話なのかって？ だって厨二っぽくてかっこいいじゃ
ん。

それとも両さん型にしようかな。間違いなく最強のISだよな。

13（前書き）

吾輩はISである。名前はまだ無い。

——主人公のIS

原作と同じシーンを一夏視点で書くにあたり、原作とは多少表現などが異なる部分がございます。というか殆ど違います。

ソレに触れた時、音叉を叩いたような音と共に、俺の中に膨大な情報流れ込んでくるのを感じた。

数秒前までは知りもしなかった、そして永遠に知ることは無かったであろうその情報が、まるで知悉し、慣れ親しんだモノであるかの様に、何一つの違和も無く脳内を駆け巡る。

視覚野に接続されたセンサーが、直接意識に数値化された情報とパラメータを浮かび上がらせる。

そしてそれらの知識・情報が俺に確信させる。

ソレを動かすことが出来るのだと。

そこから見えた景色が俺に与えたのは、僅かな感動と驚愕。そして、守る力を得たという大きな興奮と歓喜だった。

もう守られてばかりじゃない。俺は絶対に誰かを……アイツを守ってみせる。

ふと思い出したのは、私がIS学園に入ると話した時に一夏が見せた、まるで捨てられた子犬のような表情だった。何故あんなにも悲痛な表情を浮かべていたのかは知らないし興味も無い。しかし、あの時程ヤツに申し訳ないと思った事も無かった。

春の匂いに包まれながら、IS学園の校門を抜ける。

視線を脇に向けると、そこには女子女子女子。女の園と言えば聞こえは良いが、その実はた只管に姦しいだけだ。

しかし厳密に言えば、ここは女の園ではない。何故か。理由は簡単だ。ここにはとある1人の男子生徒が入学することとなっている。

女性にしか動かせないという致命的過ぎる欠陥を抱えたパワードス
イツ、IS。

しかしその定説を覆す猛者が現れたのだ。

そう、我らが主人公、織斑一夏である。

side:一夏

「それじゃあSHRはじめますよー」

黒板の前でにつこりとほほ笑む山田真耶先生。このクラスの副担任だ。

生徒と大差ない身長、大きめの服、ずれた眼鏡、子どもが背伸びしてます感が否めない彼女にぶら下がる、自己主張の激しい胸がなんと……って俺は何を考えているんだ。

というわけで、今日は入学式。そして今はSHR。

新たなる学び舎で、これから先の学園生活へと思いを馳せたいところだが、いかんせん教室内は妙な緊張感に包まれており、それどころではない。

山田先生が何やら話しているが、反応する生徒は1人もいない。というかほぼ全員俺を見ている。

いや、決して自意識過剰ではなく、当然比喻表現でも無い。

そして何より、クラスメイトが全員女なのだ。本当に勘弁してくれ。

これは予想外にキツイぞ。
座席の場所も真ん中の列の一番前。もはや注目してくれと言っているようなものだ。

俺は救いを求め縋りつくように、窓際の席へと視線を向けた。

「……………」

第さーん。別に顔を背けなくてもいいじゃないですかー。俺はこっちですよー。窓の外に俺はいませんよー。

俺の救難信号に気付いているはずの幼馴染は、あるうことか傍観するつもりは無いらしい。

これが6年ぶりに再会した幼馴染に対する態度か？ ……えっ、まさか俺って嫌われてる？

次いで俺は、隣の席へと視線を移す。

そこには、なんだかんだですつと隣の席で、またしても隣の席に居る俺の中学時代からの友人、そして俺ずつと傍で守ると約束した女の子。八神優が――

「……………」

――虚ろな目でただ前を見つめていた。だめだこりゃ。
俺は内心で密かに諦める。

ユウは時折こういった完全な無表情になる時がある。それは授業中であつたり、式典中であつたり、誰かと話す必要の無い時が多い。

この時のユウはコミュニケーションがまったくとれない。前にこの状態のユウに話しかけた事があるのだが、全く会話のキャッチボールが成り立たなかった。

例えるなら、投げたボールを剛速で地面に叩きつけられたような、そんな感じだ。

まるで、この世の全てがどうでもいい、だから関わるな。そう言われている気がしてならない。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!?!」

突然掛けられた声に思考が分断され、現実に取り戻される。ついでに声も裏返る。

そしてクスクスと聞こえる笑い声。本当にキツイ。

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

台詞の途中から、いつの間にか頭を何度も下げていた山田真耶先生。それに伴い、ずれていた眼鏡がさらにずれるが、本人は気付いていないらしい。あっ、落ちそう。

そついうわけで、俺の自己紹介の番が回ってきたわけだが……

(うつ……)

突き刺さる視線視線視線視線。 28人分の死線が、俺を射殺さんばかりに向けられる。

先程俺のSOSを軽くスルーした筈も、俺へとその鋭い視線を横目に注いでいた。

ユウは……まだぼーっとしている。

くっ、男ならこれくらいで立ち止るんじゃない！

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願いします」

言い終え、頭を下げる。ふっ、我ながら隙の無い完璧な挨拶だ。

そんな俺の感想に反し、教室内には『もっと話せ』というオーラが充満している。

一体どうしろって言うんだ。一発ギャグでもやれってか？ でも俺の持ちネタなんてそんなに多くないんだけどな。しかも評判悪いし……。

俺はまたもや筈へと救いを求めるが、またしても視線を合わせてくれない筈。泣くぞ。

ユウはさっき確認した。返事が無い。ただの屍の様だ。

しかしこのまま黙って座ると『暗いやツ』というレッテルを貼られそう。よし、いれ……

「以上です」

その後、数名の女子生徒がずっこけ、実はこのクラスの担任だった千冬姉に出席簿による一撃を貰うはめになるのだが、正直痛すぎて上手く語れない。

で、俺の番が終わり、自己紹介は進んでいく。座席はランダムなのか、割といろんな方向から声が上がった。

そしていよいよ俺の隣の席——ユウの順番がやってきた。

が、

「ふむ、これまで敢えて待ってみたが……八神、私が前に立っているにもかかわらず呆けるとは、いい度胸だ」

そう。ユウは未だに魂が抜けていた。そして千冬姉の必滅の一撃が振るわれ——

「……なぜ止める」

——なかった。いや、振るわれたのだが、それをユウはいとも簡単に受け止めたのだ。それも片手で。

そういえばコイツ、運動とかかなり得意だったな。

そのすぐ後、ユウの瞳に光が灯る。

「……………えっ？ えっ？ あっ、わわっ、すいません！」

千冬姉の眼光にあてられたのか、普段は落ち着いているユウが目に見えて焦っていた。こんなテンパったユウは初めて見たかもしれない。

s i d e o u t

「あー……………」

授業終了後、隣で一夏が頂垂れていた。
あれ？ たしか一夏ってそれなりに勉強も出来たと思うんだけど。

「どうしたの？ 一夏くん」

一夏は頂垂れたまま頭を抱えた。

「いや、この雰囲気が何とかならないものかと……………」

「ああ、そっちな……………」

教室を見回す。するとこちらへ向けられていた視線がふいつ、と逸れる。

それは廊下も同様だった。今にも壁を押し倒して教室へ流れ込んで来そうな程の生徒がひしめき合っている。

ゴキブリみたいだ。

「……ちよつといいか」

声がした方に顔を向けると、そこに居たのは黒い髪をポニーテールに纏めた、日本刀の様な雰囲気纏う女子生徒――篠ノ之箒だった。ってというか私より胸でかいな。

そんな思考を見透かしたのか、箒の鋭い視線が私を射抜く。

……はい。黙ってます。

「……箒？」

一夏が顔を上げ、幼馴染との感動の再会を果たす。
うん、良かったな。

「……廊下でいいか？」

一夏は周囲を見渡し、こくこくと頷く。
そんなにこの空気が耐えられないか。

「早くしろ」

「お、おう。それじゃあユウ、後でな」

彼女が一夏を連れだつて廊下へと歩を進めると、モーゼの如く人波が割れていく。すげー、初めて見た。

それから少しして、篤が先に教室に戻ってきた。もう話は終わったのだろうか。

その直後、千冬さん（↑さん付けに昇格）がツカツカと入ってくる。

っ！ まずい、急げ一夏！

案の定、遅れて入ってきた一夏は千冬さんの制裁を受けることになった。

13 (後書き)

誰か北欧っぽい感じの名前考えてくれないかなー(ノωノ)チラッ

14（前書き）

なぜ悪い事をするのかって？ ふん、簡単な話さ。それはな、お前が正義だからだよ。

——バイキンマン

ってかヤバイ。10分前にはあつたはずの感想が消えた。間違えて消したかも。寝ぼけてたのかな

廊下を歩く2人の男女。

1人は腰にまで届きそうな長髪をポニーテールにして纏めている少女。その凜とした雰囲気は一本の真っ直ぐな刀を彷彿とさせる。

もう1人は整った顔をしているが、その他は最低限の清潔感を身だしなみ程度に保っている少年。飄々としており、見るからに唐変木である。

そしてその2人を取り巻くように、一定の距離を保った位置で包囲網を形成している女生徒たちの集団。

彼女らはさながら零れ落ちたエサを貰い受けようと息をひそめるハイエナの如く、必死に聞き耳を立てている。

一般的な日常生活を送っているはず見ることの無いこの状況の中、先に口を開いたのは少年だった。

「そつえば」

「何だ？」

即座に反応する少女。少女の言葉に促され、少年は言葉を発した。

「去年、剣道の全国大会で優勝したってな。おめでとう」

不意の称賛に頬は朱に染まり、口はへ字に歪む。なんとも判りにくい照れ方である。

対する少年は一瞬不思議そうな表情を浮かべるがすぐに表情を戻し、それから、と続けた。

「久しぶり。六年ぶりだけど、筈ってすぐ分かったぞ」

「え……」

「ほら、髪型一緒だし」

少年に指をさされ、途端に髪を気にしだす筈と呼ばれた少女。

「よ、よくも覚えているものだな……」

その事実がよほど嬉しいのか、見るからに少女周辺の空気が華やいでいる。

ところが、

「いや、忘れないだろ。幼馴染のことくらい」

突如、少女の雰囲気が一変する。その鋭い視線が少年に向けられるが、少年はまたしても不思議そうにしている。

それから2人の間に沈黙が流れる。少女はチラリと教室を見やり、その沈黙を破った。

「……ところで、その、先程お前の隣に居た女とはどういう関係だ？」

「え？ ああ、ユウの事か？ アイツは中学からずっと」

ここで、チャイムの音が少年の言葉を遮った。

§

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

目の前でデカイ乳をした小さい先生が講釈を垂れており、教室の隅では黒髪巨乳な先生が武士の様な威圧を放っている。

現在は授業中。概ねの生徒が時折頷きながらノートを取っているのに対し、ノートを広げたまま放心している生徒が約2名。

1人は私こと八神優。といっても私の場合、推薦が決まってからはIS関連の知識を片っ端から頭に叩き込んだ（叩き込まれた）ので、そもそもこんな授業は受ける必要が無い。つまり面倒だからノートを書いていないというだけの話である。

正直なところものすごく暇だ。意識をシャットダウンしたいくらい。

しかしそれが出来ないのは、後ろで陣取る某三国志の英雄……もと
い、織斑千冬先生が怖いからだ。
いや、今朝はマジで食べられるかと思った。

「八神、くだらん事を考えるな」

「す、すみません」

ばれてるし。っていうかこんなの八神優のキャラじゃない。なんで
こんなに鋭いんだよチクショウ。

そして2人目は、私の隣の席に座るこの世界の主人公——織斑一夏
である。

彼はどっかりと積まれた教科書をチラつとめくつたり、板書をして
いる女子生徒を物珍しそうに見たりと忙しそうだ。

「な、なに？」

一夏の視線に気付いた女子生徒が、期待と驚きと緊張が入り混じっ
たような作り笑顔を浮かべる。

ふん、私の方が作り笑いは上手いな。

「あ、いや。なんでもないんだ。ゴメン」

「そ、そう」

そして残念がりながら安心するという器用な芸当をやったのけ、再

び授業へと復帰する女子生徒。

行き場を無くした一夏の視線が、今度は私へと向けられる。

私のノートを見るや否や、まるで雪山で遭難して助けが来た時の登山家の様な、希望に満ち溢れた表情になる一夏。

その顔が語っていた。仲間を見つけた！ 信じてたぜ、ユウ！ と。ふん、莫迦め。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

先程の一夏と女子生徒のやりとりが目に入ったのか、山田先生が授業を止めて一夏に訊ねた。

突然の質問に、慌てて教科書に視線を落とす一夏。その整った顔面には溢れんばかりの疑問符が浮かんでいた。

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

教師らしく振る舞えて嬉しいのか、えへんという効果音が出そうな程に胸を張っている。

ふむ、デカイ。邪魔じゃないのかな。

一夏は期待に目を輝かせ、天を突く勢いで腕を真っ直ぐに掲げた。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

だろうな。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

しかし山田先生はこの返答が予想外だったのか、マジ困るんですけどオオオ！ といった風に顔を引きつらせている。

「え、えつと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

山田先生が挙手を促すが、当然どこからも手など上がる筈が無い。そもそもこの学園に来る生徒というのはすべからく事前学習に取り組んでいるものだから、この程度で止まっている方が異常だ。

僅かな望みを捨てずに、本当に手が上がらないのかと周囲を確認する一夏。

ふと、私と目が合う。その双眸からは裏切りに対する落胆が見て取れた。

（ユウ！ 裏切ったのか！）

（いや、そもそも私と一夏くんが同じステージにいるはずが無いでしょ？ 一応推薦でここに来てるんだよ？）

（なん……だと……？）

アイコンタクト終了。

この直後、一夏は例によって例の如く、いつの間にかここまで来ていた千冬さんの出席簿アタックを受ける羽目になる。

まあどうでもいいk「八神、お前もだ。白紙のノートとはどういう見だ、馬鹿者」

言葉が耳に届いた次の瞬間、私は反射的に首を傾けていた。額に目掛けて横薙ぎに振るわれていたソレは、気持ちのいい音を伴い、見事に後ろの生徒へクリーンヒットする。そして教室を支配する微妙な空気。

後で謝っておこう。

地味に長かった授業が終わり、張りつめていた教室の空気が緩んでいく。

休み時間に入っすぐ、一夏が先程の授業についての解説を求めてきた。

めんどくさ。

しかし断るための都合のいい口実も見当たらないのもまた事実。なんやかんやで、結局教えることに。

「じゃあまずはこのアラスカ条約の項目から――」

教科書を広げ、一夏に解説しながら考える。なんだか最近の私はおかしい、と。

そもそも中学時代の私はこんなに注意されるタイプのキャラじゃなかった。

基本的に何でもこなす感じのキャラだったのにどうしてこうなった。最近は本当に気が抜けているというかなんというか。

「例えば国家や企業に属するISは――」

もしかして原作に追いついた上に本編不介入を諦めたからか？

今までは自分のどんな言動がどう本筋に影響するか分からなかったし、何とかして本筋から離れようと気を張っていたが、今はそうではない。

もはや逃れることは不可能なのだ。どうしようとする程度本編に組

み込まれることは避けられない。故に気を張ったところで仕方が無い。そう考えているところがあるのは否定できない。

「ちょっと、よろしくて？」

「よろしくないです。で、この場合考えられる罰則としては――」

いや、違う。確かにそれもあるだろう。しかし他に大きな要因がある。

私はとある存在を頭に思い浮かべた。元日本代表にしてこのクラスの担任、そして現代を生きるサムライ――織斑千冬だ。

彼女の異常なまでの洞察力と観察力。それがあから手抜きをしてもばれるのではないか？

つまり私が今この状況に陥っているのはあのラストサムライのせいに違いない。

「ちょ、ちょっとあなた！ このわたくしに対してその態度とは一体どういうおつもりですの！？」

「ま、まあまあ。それで、用件は何だ？」

「あなたもその態度は何ですの！？ このイギリス代表候補生であるセシリア・オルコットがわざわざ声を掛けて差し上げたというのですから、それ相応の対応があつてしかるべきではなくって！？」

「……ダイヒョウコウホセイ？」

「代表候補生っていうのはIS操縦者の国家代表を決めるための候

補、有り体に言えばエリートという――」

……うん？ そんなワードは教科書に乗ってないぞ？

と、そこで現実を引き戻される私。ふと顔を上げると、目の前には顔を真っ赤にして怒髪天を突くという言葉を体現している金髪ドリルさん。

なんだっけコイツ……セシリアだっけ。

セシリアは『エリート』という単語に少し気を良くしたのか、幾分か怒りが引いて行くのが分かった。

「そう、わたくしは選ばれたエリートなのですわ！」

そして私達にその白い人差し指を向け、高らかに言葉を紡いだ。

「本来ならわたくしの様な選ばれた人間とは、クラスを共にするだけでもきs」

キンコーン……

突如として鳴り響く鐘の音。それはセシリアの言葉を遮り、次なる授業の始まりを告げる。

……。

「え、えっと、それじゃあ後でね。オルコットさん」

私はいつもの笑顔を浮かべる。すると、そんな私の態度に、何故か

目を白黒させるセシリア。

まるで私が先程とは別の人間に切り替わったかのように驚いている。

……考えすぎか。

14（後書き）

教えて！ 八神先生！

優「正直に言おう。現時点でのこの小説モドキの評判は悪い」

夏「先生！ なぜ頑なに小説扱いするのを拒むのかはこの際置いておきます。評判が悪い理由は分かっているんですか？」

優「ああ。作者の頭の悪さや文章構成能力の無さは勿論の事だが、何よりも主人公の背景に重きを置き過ぎだ。っていうかややこしい」

夏「ややこしい？」

優「普通転生モノでは、基本的に転生先の世界をメインに描くのが定石だ」

夏「ふむふむ」

優「しかしこの作品ではどうだ？ 主人公に変な設定を持たせたせいでそれについてのバックボーンを描かねばなくなり、それに作者の能力が追い付かず、結果として事情背景についての説明はこんがらがり、主人公のキャラ付けもしなくてはならず、転生後の世界での活躍が薄くなっている。まともにチート能力を発揮したのが連載してからかなり経ってからだったのがいい例だ」

夏「確かに。それまではキャラを印象付けるための日常シーンばかりでしたね。しかもそれもイマイチでしたし。っていうか無駄が多いし。明らかに読者の需要と離れてますね。しかもここまで来たら直ちに直せませんし」

優「そうだ。そして主人公の背景を構成する上で、大きくウェイトを占めているヤツがいる。ソイツがさらに問題だ。というかソイツの存在自体がややこしい。面倒だ。後付けキャラのくせに出しゃばりやがって」

ガラッ

8「呼んだ？」

夏「名前適当だな」

優「これはこれは。本作品屈指のウザキャラにして絶賛大不評の自称天才エイトさんじゃありませんか」

8「俺は悪くない。悪いのは作者の頭だ」

夏「そんなことよりお前の名前ってさ、明らかに八神の八からとつたよな。明らかにネーミング手抜きだよな」

8「うるさいわ雑種め。そもそも何故か俺がパツと出のキャラっぽく見られているようだが、一応言っておくと存在自体は初っ端から示唆されている」

夏「でもそれが伝わって無いなら意味無いだろ。しかも書き始めた当初は全くの別人を出す筈だったんだよな」

8「だから作者の頭が悪いんだよ。そしてなんかややこしいみたい
に言われてたけど、一応オリキャラは2人だけだし、場を引つ掻き
回しているように見えるかもしれないがそれは主人公との間だけで
作品全体で見た時には」

優「はいはい言い訳言い訳。まあ、この後書き自体も言い訳だけど
な」

夏「ああ、やっぱり？　そうだと思ってたわー。俺初めからそうだ
と思ってたわー」

15 (前書き)

友達？　いないいない（笑）
レム。
え？　彼女たち？　ああ、俺のハ―

――ミサワ版　羽瀬川小鷹

突然だが、世の中には覆しようの無い選択というものがある。

例えば自動販売機での選択。

一度購入したジュースは返品できないし、ましてや他の物と交換など尚更だ。当然金など返ってくるはずもない。

例えばギャンブルでの選択。

一度賭けた金は決して戻る事はないし、仮に負けでもした場合、まるでメビウスの輪のように出口の無いギャンブルコースが口を開けて待っている。当然そこに入ってしまったえばその選択は覆せない。

このように、選択に対して拒否権が発生することが無いなどというのは日常茶飯事なのである。

え？ ギャンブルは日常じゃない？ 気のせいなのである。

「結論から言おう。八神、お前には日本の代表候補になってもらう授業開始直後、いきなり千冬さんに廊下に呼び出されたかと思えば、なんともまあぶつ飛んだお話をぶちかましがったのだ。

突然の展開に軽く混乱する頭を落ち着かせ、なんとか冷静に対処する。

「えっ、いやですよ」

あっ、間違えた。……いや、間違えてないか。これは紛れもない本音だ。

即座に吐き出された本音に、溜め息をつき、こめかみに指をあてる千冬さん。

「確かに逆らう事は許可したが、まさかこんなにも早く実践されるとはな……」

許可したのかよ。すみません、聞いてませんでした。

内心で謝罪する私をよそに、千冬さんは毅然とした表情に戻り、淡

々と言葉を投げつけた。

「だが、お前に拒否権は無い。織斑の騒動で遅れたが、先程申請が受理されたとの連絡があった。……まあ、お前の場合は候補生と言っても書類上の身分でしかない。IS適性も高くはないし、搭乗経験も浅い。これが関連書類だ。この中に適性検査の結果も入っている。目を通しておけ」

そう言つて渡されたのは、茶色とベージュの中間色の様な、なんとなく色なのか良く分からないけど何故が多く一般普及しているあの封筒。

「はい」

返答と共に1つの疑問が湧き起こったが、それはすぐに処理された。

何故私が代表候補なのだろうか。考えてみれば分かる事だ。

私は現在IS……つまり、専用機を所持している。

専用機というのは原則として国家・企業に所属する人間にしか与えられない。しかし当然ながら私のバックには国家も企業も存在しない。

となると、周囲から見た時に、私が専用機を所持しているという事実はかなり不自然に映る。

一応ISを手に入れた経緯の特異性から、所持しているという事実、及び推薦入学という事に関して周囲には秘匿されている。

推薦について知っているのは、私の周りでは一夏と弾、それから学校の教員等関係者、そして家族だけだ。ISの存在に関しては家族しか知らない。

しかしそのような秘密はいつまでも隠しきれるものではない。いず

れは露見するだろう。

そうだった時のための書類上の身分——国家代表候補生というわけだ。多分。

すると今度は別の疑問が首を擡げる。

私がISを入手したのは2年前。一夏の騒動が起きる前だったはずだが……？

「ああ、申請が遅くなった件についてはお前のご両親からの頼みだな。せめて中学にいる間は普通の子供として過ごして欲しかったらしい。現に知識の学習はしても搭乗訓練などはしていなかっただろう？最近のIS至上主義に流されない良い親だ。ソレが兵器だという事を良く理解している」

「そうだったんですか……」

お父さん、お母さん、気持ち嬉しいよ。けどさ、そういうことは私に一度話を通すべきじゃないかい？　っていうかナチュラルに心を読むんじゃないそこの教師。

誘拐事件の後処理について、私は殆ど詳細を知らない。

というのも、私の入院中にそれが済まされたからだ。そこにいる千冬さんとドイツ軍が奔走したのだそう。

なのでその際に両親がどう対応したのかも知らないし、もしかしたらその事件がきっかけでISが嫌いになったのかもしれないが、結局詳しい事は分からない。

「話は以上だ……」と、その前に、候補生の肩書も間に合った事だし、別にもうバレても問題は無いが一応聞いておく。推薦やISの

所有に関して他人に話してはいないだろうな？」

教室へ戻ろうと踵を返した千冬さんだったが、立ち止り、振り返る。問題無いと言っても、結局はバレないに越したことは無い。先程も話に上がったが、私は搭乗訓練などは殆どしていない。故に操作に慣れておらず、正直に言うと素人も同然だ。そんな人間が代表候補生などと言っても信じられないだろう。

「はい。話してま……あ」

その時に浮かんだのは2人の顔。五反田弾と織斑一夏だ。彼らには推薦入学について話してしまった。私の反応に、千冬さんの視線が鋭さを増す。

「誰に話した？」

有無を言わせないその迫力に別にびびってなんかないんだからっ！

「推薦に関して中学時代に2人。うち1人は一夏くんです」

びびってなんか……ないんだから……

千冬さんは聞き覚えのあるであろうその名前を反芻し、まあいいかと結論付けた。

「アレも事件の関係者……というか当事者だからな。知っておくべきか。まあいずれにせよ、ある程度実力がつくまでは隠しておいた方がいいだろうな。後で私からアレに言っておこう。」

……それにしても、お前らは名前で呼び合うような関係なのか。それについても訊いておこう」

にやり、と意地の悪そうに口の端を吊り上げる千冬さん。
勝手にしろよブラコン。

あ、IS適性ランクについて聞きそびれた。……まあ、結果は封筒の中らしいし、後で確認しよう。

「遅くなってすまない。ではこの時間では実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

教室に戻り、教壇に立つ千冬さん。どうやらこの授業はそれなりに重要らしく、山田先生もノートを広げている。

しかし授業を始めようとしたところで、千冬さんは何かを思い出したような表情になる。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦？ 代表？ …… ああ、あれか。セシリア攻略イベントか。ならば私には関係ないな。

隣では未来のクラス代表である織斑一夏が千冬さんの言葉を何とか解読しようとしていた。

しかし一向にその解読は進まないようで、見かねた千冬さんが口を開いた。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…… まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

教室にざわめきが広がる。当然ざわめきと言ってもカイジのようなざわめきではない。どちらかというと、これから起こるであろう未来に対する期待を込めたざわめき。

ちなみに一夏は、意味は分からないけどとりあえず納得しとけ、みたいな顔をしている。一番の当事者のくせに何やってんだか。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

どこからか嬉々とした声上がる。話題に上がった本人は、何故かきよろきよろと周囲を見回している。まるで自分以外の”織斑くん”を探しているようだ。

「私もそれが良いと思います！」

便乗する生徒、そしてうんうんと頷く織斑。アホか。

そのアホを放置し、教壇で千冬さんが何でもないように告げる。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

と、ここでようやく隣の席から、机の揺れる音と共に、現状を把握したアホの間の抜けた声が響く。

「お、俺！？」

そう言っただけで立ち上がったのは勿論一夏だ。

その一夏に対し、クラスの女子達の好奇と期待に満ちた視線が向けられ、実の姉である千冬さんからはその名の如く冷たい視線で射抜かれる。

「織斑。席に付け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いらないなら無投票当選だぞ」

その言葉に慌てて待ったをかける一夏だったが、拒否権はないという千冬さんのありがたいお言葉に切り伏せられる。

はっはっはっ、諦める。

しかしそこで諦めないのが男の子。ただ、今回はその諦めの悪さが裏目に出たと言えよう。

焦りに焦った一夏は、とんでもないことを口走ってくれたのだ。

「だ、だったら！俺は八神さんを推薦します！ここにだって推薦で入学しているし、俺なんかよりも優秀です！」

後者の『推薦』というワードに、先程とは質の違うざわめきが広がる。

……はっはっはっ、なかなか面白い冗談だ。ギャグセンスがおっさんな一夏にしてはよくやったんじゃないか？

……………。

「え？私？」

side：一夏

教室がざわめく中、俺は後悔の念に苛まれていた。

（馬鹿か俺はッ！ 守るって誓った女の子を早速矢面に立たせてど

うする！)

クラス対抗戦……一応ISによる戦闘では命を落とすことはないと聞く。しかし操縦に支障の出るレベルの怪我を負う事はあるそうだ。そんなものにユウを出すくらいなら俺が出た方がマシだ。

「あの……やっぱり今は」

無しで。そう言い終える前に、俺の言葉を甲高い声が押しのけた。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

声の主は、先程のイギリスの人。たしかセシリアって名乗ってたな。

「そのような選出は認められません！」

以下長かったので内容を大雑把に纏めると、

ええ加減にせえやクソジャップが！ こちとら来とうもない極東の後進国にまでわざわざ来てやっとなんぞ！？ それだけでも感謝せえ！ しかも普通に考えて代表は自分らちゃうやろ！ 実力トップはこのワイヤ！ サーカスちゃうねん！

とのこと。別にエセ関西弁で纏めた意味は特にない。

ここまでは俺も割と聞き流せていた（ユウは意識が飛んでいた）が、
「大体クラス代表が男などと恥さらしもいいところです！ そちらの方にしだって推薦だか何だか知りませんが、それだけで私よりも

優秀だなどと思いがりも甚だしいですわ！ 第一こんな小国で推薦を受けたからと言ってもたかが知れています！ こんな極東の猿ごときに代表を任せるといふ屈辱を、このわたくしに一年間も味わえとおっしゃるのですか！？」

この言葉を聞いた時、俺は思わずセシリアを睨みつけていた。

この女尊男卑の風潮だ。俺を馬鹿にするのは百歩譲って分からなくもない。

だが、ユウを侮辱した事は許せなかった。

誘拐された時、真っ先に現場に駆けつけてくれた、自分のために傷付いてくれた、強く優しい少女を、お前は一体何の権利があつて踏みしめた？

怒りが胸の中で劫火となり、理性を糧に燃えたぎる。

「言いたいことは分かった。欧州そっちの流儀に合わせてやるよ。その方が四の五の言うよりわかりやすい」

俺は静かにその炎を叩き付けた。

「決闘だ。セシリア・オルコット」

15（後書き）

いやー、認識の齟齬って怖いね。

ところで日本でも2009年か08年に決闘罪で逮捕された事件があったそうですよ。

16（前書き）

「せめて死に様で我を興じさせよ。雑種」

言葉と共に放たれる宝具の嵐。

その標的は突如として現れたサーヴァント——バーサーカー。

1つ1つが必殺の威力を持つ宝具の群れが狂気に染まった英霊へと降り注ぐ。

直後、それらは万雷の如き轟音を響かせ、大地を抉る。そして巻き起こされる惨憺たる破壊。

「ほんげええええ！」

破壊音に混じり、バーサーカーの野太い叫びが吐き出される。

粉塵が視界を遮る中、彼が最初の脱落者となる事を誰もが確信していた。

しかしその予想は、誰もが予想だにしなかった意外な形で裏切られる。

彼のサーヴァントを覆っていた粉塵が晴れ、その姿があらわになる。

「ほう……」

騎乗兵のサーヴァント——ライダーが感心したように顎を擦る。
対照的に、宝具を放ったサーヴァント——アーチャーはその貌を憤

怒に染めていた。

各々が恣意な反応を見せる中、満身創痍ではあるものの、狂戦士は
いまだ健在であった。

相反する表現ではあるが、その表現が最も相応しいのだ。

彼の皮膚や身に纏う淡い青色の衣装は所々焼け焦げ、頭からは煙を
上げている。

しかしその瞳には強い意志がぎらぎらと煌めいており、宝具が突き
刺さり、もはや原型を留めていない大地を目まぐるしく奔走してい
る。

そう。彼はアーチャーの宝具を拾い集めていた。

そして全てを抱え込むや否や、そのむさ苦しい顔面に下卑た笑みが
貼りつく。

彼の瞳には強い意志——\$マークが浮かんでいた。

そして逃走。

バーサーカーはサンダル特有の音を煩わしく響かせながら、漫画の
ように土煙を上げて疾駆する。

その姿が視界から消えた頃、ライダーのマスターである少年がぼそ
りと呟いた。

「何なんだあのサーヴァント……何もかも規格外すぎる。全ステ
ータスがEXだなんて聞いたことが無い……」

これは、

「バーサーカー！ 戻ってこ…ゲホッゲホッ」

「うるさい！ 病人は大人しく寝てろ！ ワシはこれ売りに行く
」

金に狂った英霊が織りなす、運命の物語――。

教室を支配する張りつめた空気。

その中心に居るのは2人の生徒。

世界で唯一ISを稼働させることが出来る男——織斑一夏

イギリスからの留学生にして国家代表候補——セシリア・オルコット

互いの瞳に宿るは明確な敵対の炎。火花を散らして静かに対峙する2人に、誰一人として動けずにいた。

しかし、そこで別の方向からの声が両者の熱を削ぐように、冷たく機械的に、淡々と響く。

その声を発したのは、教壇に立つ織斑千冬だった。

「それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。3人ともそれぞれ用意をしておくように。では、授業を始める」

”3人”という単語に反応したのは2人。

1人は先程の織斑一夏。もう1人は、彼の隣で、その人形の様に端整な顔を嫌そうに歪めている女子生徒——八神優。

2人のうち、口を開いたのは織斑一夏だった。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ千冬姉！」

「織斑先生と呼べと言っただろう」

狼を思わせる鋭い眼光に一瞬たじろぐが、なんとか食い下がる。

「ごめ……すみません。織斑先生。ってそんなことより、八神さんへのクラス代表の推薦はなかった事には……」

「出来ん。世の中、覆すことのできる選択ばかりだとは思わないことだ」

実は彼が『推薦入学』などと口走らなければその限りでは無かったのだが、今の彼に知る由はなかった。

セシリアのような国家代表候補生ですら、入学試験を受けてここに来ている。つまり推薦入学とはそれほど特異なレアケースなのだ。一体どれほどの実力を持っているのか、と周囲から勘ぐられても仕方が無い。幸いと言うべきか、現在の八神優の肩書は代表候補生。それで説明が付かないことも無いだろう。しかし同じ代表候補であるセシリアは彼女のように推薦を受けたわけではない。

このように不安定な立ち位置である彼女の存在が周囲に知られてしまった以上、ここでクラス代表の候補から彼女だけを外すという行為は彼女の立ち位置の不自然さを余計に浮き彫りにしてしまう。

千冬が一週間という猶予を設けたのは、自身の弟である一夏のためであると同時に、優に対する「一週間で候補生を凌駕しろ」という無言の配慮……という名の無茶振りだったのである。

「ほんつつつとうにすまん！」

私は何度目かになる目の前の男の謝罪と、周囲からの奇異の視線に辟易し、溜め息をこぼす。

昼休みに入り、奢ると言って聞かない一夏に誘われて（筈は誘う前に居なくなっていた）食堂まで来たはいいが、正直これは予想外に耐え難い。

ここに来るまでは大名行列の如くクラスの殆どが後を着いてくるし、食堂に着いたら着いたで他学年も交えて珍獣扱いだ。

いや、私が珍獣ではないことは理解しているが、それでもその珍獣と一緒に居るといふのはそれなりに好奇の対象になるようで、ここ十数分程ずっと視線に晒されていた。

「ええい！ 雑種風情が誰の許しを得て我を見ている！ その不敬、万死に値するぞ！」

そう叫んで蔵の中身をぶちまけようと何度思った事か。

しかしその度に、他人を傷つけることを嫌う正義の味方が金ぴかA
UOを木端微塵に切り刻み、私を思いとどまらせる。

しかし、人が多い場所というだけでも気分が悪くなるのに、それに
加えてこの纏わりつくような視線。

食欲失せるわ……。

「それよりも大丈夫なの？」

いつまでもネガティブな方向へ向かう思考を切り替え、目の前で頭
を下げる男に訊ねる。

大丈夫、とは、無論来週にある決闘とやらのことだ。

「え？ ああ、大丈夫だ」

顔を上げ、軽く肯く一夏。その表情からは自信が滲んでいる。
マジで大丈夫かよ。いや、まあ信じてるけどね？

「一週間あれば基礎くらいはマスター出来ると思う。まあ、入試の
時は一発で動いたし、多分なんとかなるって。あつ、でもクラス代
表になるのはちよつとなあ……」

「そ、そう……」

……いや、信じてるよ？ マジでマジで。ホントだってば。

最終的な結末を知っていながらも、一夏の態度に一抔どころか多大な不安を覚えてしまう。

コイツの根拠のない自信は一体どこから来ているのだろうか。

「俺が言うのも何だけどさ、ユウは大丈夫なのか？」

そう言って定食の味噌汁を啜る一夏。いや、ホントにお前が言うなこの元凶め。

っていうかコイツは何であんなに怒ってたんだ？ 殆ど聞き流してたからまったくわからん。まあ聞いていたところで私は怒らなかつただろうけど。どうでもいいし。

しかし言われてみればそうだ。なんだかんだで私も来週には闘わなければならぬ。千冬さんがくれた一週間という猶予、これをどう活用するか……

なんてことを考えるのは主人公の仕事であって、私が考えることじゃない。

「うーん、私はわざと負けようかな」

そう言っただけでも通りの笑顔を作る。後でいろいろと言われそうだが、なんかもう面倒だしどうでもいいや。プライド？ そんなもん都市伝説だろ？

「ふーん、そうか……………ってわざと？」

一夏が、何を言っているのか分からないとでも言いたげに呆けた表情を見せる。

「うん、わざと。私は別にクラス代表になりたいわけじゃないけど、オルコットさんはなりたそうだったし」

自分から喧嘩を吹っ掛けた手前、手を抜くわけにはいかない一夏とは違い、私がわざわざそんな決闘なんて汗臭いものに付き合ってる義理はない。

英霊の能力を使えば一瞬で片が付くが、そんなことをしてしまえばそれについての説明が必要になってくる。それはそれで面倒だ。

ふと一夏を見てみると、なんとも複雑な、形容し難い表情を浮かべている。

不満と羞恥と羨望と、その他いろいろと混じったような、上手く言葉に出来ない表情。

口を開いたり閉じたりすること数回、ひとしきり躊躇ったのち、その口から言葉が溢れ出た。

side: 一夏

「その……ユウはそれでいいのか？ あんなに言われて、何も思わないのか？」

あんなに馬鹿にされたのに愚痴一つ溢さない彼女に対する不満

彼女からすればその程度だった事に対して大人げも無く怒り、それに任せて口を滑らせた自分の幼さに対する羞恥

何を言われても笑って許せる、彼女の強さと優しさに対する羨望

いや、本当にそれは本心なのだろうか、もしかして心中では傷付いているのではないかという不安

自分の抱いた怒りは間違っていたのだろうかという惧れ

俺が一体何を思ったのかは分からない。しかし、気付くと問いを投げかけていた。

対する目の前の少女は、俺の質問の意味がわかりかねているのか、何かを思案するように口を閉ざし、ややあつてようやく言葉を発した。

「えっと、私が何を言われたのかは良く分からないけど……」

——あつ、そうだった。セシリアの罵倒中は意識飛んでたんだった。しかしユウの言葉はそこで終わらない。再び心地よい声音が耳に響く。

「私はそれでもいいよ。一々取り合ってたらキリが無いし、結局はどっちかが折れないと話が進まないでしょ？」

ユウの選択は大人びていて、俺みたいなガキとは大違いだった。たしかにユウの言った通りにしていれば、大概の面倒事は避けられるだろう。

しかし、それではユウが救われない。ただやり過ごすだけで、結局ユウ自身の意思は何処にも無い。

思えばユウが感情を頭わにした所を、俺はあまり見たことが無かった。

いつも浮かべている笑顔の下にあるものを、俺は知らなかった。

「怒りもしないで、ただ笑って許して、そうやってずっと我慢してるだけでいいのか？」

俺の言葉に、ユウがふわりと笑みをこぼす。そんなに今の俺の顔はおかしかったのか？

「うん、それでいいよ。だって私の分まで一夏くんが怒ってくれたんでしょ？ だったらそれでもう十分」

ガツン、と、頭に衝撃を受ける。いや、もちろん比喻表現であって実際に殴られたりしたわけではない。

気が付くと、俺は馬鹿みたいに口を開けて、彼女の笑みに見惚れていた。

思わず顔が熱くなる。

俺の選択は間違いじゃなかったという安堵

ちゃんと彼女の負担を背負ってあげられていたという歓び

彼女が強いのではなく、ちゃんと自分を頼ってくれていたという興奮

確かにそれらが俺の内から湧き起こってくるのを感じたが、違う。
俺を今支配している熱はそんなものじゃない。

照れているのか？ いや、違う。ではこの感情は一体……？

s i d e o u t

私が持っているのは基本的に『何かをしたくない』という欲求であって、『何かをしたい』という欲求では無い。

故に、怒りなどという能動的かつ攻撃的な感情は要らない。そもそも持ち合わせていない。探してもどこにもそんなものはないからな。ってというか面倒だ。

だから怒れっていうなら代わりに頼むわ。

その程度のニュアンスで言ったのだが、何故か一夏は頬を染め、口をあんぐりと開けていた。
どうしたっていうんだよ……。

「一夏くん？」

「え？……あ、ああ、すまん。ちょっとぼーっとしてた」

そう言っただけの笑いを漏らし、何故か逃げるように食事の手を速める一夏。

そんな一夏の反応を疑問に思いながらも、グラスに入った水を一口喉に通し、この話題を締めくくりにした。

「それに、私は一夏くんの事を信じてるからね。最後にはちゃんと勝つ（クラス代表になる）って。だからわざと負けても問題無いんだよ」

一夏は一瞬ときりした様な表情になるが、すぐに見慣れた笑顔を浮かべていた。

「はははっ、そこまで信頼されてるっていうなら、ちゃんとそれに応えないとな。っていうか結局そこかよ」

「うん。だから頑張ってね」

「ああ、分かってる」

今にして思えば、私の態度も随分と軟化したものだ。

数年前ならこんな軽口をたたき合いながらも心の中で罵倒していたのだが。やはり直に触れ合って認識が変わったのが大きいのだろうか。

内心で感慨に浸っていると、物凄く聞き覚えのあるお声が私の耳に届いた。

「ほう、今『わざと負ける』などという不届きな発言が聞こえた気がしたが、気のせいか？」

デデンデンデン♪ デデンデンデン♪ 何故か脳内でターミネーターの曲が流れたが、気のせいだろう。

その絶対零度を思わせる声色に、全身の筋肉が硬直する。何故アンタがここに居る？

錆ついた首を動かし、後ろを振り向くと、そこに居たのは大魔神と織斑千冬。

コイツ、どこから聞いていやがった……！

「そうだな。強いて言うなら、お前らのやり取りが甘ったるくなっ
た辺りからだな」

いや、どこさ。

全く心当たりが無い私とは対照的に、一夏の顔が再び熱を持つ。
……だからどこだよ！

「まあ、それは今は置いておく。それより八神」

「は、はい」

思わず笑顔が引きつる私に、千冬さんは死刑宣告の方がまだマシと
言える宣告を下した。

「手抜きなどしてしろ。一ヶ月間、毎日放課後に私が個人レッスンを
してやるっ」

Oh・・・

その日の放課後

私は寮の自室へと向かっていた。聞いた話によると1人部屋らしい。やはりというか何というか、入学までの経緯の特異性から、周囲に事情が漏れにくくするための処置だとのことだが、正直もうあまり意味が無い。

ちなみに推薦入学について他の生徒に訊ねられたが、面倒だったので一夏を盾にして逃げた。すまんな一夏。

「ここか」

目の前には1つのドア。
私の記憶が確かならば、部屋場所は一夏と箒の隣だったはず。そしてそろそろ……

「うおおっ!？」

ああ、やっぱりか。隣の部屋の扉の向こうから聞こえる耳によく馴染んだ悲鳴。

たしか箒の入浴中に部屋に入っちゃうんだよね……。なぜこんなことだけハッキリ覚えている？

そんな割とどうでもいい事を考えていると、その扉が勢い良く開き、中から男子生徒が弾かれるように飛び出してきた。

そして彼は一息つこうと、閉めた扉に背を預ける。

「助かつ――」

てないんだなそれが。

彼の言葉が終わる前に、乾いた音を鳴らし、ドアを貫通した木刀が現れる。

おお、すげえ。

そしてドアの向こうに消えたかと思えば、再び、今度は彼の頭蓋を狙って木刀が突き出される。

そしてそれを避ける男子生徒こと織斑一夏。

「って、本気で殺す気か！　今のかわさなかったら死んでるぞ！」

悲鳴にも似た怒声を上げるが、むしろそれは逆効果だったようだ。

一夏の声に誘われ、次々と部屋から出てくる女子生徒達。しかも全員ラフな格好をしている。

……部屋に入るか。

周囲の状況に困惑し、目のやり場に困っている一夏を放置し、私は部屋のドアを開けた。

「ユ、ユウ！」

声のした方を向くと、そこにつたのは整った顔にびっしりと書かれている『助けて』というメッセージ。

「……はあ、今だけだよ？」

「さすがユウ！ やっぱり持つべきものは友達だよな！」

結局、私は一夏を招き入れた。

コイツを部屋に入れたとあつては明日も質問攻めに遭いそうだ。まあ、そうなたらまたコイツを盾にすればいいか。

しばらくして、外の騒ぎが収まった頃。

「篠ノ之さんとちゃんと仲直りできる？」

「子供じゃないんだから大丈夫だって」

そんなやり取りをしながら一夏を外へ追い出す。

私としては鈴を応援しているから、別にお前と篤の仲が悪くならうとどうでもいいけどな。

「さて――」

誰もいない室内。私は1人静かに、己の内側へと意識を沈める。

なんでこんなことをしているのかというと、千冬さんに命令されたからだ。

千冬さんいわく、

「推薦の件はバレたし、もう手遅れだから、いつそのこと国家代表レベルにまでなっちまえよ。そうすれば推薦っていう特殊な枠で入学したっていう理由づけにも役立つだろ。勿論来週は専用機使ってもらってからそのつもりで。いつまでも使わないと勿体無いし、いざ使うつて時に使えないんじゃない意味ないし。っていうか2人が専用機使う予定なのにお前だけ使わないって明らかにおかしいだろ。自分が他人の眼にどう映っているのか考えろや」

とのこと。

ISの展開自体は人体に影響はないらしい。摘出はタバネさんとやらにしか出来ないらしいが。

つまり私が今すべきは、自身の専用機を完璧に使いこなせるようになる事。

物凄く不本意かつ面倒だが、後に待ち受ける補習の事を思えばこんな苦じゃないぜ！

少しずつ己の中を探っていく。すると、どこかで冷たい感触に引かかる。

……これか？

その感触に向かって呼びかけるように意識を集中する。

突如、脳内に現れるイメージ。

黒を基調とし、所々に白く細いラインが数本入っている。

装甲は細く、どこか冷たい印象を与えるその機体が、私の身体に顕現する。

「……………出来た」

ISの展開が完了すると、機体情報が脳に直接流れ込んでくる。あー……でもいい。

すぐに解除し、同時に強い倦怠感に襲われ、その場にへたり込む。

ああー、だるい。ISの展開マジだるい。適性低いからかな。

「……………そういえばまだ検査結果を見てなかったな」

私は今朝貰った封筒の中を漁り、目当てのソレを取り出した。

さて、あまり高くはないとのことだったが、一体結果は――

「……………C?」

結果は物凄く微妙だった。

16（後書き）

なんか最近説明的な文章になった気がする。

そして一夏の中でどんどんユウが神格化されていく。

そんなことよりカバディやろうぜ！

17（前書き）

～前回までのあらすじ～

なんだかんだでIS学園に入学した一夏と優。

しかしそこで待ち受けていたのは専門用語という名の呪文の羅列。
ノートを広げたまま放心する2人。そして2人を襲うクラス代表なる物の選出イベント。

そこで一夏はつい口を滑らせてしまい、優も巻き込んでイギリス代表候補生、セシリア・オルコットに決闘を申し込んでしまう。

自分のせいで優を巻き込んでしまったと後悔し、謝罪する一夏。
しかし優から飛び出た意外な言葉に、一夏のハートはトウントウクきたのであった。

一夏（や、やだ。顔が熱い……これってまさか、恋……？）
優「……？　どうかした？」

一夏「なっ、なんでもない！／＼（恥ずかしくてユウの顔を見れないよお……。もうっ、なんでユウはこんなに平気そうなの！？）」

さーて、とりあえず頂いたワードを元に主人公のISを考えましようかね。

一応デザインは希望により第四次バーサーカーのようなフォルムにするつもりです。

ただ、丸パクリだとなんだかアレなので、あくまでベースというか、ランスロットを模したデザインでいこうと思います。

side:一夏

トントントン

包丁が心地よいリズムを刻み、食材がまな板の上で姿を変える。

ジュー……

熱を帯びたフライパンの上で、先程スライスした食材が水気を散らして踊る。

俺が今何をしているのか。100人が聞かれれば100人が料理と答えるだろう。

というわけで、俺は今わざわざ早起きして昼食の弁当を作っている。

何故か。その理由を知るためには、時は昨日の放課後。俺が箒に部屋を叩きだされ、ユウの部屋に避難したところまで遡らなければならない。

「ふう。いや、ホント助かった。ありがとな、ユウ」

俺は命の恩人（社会的な意味）である少女――八神優へと感謝を告げた。

あのままあそこに居たら今頃どうなっていたことか……。

対するユウは困ったような笑みを漏らし、ベッドに腰を沈める。

「別にいいよ。それよりも来週のためにいろいろと準備をしなくちゃいけないから、私としてはそっちの方が大変かな」

ユウには特に俺を責める意図は無かったのだろうが、そうと分かっているつもりで過敏に反応してしまう俺がいるわけで、

「それに関しては本当にごめんなさいでしたーッ!」

気が付くとサラリーマンもびっくりの勢いで頭を下げていた。

ふむ、将来はきっといい社会人になれるぞ。俺が保証する。ん？俺が保証しても意味無いのか。

光の速さに迫る俺の謝罪に、思わずといった感じで苦笑するユウ。そして、そういえば、と呟いてその身を乗り出した。

「隣って篠ノ之さんだよね？ 朝も親しそうだったけど、どういう関係なの？」

「昔仲の良かった幼馴染って所だな」

俺の返答に、ふーん、と、自分で聞いたくせに割と興味無さげに返すユウ。

「あつ、それとき、昼休みはああ言ってたけど、結局今日の授業は理解できたの？」

言われて、うつ、と言葉を詰まらせる俺。

あんなものを理解出来るわけが無い。だって日本語じゃないし。

俺の反応から察したのか、ユウはもしかしても困ったような笑みを浮かべ、「ああー、やっぱりね。そうだと思ったよ」などと言っている。

くっ、言い返そうにも反論するだけの材料が無い。

「そう言うユウは——」

どうなんだよ？という言葉を飲み込む。同時に、俺のピンク色（見たこと無いけど）の脳細胞に電撃が走る——！

そうだ。目の前の少女は自分より遥かに優秀な生徒なのだ。

巻き込んだ拳句におんぶにだっこで申し訳ないが、彼女こそ今の俺に必要な人材……！

「頼む！ 俺にESについて教えてくれ！」

その瞬間、俺は光となり、土下座していた。

「……で、その見返りが俺の弁当、か」

手を動かしながら、特に誰に聞かせるわけでもなく独りごちる。
ちなみに料理の腕前に関しては圧倒的にユウの方が上手い。あれはもう料金を払いたくなるレベルだ。

では何故そんなユウが俺の弁当などという物を所望したのか。

ユウ曰く、

『他人に作ってもらう料理っていうのはそれだけでありがたいからね。自分で作ってもいいけど、それだと中身が初めから分かつちゃうから、その分楽しみが減るし。あつ、そうだ。篠ノ之さんも呼んで3人で食べようよ』

とのこと。こうして俺はその後、箒を昼食に誘うべく『ちゃんと仲直りしなさい』とのご命令を賜り、昨夜はひたすら謝りたおしたというわけだ。

そういえばユウって好き嫌いとかあるのか？ 昨日聞いておけばよかったな。

「……んっ……………いちか？」

「箒？ 起きたのか？」

ベッドからのそのそと這い出てくるポニーテールの幼馴染こと篠ノ之箒。

そしてその箒が俺の姿を見て、険しい顔で一言。

「……お前の背後に見える恋する乙女のようなオーラは何だ？」

「はぁ？ 何言ってるんだ？」

一言じゃなかったな。

しかし本当にコイツは何を言っているんだ？ 俺が恋する乙女？ いや、男だし。

俺のリアクションに何やら安堵したような表情になり、そうかと思えば怪訝な顔になる。忙しいヤツだな。

「それで、何をしている？」

あれ？ 見て分からなかったか？

「何って、料理だよ。昼の弁当を作ってるんだ。箒の分もあるからな」

一瞬箒の周辺がパアッと明るくなった気がしたが、すぐに俺から顔を逸らす。……やっぱり嫌われてんのかな……。……。

するとここで、俺の言葉に含まれていた別のニュアンスを感じ取ったのか、視線だけを俺に向ける箒さん。心なしが、そこには不安そうな色が浮かんでいる。

「その、『も』という事は、他に誰か——」

「ああ、ユウと俺の分だ。後でちゃんと紹介するけど、ユウっていうのは俺の中学時代からの友達で、弁当を作ってるのもユウからの頼み。今日の放課後にESのことを教えてもらう代わりにな」

何故か今、『友達』という単語が物凄く喉に引っかかったが……気のせいかな。

しかしユウは本当に優しい。巻き込んだ元凶である俺に嫌な顔一つ見せず、ただか弁当程度で俺に協力してくれるというのだから。さらに俺と箸の仲も気にかけてくれる。本当に頭が上がらない。

「……ふん、そうか」

この後、箸の機嫌は物凄く悪くなった。

ちなみにユウが見返りに弁当を求めてきたのは、「食堂は人が多いから行きたくないが、かといって弁当を早起きして作るのは面倒」という理由なのだが、当然の如く俺が知る由は無い。

そして箸を誘ったのは、ただ単にここで箸を誘わなかったら八神優としては不自然というだけなのであるが、やはり俺が知る由は無い。

s i d e o u t

さて、気まずい。

今は昼休み。人が少ないと聞く屋上までわざわざ足を運び、そこで一夏の作った弁当を食べようというわけだが、気まずい。どれくらい気まずいのかというと、特に親しくも無い親戚の恋人と食事の席を共にするくらい気まずいのだ。

私はこの空気を作り出す、額面通りの意味でのムードメーカーに視線を向ける。

篠ノ之箒。一夏の幼馴染にして剣道のチャンピオン……だったはず。

私の視線に気付いたのか、何故か睨みつけてくるモツプさん。やべ、内心でモツプって呼んでるのはれたか。じゃあモツピーにするよ。……あつ、これもダメですか。ごめんなさい。

何故か鋭さを増す眼光に、つい目をそらしてしまう私こと八神優。なんなのこの子、視線で人を殺せそうなんだけど。は？ 別にびびってねーし。

というか私はコイツに嫌われているのか？ ここに来るのも物凄く嫌そうだったし。まあ力づくで引っ張ってきたわけだが。

私は何とかこの空気を払拭するべく、卵焼きを口に運び、一夏に感想を告げる。

「やっぱり一夏くんって料理上手だねー。すごく美味しいよ」

ちよっと味付けが甘いかな。まあいいけど。

私の称賛に、照れたように頭を掻く一夏。

「いや、俺の料理なんてユウに比べたらまだま」

と、ここで一夏に苦悶の表情が浮かぶ。見えないようにしているつもりだろうが、箒様が一夏の後ろに手を回し、力いっぱい抓っていた。

恐らく他の女と自分の想い人が仲良さげに喋っているのが気に食わないのだろう。女の嫉妬って怖いわー。

とまあこのようにギスギスと和やかに昼食は進み、とある話題に触れた時、ようやく箒が私に話しかけてきた。

「八神」

「なに？ 篠ノ之さん」

「ISについては私から一夏に教える」

お前は引つこんでろや。言外にそう言われては仕方が無い。別に2人の間に割って入るつもりは毛頭ないし、大人しく引き下がるとしよう。

「えっ！？ 箒、何言って」

突然の展開に驚く一夏の言葉を遮り、またしても背中を抓る箒さん。思わず乾いた笑いが口から漏れる。

とりあえずその暴力が私に向かないことを切に願おう。多分反射的に迎撃してしまうだろうからな。

「ははは……じゃあ篠ノ之さんに任せようかな。幼馴染らしいし、一夏くんも私より教わり易いんじゃない？」

すると私があっさり引き下がったのが意外だったのか、驚いたような表情になる2人。さらに一夏の表情には半端じゃない落胆の色も見えて取れる。

え？ 何かおかしいことでも言いましたか？

そして時間というのはあっという間に流れるもので、ついに決闘当日となった。

ちなみに私は一度もまともにISを操作できていない。いや、できていると言えばできているのだが、なんというか、全く使いこなせていなかったというか、上手く馴染まなかったのだ。

理由として考えられるのは4つ。他にもあるのかもしれないが、私には4つしか思い当らなかった。

1つ目は、私は自分の意識と身体を別人の物として捉えており、当然ISに関しても同様だ。さらにISとの精神なシンクロも重要な要素となってくる。というかいつ誰に貰ったのかも分からない物を信用できるはずがない。

故に、それぞれの意思伝達にラグが生じているのではないか、ということ。

2つ目に、これはIS適性の低さにも関係してくるのだろうと私は推測しているが、私の身体能力が異常に高いため、それにISが追いついていないのではないかということ。

IS適性とは基本的に肉体的な素質が大きく関わる。そしてこれは”適性”であって、身体の強さを測るものではない。要するに私の

場合は素手の方が強いのだ。

私の身体がもたらす結果のイメージに、ISが追い付いていない、
というわけだ。

3つ目に、このISを私に埋め込んだ者（恐らく神、或いは誘拐事件の時に居た誰か）が何かしらの細工をしたのではないかということ。恐らくこの犯人は相当な暇人とみた。

4つ目、才能が無い。

まあこうして理由を上げたところでどうしようもない。

私は諦めを伴い、決闘の舞台である第三アリーナへと移動した。

「え？　一夏くんの専用機ってまだ来てないの？」

第三アリーナ・Aピット

そこで困った顔をしているのは今回の主役、というかいつも主役である織斑一夏。

そしてその隣には正妻たるポニーテールのヒロイン、篠ノ之箒。

「しかもこの一週間で剣道しかなかったって……」

ふいつ、と気まずそうに視線を床に向ける2人。何やってんだか……。

ちゃんと勝ってくれるのか？ 今更ながら不安に駆られる私。しかし何をどうしたってもう遅い。選択は覆らないのだ。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

達観する私の耳に忙しない足音が響く。この胸が揺れるような足音は山田先生に違いない。

振り向くと、そこに居たのは胸に手を当てて呼吸を整える山田真耶先生。

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ！ す〜〜〜は〜〜〜、す〜〜〜は〜〜〜」

一夏の言葉に従い、山田先生は深呼吸を始める。

「はい、そこで止めて」

そして本当に呼吸を止める山田先生。教師のくせに遊ばれてどうする。

ってというか話が進まないだろうが。

「それで山田先生、そんなに慌ててどうしたんですか？」

私の問いに、山田先生は呼吸を止めたまま答えようとす。いや、ムリだから。

ついに耐えきれなくなったのか、だんだん顔の色が変わり、

「ぶはあっ！」

息を吐き出した。

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

突如として響く打撃音。見ると、そこには出席簿を手にした千冬さんと、頭を押さえて悶絶している一夏。いずれ一夏が何かに目覚めるのではないかと最近密かに思っている。

「えっと、山田先生？　それで用件は……」

「あつ、そうでした！　ついに来ましたよ！　織斑くんの専用機！」

二枚の板がそれぞれ斜めにスライドし、低い音と共に扉が開く。

その先に鎮座するは純白の鎧。飾り気のない、真っ白な装甲。そう、たしかあれが――

「織斑くんの専用IS、白式です!」

一夏がISを纏ったすぐ後、千冬さんが私に向き直った。

「白式の初期化と最適化にはまだ時間がかかる。よって先にお前とオルコットの試合を行う。いいな?」

「はい、分かりました」

この場合は『いいな』『拒否権なし』である。ここ、テストに出るから。

しかしその決定に異を唱えたのは、他ならぬ一夏だった。

「待ってくれ、千冬姉!」

そして響く破裂音。お前も学習しろよ。

「織斑先生だ」

「お、織斑先生。先に俺に行かせてください」

一夏の言葉にやや驚く私と千冬さん。大人しく待つとけよ。そう思う私をチラリと見やり、千冬さんにその強い意志の宿る双眸を向けた。

「今回の発端は俺です。アイツに喧嘩を吹っ掛けたのも俺です。なのにその俺が彼女の背中に隠れているわけにはいきません」

は？ 意味が分からん。

しかし千冬さんはなにやら納得したような、それでいて少し嬉しそうな面持ちで、一夏に淡々と指示を出す。

「ではフォーマットとフィッティングは実戦でやれ。出来なければ負けるだけだ。わかったな」

「ああ、分かってる」

自信たつぷりに言う一夏だが、私は正直物凄く不安だぞー！そんな心境が表層に出ていたのだろうか、一夏は私に微笑みかけ、まるで子供をあやすように言葉を紡ぐ。

「大丈夫、心配すんなよ。ユウはただ信じて待っていてくれ」

信じるって言われてもなあ。いや、信じるって言っただけさあ。でもなあ、ここに来てこの状況だろ？ ちよつとなあ。

っていかんいかん。不信感を募らせたところで仕方が無い。たしかアニメでも勝ってたじゃないか。最終的にクラス代表になっていた

じゃないか。ならば疑ったところで無駄なだけだ。心の贅肉だ。使
い方があっていいのかは知らんが。

私は思考を打ち切り、いつもの様に笑みを浮かべる。

「……うん、分かった。信じてるからね、一夏くん」

頼むからクラス代表になってくれ！

その思いが通じたのだろうか。少しドキツとしていたが、すぐに、
おう、といつもと変わらぬ様子で返事をする一夏。

そして何やら千冬さん、正妻さんと一言二言交わし、決戦の地へと
飛び出した。

side:一夏

「あら、逃げずに来ましたのね」

ふふんと鼻を鳴らし、腰に手を当てて俺を見下ろすようなポーズを
とるセシリアと、そのセシリアを守護する青い騎士——ブルーティ
アーズ。

背後にある特徴的な4つのフィン・アーマーが、その姿になおさら
気高さを感じさせる。

その騎士を駆るセシリアの手には、2Mを超す大型レーザーライフル、スターライトmk?が握られており、その銃口は大地に向けられていた。

「逃げるわけないだろ」

否、逃げるわけにはいかない。今ここに居るのは俺一人のためではないのだから。

セシリアは俺のそんな反応が気に食わないのか、さらに高圧的な態度で言い放った。

「最後のチャンスをおげますわ」

銃を持っていない方の手で、俺を指さす。

「チャンスって?」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝ると言ふのなら、許してさしあげないこともなくつてよ」

そう言つて意地の悪い笑みを浮かべ、目を細めるセシリア。直後、危険を感じ取った白式が、セシリアが戦闘態勢に移行したことを告げる。

突然現れた情報に、俺は思いのほか冷静に対処していた。みんなが

……彼女が見ているのだ。落ち着け、うろたえるな。

「そついうのはチャンスとは言わないな」

彼女の信頼に応えるため、そして彼女の名誉を守り、代弁するためにも、俺は無様な姿を晒すわけにはいかない。

「そう？ 残念ですわ。それなら――」

青き騎士が狙撃体勢に入り、その銃口が向けられる。

来い、セシリア・オルコット。

足掻いて足掻いて足掻きまくって、そのご自慢の機体も、奢り高ぶったプライドも、全部叩き落とす――ッ！

「お別れですわね！」

直後に独特な音が耳をつんざき、その刹那、一筋の閃光が煌めく。

まさにこの瞬間、既に闘いが始まっていた。

s i d e o u t

モニターに注がれる視線。その先には、縦横無尽に空を泳ぎ、初期設定のままでブルーティアーズに食い下がる一夏の姿。

その手に握られているのは近接ブレード一本。中距離武装を駆使するブルーティアーズとの相性は最悪だ。

しかし一夏はその最悪を突き付けられて尚、その瞳に闘志を宿していた。

なんかえらく気合入ってんなー。

私は一夏の気迫に若干引きながらも、しっかりとその結末を見届けようと目を凝らす。頼むから私にクラス代表が流れてこないようにしてくれ。

一方で、隣では千冬さんや山田先生が驚いた顔をしている。……どこに驚く要素があったのかは分からないが。

再び視線をモニターに戻す。ブルーティアーズは相変わらず殆どダメージを負っていない。

しかし白式も掠りこそすれど、直撃はしていない。4つのビット兵器——ブルーティアーズの動きにも慣れてきたのか、どうやら大したダメージは負っていないようだ。

しかし恐らく長期戦に持ち込まれば負ける。

まあ、自分から喧嘩を吹っ掛けた手前、そう簡単に負けるわけにもいかないのだろう。

と、ここで戦況が動く。

画面の中で爆散する青いビット。一夏がブルーティアーズの1つを
両断したのだ。

「……ほう、気付いたか」

感心したように呟く千冬さん。そう、一夏は恐らくあの兵器……と
いうか、セシリアの弱点に気付いたのだろう。

「毎度毎度、意識を集中して命令しないといけないなんて、なんと
も使い勝手の悪い武装ですね」

つい本心が零れ落ちた。いや、本当に本心か？ 私はアニメで一夏
があの兵器に苦戦したことを知っている。さらに実はあと二機残っ
ていることも知ってる。使いこなせればトンデモ兵器に化けること
も。セシリアはあと2回変身を残しているのだ。

にも関わらず、何故今セシリアに対して批判的に当たったのだらう
か。

「いや、あれはオルコットが使いきれていないだけだ。本来BT兵
器は――」

隣に立つ千冬さんの解説が右から左へ通り抜ける。

何故だ？ 意味が分からない。私が聞いてもない罵倒に怒りを覚
えたとしても？ そんなわけあるか。

とここで、私は1つの解にたどり着く。

今の私はどちらかというと鈴派だから、この試合の後にヒロイン参戦するセシリアが疎ましいのだろう。そうに違いない。

元からいる筈は仕方無いとしても、今後ヒロインが増えるのは非常に鈴が可哀想だからな。ちっばい的な意味で。

1人納得した私は、再びモニターを見上げる。

画面の中の一夏の表情には、幾分かの余裕が現れており、左手を閉じては開き、閉じては開きを2、3度繰り返していた。

見ると、浮遊しているビット兵器は残り1つだ。確かにこれなら余裕が出てきても仕方が無いだろう。

だが考える一夏。セシリアにとって未だ使いこなせないビット兵器。ソイツでお前を翻弄出来ないと分かっているにもかかわらず、それでもなおブルーティアーズを展開している理由を。

早い話が、これだけやられました！ という状態を見せ付け、お前の油断を誘っているんだ。

だってセシリアはまだ変身を残してるんだぜ？

千冬さんも一夏の油断に気付いたのか、忌々しげに一夏の左手を睨みつけている。

「はああ……すごいですねえ、織斑くん」

山田先生が溜め息交じりに呟くが、やはり千冬さんは険しい顔を崩さない。

「あの馬鹿者。浮かれているな」

「えっ？ どうしてわかるんですか？」

ブラコン千冬さんの眩きに驚き、即座に反応する山田先生。

そしてブラコンさんが珍しく感情を乗せて、一夏の悪癖について解説する。

その前に

「八神、ブラコンがどうかしたか？」

「い、いえ。別に」

「そうか、残念だ。折角校庭を走り回ってもらおうと思ったのだが」

「は、ははは、はあ……」

そして山田先生に解説を始める織斑先生。

私は隣のやり取りを視界から外し、ビットを切り裂く一夏に視線を戻す。

……ん？ 切り裂いた？

そう、これで4つあったビットは全て墜ちた。つまり――

直後、セシリアの背後から現れた2機のビットが放ったミサイル、それらが起こした爆発により、白式はさらに白く塗りつぶされ、かと思えば黒煙に包まれる。

「一夏っ……！」

どこかからか簾の押し殺した叫びが聞こえるが、対照的に、私や千冬さんは安堵していた。

これで一夏は勝てる。

「ふん、機体に救われたな。馬鹿者め」

まったくもってその通り。

煙が晴れ、明瞭になった画面に映っていたのは、真の姿の白式。本当の意味で一夏の専用機となったソレが悠然と佇んでいた。

「おかえり、一夏くん」

「おう」

結果だけ見れば、一夏の圧勝だった。元々大したダメージが無かった上、一次移行が終わってからは逆にセシリアを翻弄、そして零落白夜のためのエネルギーもたっぷり残っている状態だったので、特に何の問題も無く圧勝。

うん、その結果だけは良かったと思う。しかし、ブルーティアーズを地に落としただけでは飽き足らず、結局セシリアまで落とされてしまいましたとさ。勿論両者の『落ちる』の意味は違う。

はあ……久しぶりに一夏の悪い面を見た気がする。

「ユウ、どうかしたか？」

「ううん、別に」

チツ、これだから鈍感主人公は。

まあとりあえず私の知る流れ通りに事を運ぶことができたということとで良ししよう。

思考を打ち切り、一夏に笑いかける。

「それじゃあ一夏くん、少し早いけど、クラス代表就任おめでとう」

「待て」

「いやあ、さっきの試合すごかったね」

「だから待てと言っている」

そして振り下ろされる出席簿。そして受け止める私。チツ、気付かれたか。

私は出席簿を片手で支えたまま、千冬さんに視線を向ける。……そこには無表情の般若がいた。は？ だからびびってねーし。

「なんですか？ 織斑先生」

「次はお前の試合だろう」

「いや、もうこのまま織斑くんがいいじゃないですか」

いいじゃん。な？ いいじゃん。いいだろ？ ロックm……じゃなかった。アンタの弟だぜ？

しかしどうやら私の願いは通じなかったらしい。

「駄目だ。既にギャラリーは集まっている。それに、お前の実力を測るいい機会だからな。政府からもデータの提出を要求されている」

うつそ……。

まあ確かに、世界で唯一の男性操縦者である一夏と親しいし？ 心臓にISを埋め込まれた前代未聞の状態だし？ しかもひとりでに傷がふさがるし？ 政府としては私の動向が気にならない方がおかしいってのは分かるよ？ 分かるけどね？

「……じゃあ、私の対戦相手は誰ですか？」

そう、候補は3人。アニメでは2人だったから一度の試合で済んだが、3人分総当たりでやると三戦することになる。アーリーナの使用

時間が限られている以上、あまり試合に費やす時間は無い。

千冬さんは出席簿を引っ込め、淡々と告げた。

「順当に考えて、オルコットに勝利した織斑と戦うべきだろう」

なるほど、一夏が勝てば、彼は2人に勝利したことになり、3人の
中で一番の実力を持つという事でそのままクラス代表に。

そして私が勝てば、実力図はセシリア<一夏<私となる。よって私
がクラス代表に。

なるほど、無駄のない采配だ。さっすが千冬さん。

「「……え?」」

私と一夏の声が重なった。

17（後書き）

神N「貴様この作品のプロットをどこへ隠した」

乞食P「そんなものは初めからありません」

神N「嘘をつくな。貴様には罰を与える。この者に逃れられぬ苦しみを永劫に与え続け——」

乞食P「あぎやあああつあああつ！」

神N「どうだ天罰だ」

神P「あぎやあつて私だ」

神N「お前か」

神P「暇を持て余した」

神N「神々の」

NP「遊び」

N i k e と P u m a

っていうか主人公の戦闘シーンに入れてないじゃん！

そして誰だよあのワンサマー！ めっちゃ熱血！ ワンサマーって
かワン様だわ！

ワン様まじワンサマー！

18 (前書き)

悪い評価を受けると

「いぎぎ胃がキリキリ痛むううういいやあああいつそ消え去りたいいい更新したくないいいいいああああj f i m r ; v まお」と苦しみのたうちまわる

逆に良い評価を受けると

「あががががプレッシャーが重いいいおお期待しないでええええ更新するのが怖いよおおおおf j なr l なl、；ぺ@」と頭を抱えて転げまわる

しかし評価を全く受けないと

「ま、まだ来ないのかな(チラッ　そ、そろそろ感想来たんじゃね(チラッ　評価が気になってこ、更新どころじゃないですぞ(チラッ」と管理ページでF5連打する

そして来ると、

「うおおおっほおおおおおおちよ来たんすけど来たんすけどおおおお会いたくて会いたくてえええ」と震える

無論これは内心のテンションを文章化したにすぎないが、要するに情緒不安定のキチg(ピチューン

……周囲の言葉を異常に気にしちゃうナイーブ(意：おバカ)な困ったさんなのである。

古泉「うわー困るわー　それマジ困るわー　俺じゃなかったら本気で困ってるわー」

だ、誰もこれが作者の事だなんて言っていないよ！ か、勘違いしないでよ！ 戦闘描写が苦手なのに戦闘シーンを書かなくちゃいけないくて、若干どころかなり鬱になってるわけじゃないよ！

っていうかなかないいい感じで作業が進んでたのに間違えてページ閉じちゃってデータが消えて創作意欲がガクッと下がったよ！ そして眠いよ！

あ、感想は普通に嬉しいです。お待ちしております。描写とかのアドバイスを頂けるともっと嬉しいです。

ってかやべえ。マジやべえ。主人公のISの新しい設定を思いついた。とりあえず伏線だけ設置しておいて、回収するかどうかは皆様の反応を待つて後で決めるとします。

ちなみにISの機体名は希望によりニヴルヘイムを由来とする名前となりました。詳しくは本文にて

次の対戦——私と一夏の試合が指示されてから、数分

向こうでは山田先生が白式のエネルギーを補充している。そしてそれを見守るように、傍には操縦者である一夏と、その幼馴染である篤。

私はそちらへ向けていた視線を、目の前の女性に戻す。

「それで八神、一次移行はもう終わったのか？」

スーツ姿の黒髪巨乳美人教師こと織斑千冬先生に訊ねられ、テンションがただ下がりする内心を隠しつつ、満弁の笑顔を作る私こと八神優。

「いいえ、まったく」

瞬間、音にも迫る速度で、黒い物体——出席簿が私の脳天目掛けて振り下ろされる。

——だが、遅いッ！

その刹那、私は感覚に任せ、無造作に片腕を上へと突き出した。

そして接触。傍から見ればその表現が最も適当だろう。軽すぎる炸裂音を起こし、特に何でもない様に見えるソレだが、籠められたる

力は常人を超越した、もはや人外の域。

実際にこの腕と出席簿の間に異物を挟めば、それは一瞬すらその原型を留めることは無いだろう。

「ほう、今を受け止めるか。割と本気を出したのだが」

「いや、そんなこと言われましても……」

私はただ、彼の英傑達が培ってきたモノを間借りしただけにすぎない。故に、感心されたところで私の中には何一つ落ちてこないのだ。結局褒められているのは他人であって自分ではない——そんな考えがどうしても頭を過る。

出席簿を振り下ろした張本人である千冬さんは、私のそんな内心を見透かしたのか、つまらなさそうに小さく鼻を鳴らし、出席簿にこめる力を緩めた。

そしてそれを持ち直し、その剣格の如き鋭く威圧的な視線で私を射抜く。

「では初期化は？ 最適化は？」

「多分それもまだです」

ピクツ、一瞬千冬さんの細腕が動くが、無駄だと悟ったのか、黒色のソレが振るわれることは無かった。

「はあ……お前はこの一週間なにをしていた？」

「ナニって……もうっ、先生ったら女の子に何を」

言いかけて、反射的に口を閉ざす。まさしく眼前に迫るは生命の危機だったのだ。

剣格や狼を通り越し、もはや氷の女王の様な、絶対零度の凍てつく雰囲気を全身から放つ目の前の御仁。

これだから冗談が通じない人は嫌だ。そんなんだからブラコンをこじらせて未だに独身なんだ。

「何か言ったか？」

さて、冗談はこの辺にしておこう。私は表情を引き締め、真剣な面持ちを作る。

「いえ、何も。ちなみに今週は何をしていたのかと言うと、特に何もしてませんでした」

そしてさらに下がる周囲の温度。私はツンドラに放り出されたような錯覚に襲われながら、やっぱりな、とでも言いたげな千冬さんからの言葉を待つ。

「ISの稼働時間はどれくらいだ？」

「15分くらいです」

「……もう知らん。好きにしろ。ただし手は抜くなよ？」

千冬さんの美麗な御顔にはでかかと『呆れた』と書いてある。しかし仕方が無いのだ。私のISは何故か起動するだけで異常に疲れる。恐らくまだ精神的にも肉体的にも同調できていないのだろう。

1年間以上も私の身体の中に居座っておいて私に合わせられないとは、不屈きなISもいたものだ。

「織斑先生！　そろそろ始めても大丈夫です！」

山田先生の声に我に返る。恐らく白式のエネルギーが充填されたのだろう。

もともと実体ダメージは殆ど無く、エネルギー消費も最後の零落白夜以外は大したものではなかった。回復にそう時間は掛からなかったことだろう。

私はこれから始まる戦闘に備え、意識を探り、ISを展開する。

さあ起きろ。少しは働け、居候。

光に包まれ、ソレは顕現する。

黒いボディに細く白い数本のライン。ISと言うにはいささか細すぎる装甲。それくらいしか特徴の無い私の機体。当然白式の様な豪華な翼などはついていない。いいな！。

一応情報を確認しておく。今まで適当に流してたからな。機体名は……『Nifl』？　……ああ、『ニヴル（冷たい氷）』か。なんだろう、ニヴルヘイムと同じ綴りだったからそう読んだけど、本当にあつてんのかな。武装はどうだ？　初めて見るが、それなりに……ん？

2
つ
？

我が機体の武装は2つだけだった。まあ白式よりマシか。

アリーナの中央

地上で対峙する私と一夏の間を、春独特の生温い風が吹き抜ける。そこには、あからさまな『闘いたくないオーラ』が横たわっていた。

私は、面倒かつ本気を出すときつと異常に疲れるだろう、という理由から。

一夏は恐らく、巻き込んでしまった私に負い目を感じているのだろう。

各々心中には秘めた意思があり、それが表層に滲み、なんともダウナーな空気を作り出していた。

『いつまでやっている。早く始めろ』

放送用スピーカーから我らが教官織斑先生の有りがたいご命令が響

く。

「……それじゃあ始めようか、一夏くん」

「……ああ、そうだな」

ここに、史上最もやる気の無い真剣勝負の火蓋が切って落とされた。

試合が始まって数分、私達は互いにダメージを与えられないでいた。

私の場合、初期化も最適化も終わって無い状況、しかも全く身体に馴染んでないのだから、攻撃に転じろという方がムリだろう。

対する一夏だが、その達筋には、明確に分かるレベルの迷いが宿っていた。攻撃したくない、けど負けたくない。そういった相反する思いを刃に乗せて振るっているようだ。それで当たれという方がムリだ。というか反射的に身体が動く。

傍目には、子供のチャンバラごっこにすら映っていないだろう。ギャラリーからは、ハイスピードバトル（笑）などと嘲笑されているかもしれない。

そしてここで、恐らくこと戦闘中という状況において、致命的ともいえる現象が起こる。

なんというか——飽きたのだ。

一夏の迷いだらけの剣を、私が最小限の動きで避ける。

この一連の流れの繰り返し。角度を変え、スピードを変えても、結局は同じ。

こつも同じパターンばかりだと、だんだん感覚が麻痺してくるもので、なんかもうどうでも良くなってきた。

そろそろいい加減に終わらせたいのだが、ここで負ければ千冬さんの折檻&補習フルコースは確実。

そして勝ってしまえば待ち受けるはクラス代表の座。というかこの状態で勝てる筈も無い。

故に、情性でこの茶番を続けるしかないのだが……っていうか、ちよつと待て。

私は思考を遡る。『勝ってしまえば』？ 良く思い出せ。そういえばセシリアはアニメでは勝っていたじゃないか。にもかかわらず、最終的には一夏がクラス代表となっていた。そこから導き出される結論は1つ。

そう、

つまり、勝っても辞退することが可能……ッ！

そして私は勝利に行き着くための解も同時に見出す。

そうだ。ISが合わせてくれないのならば、無理やり私に合わせればいいのだ。

私はその手に、この機体に備えられた数少ない武装の1つ、黒を基調とした両刃の長剣を呼び出す。まあ長剣といっても、大きさとしては悪い魔法使いが使ったらと細長い杖に近いが。

そして最近ご無沙汰していた能力——騎士は徒手にて死せず（ナイト・オブ・オーナー）を発動。

その黒い葉脈が、手にした長剣だけでなく、IS全体を浸食する。

これでこのISは私の手足も同然に動くはず。この名も無き長剣を囷にヤツの雪片を奪い取って零落白夜でスパッと——

そんな事を考えていた時、葉脈の浸食がコアにまで届き、それは起きた。

危機を知らせるけたたましいサイレンと夥しい量のエラー報告、それを押しのけるように、中央には『確認』というボタン（？）が堂々と居座っている。そしてそのボタンに触れる前に、全ての情報がぱったりと消滅する。

直後、突如として視界を覆い尽くす白い光。そして耳をつんざく金切り音。さらに、パズルが高速で組み換わるような感触。

あらゆるものが整理……いや、違う。これは、”強引に形作られている”。

そして頭の中に浮かぶ、一次移行というワード。ファーストシフトそして唐突に分かった。分かってしまった。今この機体に起きている事態が。

光が収まり、視界が明瞭になる。そしてISが一度分解され、再構築される。そう、”ナイト・オブ・オーナーの担い手”の専用機として。

機体情報が脳内に流れ込んでくる。

名称は変化なし。だが武装は1つ増えており、元からあった武装の名称も明らかとなっている。

今手にしている長剣はレーヴァテイン。ロキがニヴルヘイムの前でルーンを使って鍛えたとされる杖の名を冠するそれに、やはりこの機体のネーミングは北欧がベースになっているのだと確信する。

増えた武装の名はグラム。オーディンが鍛え、人間の手に渡された剣。情報を見る分には、どうも近接ブレードらしい。恐らくランスロットの竜殺しの逸話から、同様の逸話を持つこの名の剣が選ばれたのだろう。

特殊兵器も搭載しているようだが、まあ今回は要らないだろう。

「……それがユウのIS、なのか？」

一夏がやや呆然として呟く。

「いや、まあ……多分？」

今の私……というかISの姿だが、全体的に濁った黒色のプレートメイルのような装甲になっており、なんともランスロットである。いや、私が羨ましがったからか分らないが、背部には黒色のウィングスラスターが取り付けられていたり、フルフェイスではなかったり、肩や足の付け根というか太ももの部分が露出していたりとかと相違点はあるものの、そのフォルムは明らかにランスロットを模していた。

ISには自己進化が設定されており、搭乗時間との比例、持ち主との同調、さらに戦闘経験等の蓄積などから持ち主の特性を理解し、より力を引き出すべく『形態移行』を行う。

そう、つまりそれは持ち主に合わせ、持ち主自身の一部へと近づくという事。

ではそれを強引に短時間でやろうとした場合、どうなるのだろうか。そもそも自己進化は時間を掛けることとIS自身の意味に依存することを前提に設定されている。

当然ISは予期せぬ事態に悲鳴を上げるだろう。

そして何より、今回はその『合わせる対象』は私ではない。搭乗者

とは別の主の登場に、ISはさぞ混乱したことだろう。先程の茶番で得たデータが全てゴミになったのだから。

ナイト・オブ・オーナーは、どんな武器、どのような兵器であろうとも、”ランスロットの宝具”として扱う事の出来る能力。

そう、つまり適合させるべき主は私ではなくランスロットなのだ。

恐らく宝具の能力だけを貰い受けていればこのような事にはならなかったのだろうが、残念ながら私は英霊たちが培った戦闘センスや身体能力等のほぼ全スペックを有している。

当然ランスロットの宝具を使用するにはランスロットの身体スペック、戦闘センスが最適なのは自明の理。

ならば、今の私の身体に宿る経験はランスロットの物であり、当然私の持つ特性とやらもランスロットに依るものとなる。

即ちこの機体は今、ナイト・オブ・オーナーの本来の担い手に合った、より彼に近い姿へとデータを組み替えられた、ということだろう。多分。いや、正直よく分からない。

「それじゃあ、とりあえずサクツと終わらせるよ、一夏くん」

「えっ？　ちょ、ちよつと待て！」

分かる。今なら先程までのようなぎこちない動きにはならない。全てが、自身の手足の様に駆動する。

私は長剣レーヴァティンを片手に握り、もう片方の手にグラムを呼び出そうとして、そこでふと考える。

——投影してもバレないんじゃない？

いや、別にする必要はない。ただ、例えば武装だけを展開する時などに投影で賄えるならそっちの方が楽じゃないかと思ったのだ。それにこの前例が成功すれば今後人前で能力を使用する機会があったとしても疑われない。何か言われても「実はこれISのなんすよww」で済む。

何せこれはハイスピードバトルラブコメなのだ。戦闘には事欠かない。

今でこそナイト・オブ・オーナーのおかげでラグなど殆ど感じないが、ISの展開と能力を解除してしまふともう一度ナイト・オブ・オーナーを使わなければならぬ。そんな事をするくらいなら初めから投影しちやえば良くな？ という話だ。

……よしやろう。今すぐやろう。そうだ京都行こう。

脳内にグラムの情報を引っ張り出し、データ領域にあるソレを解析する。

——よし、行ける。

「投影開始……」

小さく呟いた直後、長剣を持った方とは逆の手の中に、一振りの黒い両刃剣が構成される。

と同時に、今何やら、ナイト・オブ・オーナーを通してコアに情報が伝わった、というか新しく情報が書き込まれたような気がしたのだが……気のせいだろう。

そういう『新しい能力の発現』的なイベントは目の前に居る主人公に任せる。私の仕事じゃない。

両手に握る武装の感触を確かめ、ちらと周囲に目を向ける。

ギャラリーは私の一次移行に驚いており、一夏は私の突然の戦闘態勢への移行に驚いている。千冬さん達は……まあ特に何も言っていないという事は気付かれていないのだろう。

私はひとまず投影品であることがバレていない事に安堵し、意識を切り替える。

腰を低く落とし、両手にある長さの違う二振りの剣を構える。

さあ、転生後初となる”私”の戦闘だ。せいぜい刮目しろよ、一夏。

空気が一変する。そこにあるのは刀を喉元に突き付け合うような鋭い緊張感。

肺の中の空気を吐き出し、精神を集中する。

「いくよ」

瞬間、大地を抉り、爆発の如き加速で白き騎士へと迫る。そして長剣によって繰り出される刺突。

「っ……！」

加速によって威力が上乘せされたそれを、一夏は火花を散らせながら、雪片の刀身上を滑らせて後方へ受け流す。そして須臾の後に響く剣同士悲鳴。そう、それはまさしく音速を越えた剣戟。

しかし攻撃の手は止まない。次いで振るわれるは投影兵器グラム。下段から逆袈裟に振り抜かれた一閃が、白式の名の如く白き装甲を削る。耳をつんざく甲高い金属音に、危機を感じ取った一夏が即座に空中へ離脱する。

「ふう。流石に強いな、ユウ」

そう言う一夏の額には玉の様な汗が浮かんでいる。それ程の緊張がこの戦場に張りつめていた。

しかし、それでいて一夏の瞳には闘志が煌々と燃えている。そして雪片を握り直す。決して負けられない、負けるようでは駄目だ。何故かそう自分に言い聞かせているようにも見える。

「まあ、補習はいやだし。それと、空なら安全だと思った？」

返事を待たず、大地を蹴り、さらにスラスタの推進力を利用して空中へと飛翔する。

蒼天を背景に黒い流星が白い太陽へと一直線に疾駆し、激突。

黒き長剣と白き刀の鏖迫り合いに、空気がびりびりと振動する。そして衝撃に押し負けた白式が後方へと弾かれ、空中で体勢を整える

一夏へと目掛けて一本の剣が投擲される。

グラムの名を冠するそれは、大気を切り裂き、風よりも迅く目標へと迫る。

「なっ！ くっ……！」

ハイパーセンサーにより、迫りくる物体に気付いた一夏だが、自身の武器を投げつけるという以外過ぎる戦法に氣を取られ、一瞬反応が遅れる。しかし飛来する両刃の剣を弾くべく、即座に自身の刀、雪片を振るう。

——だが、

「な、何だこれ！？ くっ、重い……っ！」

迎撃したはずがその威力を殺しきれず、逆に腕ごと持っていかれそうな感覚に苦悶の表情を浮かべる一夏。

そして一際大きな音が鼓膜に叩きつけられる。後方に弾かれ、高く舞い上がる二振りの刀剣、雪片とグラム。それらが向かう先には――

「もーらいつ」

「なつ、ユウ!? いつの間に!？」

レーヴァテインを量子化し、フリーになった両手に白と黒の剣を持った私が居た。一夏が弾かれるように振り返るが、遅い。既に両方とも私の手中にあるのだから。

白い刀に黒い葉脈が浸食する。ついでに雪片の構成を解析、そして剣の丘へ情報を蓄積する。

自身の愛刀を奪われ、驚愕を隠せない一夏。私は瞬時加速を行い、愕然とする白き騎士へと一気に迫る。

そして――

「――零落白夜」

（やつちまったアアアア！ 感覚に任せすぎたアアアア！ ホント何してんだアアアア！）

いろいろと注目されるような事をやらかした事に対する深い後悔に苛まれる私。もうヤバイ。なんかヤバイ。やらかしちゃった感が半端じゃない。もう消滅したい。あばあばは踊る赤ちゃん人間になりたい。

「で、あれは何だ？」

試合後アリーナのピット内にて、冷や汗をダバダバ垂れ流して正座している私を見下ろす鬼教官、檻武良血冬。

ちなみに試合は私の勝利だ。そして一夏は隅っこで割と本気で落ち込んでいた。

「何、と言われましても……全部ISのせいです」

全部時臣のせい？ 全部影山のせい？ どちらを取るかはお任せしよう。というかよくよく考えたらそんな言い訳が通じる筈が無かったのだ。第一、兵装を奪え、かつワンオフ・アビリティーまで使用可能となるなど、ISの定石を根底からドンガラガツシャーンするような能力を見せられ、「H A H A H A！ スゴイ能力じゃないか！」などという人間が居るはずもない。

「他機の装備を奪う能力に加えこの基本性能……ただでさえお前の機体は致命傷すら治す奇妙な能力を持っているというのに、さらにこんなものまで……はあ、こんな出鱈目なデータを提出しろというのか……」

今なお私の身体を覆うその装甲に目をやり、千冬さんはこめかみに指を当て、溜め息をつく。っていうかあれ？ 通じた？ 実はこれISのなんすよ作戦成功？ ちなみにその治癒能力はゴッドハンドですね。なるほど、あの誘拐事件のおかげでこの言い訳が通じたのか。あつ、でもISが手に入らなければこんなことにはならなかったのか。というか千冬さん？

「あの、政府からデータの提出を要求されてるって話ですけど、確かこの学園に居る間は、あらゆる組織や国家への帰属はなされず、またそれらの外的介入も拒めるはずではありませんでしたか？」

若干ドヤつとしながら言う私に対し、何か憐れな物を見るような目で見てくる千冬さん。

え？ 何かおかしいことでも？

「それは”本人の同意が無い場合”に限った話だ」

あつ、私に拒否権なんてありませんでしたね。しかも私ばかり日本代表候補でしたね。ははは。

「それに、ここで得られたものは基本的に共有財産として公開する義務がある。よって外部へソレの技術が知れるのも時間の問題だろう」

おおっ、まじか。

おっとそつだ。忘れないうちに言うておかねば。

「織斑先生」

「なんだ？」

「クラス代表の件、私は辞退させていただきます」

よし言った。よく言った。そうだ京都行こう。

驚くこともせず、千冬さんは冷静に何やら思案し、ややあって口を開いた。

「理由はあるのか？」

.....。

えっ？

「り、理由ですか？」

「ああ、仮にも代表候補生に打ち勝った織斑を圧倒したのだ。それ相応の理由があつてしかるべきだろう」

「で、ですよー」

んなもん聞いてねえぞセシリアアアアッ！

私は心の中で咆哮しつつ、記憶の引き出しを空き巣並みに荒らしまわる。

思い出せ、思い出すんだ、あの金髪姉ちゃんがなんて言っていたのか、思い出せッ！

うん、むりだ。

「あー、ほら、私のISってちょっと特殊じゃないですかー」

「だから何だ？」

私を知るか。

「えっと、その……ほら……」

「というか八神、お前の眼が赤くなっている気がするのだが、初めてからそうだったか？」

やべっ！ ナイト・オブ・オーナー使ったままじゃん！

思わず慌ててこの機体、ニヴルを縛りつけるナイト・オブ・オーナーを解除する。すると、倒れた。

何がつて？ 私の身体だ。

「おい、どうした、八神！」

千冬さんが珍しく驚き、感情をあらわにする。すると千冬さんの叫びに、他のメンツもぞろぞろとこちらへやってくる。

「あ、いや、大丈夫です」

騒がれる前に先手を打っておく。っていつかみんなして見るんじゃない。照れるだろ。

しかしヤバイ。身体が動かん。すると、今度はISが光に包まれ……

「……は？」

てってれー！ ISは元の姿に戻った！

いや、厳密に言えば背部のウイングスラスターはそのままなのだが、あのランスロットっぽい形状のプレートメイルは綺麗さっぱり元に戻った。

……。

「織斑先生」

「なんだ？ 八神」

「私のISって、特殊じゃないですか」

「そうだな」

「実を言つと、普通の状態だとめちゃくちゃ疲れるんです」

「そうか」

「どうも私には合わないらしくて、殆ど欠陥機と変わらないんですよ」

「ああ」

「しかもこんなですよ？ 一次移行が終わったと思ったら戻りましたよ？」

「うむ」

「理由になりませんか？」

「……受理しよう」

「そ、そうですか。ありが……」

ここで私の意識は途切れた。

ちなみにこの時、扱えるように訓練がどうのここの放課後がどうのここのと聞こえたが、気のせいだろう。いや、気のせいだ。私が今

決めた。よって気のせいだ。

18（後書き）

けっこう無理やりだったかな……説明ばかりだったな……一回説明だけの話とか作った方がいいかな……6日、間に合わなかったな……。

というか冬休みの宿題終わってないな……。

とりあえず解説

主人公の普段の身体能力は、なんかいろいろと混じっています。

まず本人のをベースに、4人の英雄のを混ぜてミックスしてシェイクした状態です。しかし全て分離して浮いている状態です。

そこでISさんの登場です。

IS適性は基本的に身体的要素が大きく関わります。しかしその身体に5人分の身体が混じっていると、当然ブレます。

一体どの身体スペックに合わせればいいのか分かりません。

振り回された結果、ISさんはいろんな身体にころころと乗り換えていきます。

そして主人公はころころと変わるISの性能に身体が振りまわされます。

しかも主人公は精神と肉体を別々に考えているだけではなく、根本的にこのISを信用していません。

シンクロどころではありません。適性値が上がる筈がありません。

つまり、ISと主人公は互いに互いを振りまわし合った揚句にすれ違いまくっているという最悪の相性なのです。

ちなみに最後主人公が倒れたのは、能力使用によるフィードバックと、ISとの相性の悪さが原因です。

質問などがあつたら受けつけます。

19（前書き）

ここはボク達に任せて先に行きなよ。
いつも言ってるだろ？ この戦闘は^{ゲーム}3人用なんだよ。

——スネ夫

書き方には気を付けていた筈ですが、やはり癖というものが出てしまつようで、どうも自分は他の方がサラツと終わらせるような所をグダグダと書いてしまつらしいです。

要するに展開が遅い、ということですね。

side:一夏

あの試合の後、結局その日はユウの目が覚めることは無かった。

ユウが倒れた時の事はよく覚えていない。どうもひどく取り乱していたらしく、その時の事を語るあの場に居た3人はとても驚いていた。ただ、千冬姉だけはどこか納得したような色も浮かんでいたが。

そして翌日、クラス代表に就任することになったが、そこには居るべき筈の人間が居ない。本来クラス代表になるべき筈の人間が、居なかった。

「あの、一夏さん。先日は申し訳ございませんでしたわ」

「いや、そんなに謝らないでくれ。謝らなくちゃいけないのは俺も一緒だから」

そう、俺も同罪だ。

セシリアが何やら俺に謝罪の言葉を並べていたが、別に俺は謝罪なんて求めていない。

俺が望むのは、ここには居ない1人の少女——八神優に対する謝罪。

「そ、そんな……と、ところで、ユウさんの姿が見えませんが、今日はお休みですの？」

何故かセシリアの表情に朱がさしていたが、そんな事よりもセシリアの言葉の中の彼女の名前に思わず反応する。そういえばセシリア

は俺の事も名前で呼んでいた。俺もユウも、この少女に認められたということだろうか。それがどうすごいのかは分からないが。

「ああ、そうらしい」

絞り出された声は、自分でもびっくりする位に落ち込み、草臥れていた。どうも彼女が倒れたという事実は、思った以上に俺へのダメージとなっていたようだ。

思わず彼女の席へと視線を向ける。

千冬姉曰く、彼女の目は、まだ覚めていない。

放課後、俺は簞に断りを入れ、セシリアと共にユウが眠る寮の一室へと足を運んでいた。

外的負傷が特に無い上にその日は目が覚めなかったため、とりあえず保健室ではなく寮の自室に寝かせておこうという話になったのだ。

ちなみにユウの部屋へ行くと話した時、簞は何故か物凄く複雑そう

な表情をしていたが、「病人の様子を見に行っちゃいけないのか？」という俺の言葉に、なんとか了承してくれた。そしてその筈は今、剣道部部長に捕まって部活動に励んでいる。

ユウの部屋の前にたどり着く。扉をノックし、扉を開……開k……カギがかかっていた。

「……よく考えたら当たり前か。悪いな、セシリア。ユウに謝るのはまた明日ってことで」

「仕方ありませんわね……」

俺が自室へ戻ろうと、隣の扉へと目を向けた、その時

「は、はい。いまあけまゝす」

扉の向こうから、かなりダルそうな声と呼吸音が響く。どうやら声の主は息切れを起こしているらしい。そしてドアノブが回転し、ゆつくりと木製の扉が開いた。

「ゆ、ユウ？」

まず目に飛び込んできたのは長く艶やかな黒髪。次に俺を上目遣い気味に見上げる薄く赤らんだ眼と、元から白かったがさらに白くなっている肌に滲んだ汗。そして『ダルいです！』と叫んでいるかのような表情を作る、人形のように整った顔。さらには俺の耳を刺激する、微熱を帯びる乱れた呼吸音。

そう。この部屋の主、八神優その人である。

s i d e o u t

目が覚めた。ベッドで寝ていたのか。

天井を見上げている。見たことのある天井だ。

身体が動かない。どうでもいいか。

部屋が暗い。どうでもいいか。

腹が鳴った。どうでもいいか。

コンコン

ノックだ。誰の？ 誰を訪ねる？

恐らく千冬辺りだろう。そしてこれは、八神優を訪ねるためのノックだ。

「は、はい。いまあけまゝす」

何とか声を絞り出す。というか何だこれは。立ち上がろうとしただけで物凄く疲れる。というか全身の疲労が何一つとして抜けていないようだ。

私は息を切らせながら、おぼつかない足取りで扉へと向かう。っていうか暗いな。電気ぐらい付けろよ私。

そういえば今日は何日だ？ 試合からどれくらい時間が経った？

沸き起こる疑問を押し潰し、カギを開けようとするが上手く力が入らない。両手を使ってようやくカギを捻り、ゆっくりと扉を開く。そこには黒髪スーツ姿の鬼――

「ゆ、ユウ？」

お前かい。

千冬さんではなく、その弟である一夏がいた。そしてその一夏は何故か少し驚いているようだ。何故かは分からないが。

「はあ……はあ……どうしたの？ 一夏くん」

やっぱ疲れた。もう疲れた。マジ疲れた。っていうか憑かれてるんじゃないね？ ……駄目だ。冗談になってなかった。既に（英）霊に憑かれてたな。

「えっ、あ、いや、ちよつと様子を見に来たんだ。って大丈夫か！
？ ホントに辛そうだぞ！？」

あー、うるさい。辛くはない。けどダルい。倦怠感と疲労感が半端
じゃない。

「だ、大丈夫。はあ……それよりも一夏くん、ちよつと肩貸してく
れる？」

「お、おう」

一夏に肩を借りてベッドまで移動する。その際に一夏が修行僧のよ
うな顔つきになっていたが、コイツは何を滅却しているんだ？……
ああ、胸でも当たってたのか？

ベッドにたどり着き、横になる。あー疲れた。

私の身体がどろりと沈み、シーツに疲れが沁み込んでいく。

「んっ、わたくしの事をお忘れではなくって？」

あ？ なんだセシリアか。気が付くと、枕元にセシリアが立ってい
た。

「あれ？ 居たの？ オルコットさん」

「居ましたわ！ それも初めから！」

知らんがな。

セシリアは再び咳払いを1つ。そして頭を下げた。その際にブロン

ドのわさわさしたアレが私の顔に掛かる。邪魔だ。

「その、先日のこと、本当に申し訳ございませんでしたわ」

セシリアの日本式の謝罪（彼女なりに誠意を見せたつもりだろう）に、顔に掛かった髪の毛のせいでかなりむずむずするが、我慢してなんとか返答する。っていうかわざとやってんじゃないだろうな。

「いや、もういいよ。もういいからホントに。だから頭を上げて」

口を開くと、数本の金髪が口に入る。うえっ、ちよろい味がする。

セシリアが頭を上げたかと思えば、今度は一夏が口を開いた。

「俺も……俺がユウを巻き込まなきゃ、ユウが倒れることなんてなかったのに……。ホントにごめん」

するとその言葉に私よりも早く反応するセシリアさん。一夏の方へバツと振り向き、彼に反論する。

「そんな！ それについてはわたくしに原因がありますわ！ そもそもわたくしがあのような挑発をしなければ……」

「いや、でも俺が考えなしに喧嘩に発展させたから……」

「しかしわたくしが……」

「けど俺が……」

うんうん。そうだね。お前ら両方悪いね。それはもう分かり切って

るから、いい加減病人（？）の前でイチャつくなや。ラブコメなら向こうでやれ。鬱陶しい。

「ねえ二人とも、もうそれについては全然怒ってないから。っていうか初めから怒ってないから。だからさ、とりあえず静かにしてくれないかな？」

私の言葉に含まれる刺々しいニュアンスを感じたのか、しゅんと縮こまる二人。そして微妙になる空気。

それに耐えられなくなったのだろう。セシリアは「そ、それではまた明日学校で。それから、わたくしのことはセシリアとお呼びくださいませ」などと言い残して部屋から出て行った。

「そういえばユウ。その目、どうしたんだ？」

セシリアが自室に戻り、2人きりとなった部屋の中。不意に一夏が疑問を溢した。

「目？ どういうこと？」

私は自身の瞼に触れる。一体この目がどうしたというのだろうか。

「いや、少し赤くなってるからさ。ISを使ってた時程じゃないけど」

何だと？ いやいやちょっと待て。

「赤くなってるって……虹彩の色が赤いってこと？」

「ああ。まあ赤いつて言っても少しだけだな」

ええー、マジで？ 何故に？ ホント何で？

当然だが、今私は能力を使っていない。にもかかわらず眼の色が変わっているというのか？

まあ、気にしても仕方が無いか。

私はいつもの如く思考を打ち切り、とりあえずこの後の事について考える。

と、ここで次の行動を決定づける音が鳴り響いた。まあ要するに、私の身体が空腹を訴えたということだ。

そして、つい思わず、といった感じで吹き出す一夏。気持ちは分かっていなくてもない。

「それじゃあ飯にしようぜ。動けるか？」

無理に決まっている。

「ごめん、ちょっとキツいかな……」

ははは、と乾いた笑いが私から漏れる。

食事とかどうでもいいからとりあえず出ていってくれ。もう疲れた。

すると一夏は何を思ったのか、食堂から何かを持ってくるとのたまいやがった。要らない。要らないから。とにかく休ませてくれ。

「気持ちはいがたいけどさ、一夏くんって有名人だし。食堂なんて行ったら絶対に囲まれて身動きとれなくなるよね」

本人もその可能性に思い当たったのか、顎に手を当てて何やら考え込む。考えなくていいよ、ホント。

そしてぽんっ、と手を打ち、何かを思いついたような顔になる。その思いつきはきっと要らない思いつきだ。捨てなさい。

「だったら俺が何か作ってやるよ」

にこにこ厭味の無い笑顔で言い放つ一夏。しまった、その手があったか。

「いやいや、悪いよ。本当にいいから。大丈夫だから」

「遠慮すんなって。こうなったのも俺のせいだし。これくらい頼ってくれよ。それじゃあ何か作ってくる」

お粥とかの方がいいかな、などと呟きながら自室へ戻る一夏。

文字どおりの意味で余計な御世話だよコンチクショウ。

しばらくして、温かそうに湯気を上げるお粥様がやってきた。トレイに乗ったそれは製作者である一夏の手によって枕元の台に置かれる。

「自分で起きれそうか？」

「ごめん、ちよつと手貸して」

自身の言葉に諦めにも似た感情が滲む。もういいよ。食ってやるよ。別に要らなかったけど、食ってやるよ。

弁当の時とは違い、今は病人であるから食べなくても不自然ではない。よって食べなくても問題は無いと思ったのだが……もうここまですでに食べない訳にはいかない。これ以上断り続けるのもいささか不自然だろう。

差し出される一夏の手に捕まり、体重を掛ける。しかし上手く力が入らず、バランスをくずしてしまう。

「え？ うおっ！」

一夏の驚き混じりの悲鳴が聞こえる。そう、私は一夏の手を掴んだままバランスを崩したのだ。私の全体重を支えきれなかった一夏の片腕を巻き込み、ベッドへと倒れ込む。

するとどうなったか。まあなんとというか、ベッドの上で私と一夏が向かい合う事になった。それも私が下で一夏が上という位置関係。有り体に言えば、押し倒された状態だ。しかも一夏のもう片方の手はぱっちり私の胸を捕えている。どうやら一夏のラッキースケベが発動したらしい。っていうかちょっと痛い。

さて、気を取り直して

「それじゃあいただきます」

そう告げて、スプーンを手取る私。だが、カラン、という間の抜けた効果音と共に、スプーンが再びトレイに戻っていく。

「……一人で食べそうか……って、聞くまでも無いな」

「うん、ごめん。ちょっと無理かな」

その言葉の直後、一夏は思い悩むような表情を見せ、カッと眼を見

開く。

スーパー主人公タイム——発動。

一夏は何やら決意したような面持ちでスプーンを手に取り、お粥を掬いあげた。そしてそれを私の口元に近付け、

「ほら、あ、あーん」

……ん？ 近くにヒロインでもいるのか？ 思わず室内の気配を探るが、やはり居る筈はない。

ではこの『あーん』の対象は私ということになる。あれ？ これって私の役目だっけ？

「は、早くしてくれ。地味に恥ずかしい……」

そう言つて顔を赤らめ、視線を斜め下に向ける一夏。不思議だ。今コイツがヒロインに見えた。

「……あーん」

私は湯気の立つお粥を見つめ、観念したように眼を閉じ、口を開く。そして口内に広がるお粥の——ガチャ

私のグルメレポートを遮り、扉が開かれる。だれだ？

「二人ともいるー？ 実はこの後食堂で……」

扉の前で名も知らぬ女子生徒が硬直している。2人ともという言葉から察するに、この部屋に一夏がいるという事を恐らくセシリアにでも聞いたのだろう。そしてこの後食堂で何かをするらしい。私の記憶が正しければ、確か一夏の就任おめでとうパーティー的な感じのイベントだったはず。

この間0・1秒。ハイパーハイススピードばりの思考の後、瞬時に現状を分析する。

今私はスプーンを口にくわえている。そしてそのスプーンは一夏が持っている。つまり食べさせてもらっている。この状況は非常にまずい。一夏を妄信的に祭り上げるヤツらだ。これで騒がないはずが無い。

案の定、次の瞬間には女子生徒の「ずるーい！」という叫びにより、他の女子生徒がこの部屋に押し掛けるといふ事態に発展した。私が何をしたというのだ。

ちなみに翌日には身体中にのしかかっていた疲労感と倦怠感はすっかり消えていたが、眼の色はやはり若干赤かった。ホント、何なんだろうね。

え？ 就任パーティー？ 無論参加しなかった。

19（後書き）

スネ夫の言うとおりだ。それにオレだっていつも言ってるだろ？

「お前の物はオレの物、オレの物もオレの物」ってな。

だからこの戦いをお前に譲るわけにはいかないのさ。

——ジャイアン

ちよつと宿題のために更新が出来なくなるかもしれません。という
か知恵熱で頭が吹き飛ぶかもしれません。

というわけで諸君、靖国で会おう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074z/>

FateでIS

2012年1月8日19時50分発行